
檸檬以上 蜂蜜未満で 林檎以下

水沢 莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

檸檬以上 蜂蜜未満で 林檎以下

【NZコード】

N8259D

【作者名】

水沢 莉

【あらすじ】

「夢とか目標とかこれと言つてないし、何をしたらいいのかもよく分からぬいけれど、そのうち変われるかもつていう希望みたいなのは持つていい」高校卒業と同時に上京した由佳は、一つ年上で幼なじみの敦司の部屋に居候。不安材料を抱えながらの初めての生活、バイト、恋…待つていたのはなかなかハードな日々でした。春企画「はじめての×××。」参加作品です。

1・不夜城とか歌舞伎町の女とか（前書き）

この作品は「春の小説競作企画」はじめての×××。 参加作品です。

無気力氣味な女の子の心の成長を軸にしています。

「じゅるりとお読みください」。

1・不夜城とか歌舞伎町の女とか

もう戻ろうと思っていた。

くたくたで、ぐだぐだつた。

ダルさがピークに達している足は前に踏み出すのもやっとなのに、すっかり張つてしまつたふくらはぎがジーンズの隙間を埋めているから、歩行が余計にままならない。

地面に食い込むような脱力加減。

パン生地を踏みつけて歩いたらこんな感じなんだろうか…などと、こんな状態でもわたしはどうでもいいことを想像してしまう。

昼間おろしたばかりの黒いスニーカーを無理矢理ひつペ返して靴底を見ると、実際ガムがへばり付いていた。

「はあ……最悪だ」

人の流れも気にせず立ち止まる。

しゃがみ込んでアスファルトにずりずりと靴底を擦り付けないと、消しゴムカスみたいに丸まつた、こ汚いガムが剥がれ落ちた。

頭の上で誰かの笑い声がする。

顔を上げる氣にもなれなかつた。

もうすっかり夜だつた。

気がついたら歩道は人で溢れかえつていて、すっかり顔を変えた街は、日中のそれとはまるで違つていた。

溢れる人、人、人、靴音と話し声。

このまま寝転がつてしまいたいという衝動に駆られて、慌てて頭をふり、立ち上がる。

軽くめまいがする。早く戻りたかった。

「何時間歩いたろう

ポケットから携帯を取り出して時間を確認すると、八時を過ぎていた。

「あーと、三時からだから、四、五、六、七、八…って、五時間じやん」

指折りした片手がグーになり、五時間もこつこつとまよっていただけの自分にため息が漏れる。

「つむじで眺めていたガムは、前から来た誰かの靴底に張り付いて、まだどこかへ消えていった。

歌舞伎町に来ていた。

上京して初の、職探しのつもりだった。

はじめからまともな仕事を見つける気なんてなかつた。

手っ取り早く、とりあえず、ぱぱっとこなせる仕事がどこかに転がってるんではないかと、知りもしないのに昔どこかで聞いた歌詞を思い出して乗り込んできただけだった。

コマ劇場前を過ぎ、メインストリートに戻り、また裏通りに入つてセントラルロードをぶらついて、一丁目周辺で同じことを繰り返しているうちに、何周田かで漠然と「なんか違うかも」と思つたけれど、戻るのも向となくシャクに触つた。

「コンビニに入り、ペットボトルのお茶を買い、飲みながら歩いて、しらみつぶしに看板を当たつた。

「キヤバ嬢」のところもあれば「可愛い子に限る」なんていうのもあり、「ヒステーション」くらいの遠まわしにもならない表現もある

れば「接客係」なんてソフトな書き方をしているものもあった。

ま、大差ないだろ？

そのどれかを探しに来たのだ。

けれど握り締めたペットボトルのお茶がだんだんと減つてくるにつれ、そのどれもが自分には係わりのないもののように思えてきて仕方なかつた。

気持ちを立て直し、今度は時給を確認しながらまた歩く。

これも大差はなかつた。

どれもこれも、「ンビニの「時給750円」なんかと比べれば、ぐんと魅力的な報酬額だ。

男に酒を注ぎ、タバコに火をつけて、話を聞いて微笑んで、「すごい」と言ってタッチして、普通より高い金がもらえるんなら、それでいい。

「飛び込み・日払い可」が欲しかつたわたしは、今度はそれを探して、山手線みたいにひらすらぐるぐると歌舞伎町を歩き回つた。

なのに収穫はゼロだった。

そのままいつづいたらぱちぱちと電飾看板が光り始めた。

やがてぽちぽちはきらきらになり、ピンクやら黄色やらブルーや
らに照らされた人の顔が忙せわしなく通り過ぎるようになっていた。

====七拍子の調子が外れたようなリズムで光る背の低いビルを見
上げると、日中は全然目に入らなかつたホストたちの顔写真がずら
りと並んでいた。

たいして興味もないけれど、立ち止まって眺めてみた。

皆、一様に上目遣いで、何となく、挑発的だ。

必要以上にライタアップされている写真を一人ひとり確認し、「
一番右かな」と品定めしたところできびすを返す。

数メートル先の引っ込んだ入り口の奥にあるピンク看板には、ソ
ープ嬢の笑顔が敷き詰められていた。

立ち止まり、目を擦り、凝視する。

一步一歩と足を進めたけれど、それ以上前に行くには好奇心より
度胸のほうが足りなかつた。

(あの女とあの女には勝つたな)

負け惜しみのようなセリフを胸の内で吐くと、何だか一気に疲れ
てしまつて、あぐびが出た。

口を開いたまま振り返ると、ニヤニヤした若い男がすぐ傍にいて、
文字通り飛び上がったわたしは、慌ててその場を離れた。

あんなのに触れたら腐つてしまふかもしれない。

酔っ払い、学生、黒服、白いスーツ、たまに黄色い派手なスーツ、意味もなくサングラス。

拳句にこの電飾の海。

ぐたぐたで、ぐだぐだだった。

戻りたかった。

けれどいまでは帰れない気がした。

「だらだらしてないで、ちつとは仕事探してみるくらいした?」

敦司^{あつし}に言われてなければ、こんなところになんて来なかつた。

不夜城とか、歌舞伎町の女とか、聞きかじりが膨張した想像を抱えて、足が吸盤になるまで歩くことなんてしなかつたんだ。

居候の身としては金を持って帰りたかったのだ。少しでも。

ピンク色が身体にまとわり付く。

砂糖に群がるアリのよつに固まつた若い男のグループが、立ち尽くすわたしの肩にぶつかつて、大声で笑いながら過ぎていった。

グーになつたままのわたしの手のひらは汗ばんでいた。

油の匂いと埃の混じつた空氣は生ぬるい。

地面に吸い付く足をなんとか持ち上げ、人ごみと電飾から逃れる
ように、わたしは裏通りへ身体を押し込んだ。

2・ストレイキャット

裏通りに入ると、人の流れも看板もそれなりの分量で散らばっているだけになる。

どういうわけか漢字ばかりの看板が増えるので、教科書の中に入るものみたいだ。

思いのほか薄暗い裏通りは、かえって原色看板の灯りが目立つて眩しいのだけれど、さつきまで突っ立っていた場所に比べれば全然余裕だ。

読めない漢字がかえって心を落ち着かせる。

ふうっと息を吐く。

大丈夫だ、呼吸はまだ乱れていない。

日中、何度も通り過ぎて何度もメニューをチェックしたラーメン屋から、店先を僅かに染める程度の弱い灯りが漏れている。

脇に積まれたビールケースの隙間から、茶色の縞模様の猫がこつちを見ていた。

近寄ると、はうううと威嚇されたけれど、猫のほうに逃げる気はないらしい。

都会の猫は強気だ。

裏手から流れてくる、味噌みたいな豚骨みたいな、もんやりした匂いに腹が鳴る。

そういうえば昼に近い朝食に、バターを落とした食パンをかじつたつきり、何も食べていなかつた。

空腹に氣づくと、ひととん飢えた氣分になる。

のれんの隙間から、つま先立ちして中を覗き込んでみたけれど、薄汚れたうえに更に湯気で曇っているガラス窓からは何も見えなかつた。

ただ、イイ匂いが漏れてくるだけだ。

ジーンズのポケットに手を入れて、小銭を確認してみる。

引き抜くまでもなく、ちゃりちゃりと僅かばかりの感触が伝わつてくるだけだつた。

これを使ってしまつたら戻れない。諦めるしかなかつた。

もう帰ろひつ、と一步下がつたときこ、背後から突然肩を叩かれた。

「ひょっと頬

「ひいっ」

吸い込んだ息は、思った以上に喉を締め上げて、そして心臓を飛び上がらせた。

左肩に乗せられた手の感触に全神経が流れ込む。

横目でそれを確認すると、ラーメン屋から漏れる灯りが太くてごつごつした指先を照らし出していた。

なんだ、なんだなんだなんだ。

逃れるタイミングを失っていた。

振り向くともできず、わたしは両肩を上げたまま固まつた。

ダメなのだ。

突然のこのひこうとせ。

飛び上がった心臓は、胸を突き破つて出ていくんじゃないかなと思う、どぐどぐと骨を打つて暴れている。

マズイ、かなり。

男が背後からわたしの前に姿を現すまで、左肩に乗せられたグローブみたいな指と、前足を揃えてじつとわたしをじらんでいた。きの猫に交互に視線を泳がせるしかできずについた。

わたしの前に立ったその男は、けれど予想外な笑顔で微笑んだ。

「お腹、空いてるの？」

「うーん」と、中年男が口を開く。

指の印象からは想像もつかないやせ細った男だった。

銀縁の奥の目だけがやけに大きく光つて見える。笑う前歯の一本は、黒ずんでいた。

「君、わざわざから」の辺歩き回つてたよね。何か探しもの？」

薄い唇が続ける。

笑っているのに、頬は骨格に沿つよつてんでいて、この上なく貧弱に見えた。

おもいきつて飛びかかったら、勝てそうな気がする。

しかし笑顔に悪意は感じられない。

骸骨みたい…と薄つすら思つ余裕ができていた。

「これからおじさんラーメン食べよつと思つたんだけど、君も一緒にどう?」

は? と首をかしげると、田の前の骸骨はまたにこりと微笑んで続けた。

「もちろん!」馳走するから。一人で食べるより二人のほうが美味しい感じるでしょ。ああ、無理にとは言わないし、お腹空いてればの話なんだけじね。どう?

いやあ、今日は蒸すねえ…なんてネクタイを緩めている。

グレーの大きすぎるステッツに身を包んだ男は、サラリーマンっぽく見える。

左手に上げた黒い鞄は、角のところが剥げて、そして少し窪んでいた。

骸骨みたいな顔以外、落ち着いてよく見ると、そんなに悪い印象はなかつた。

何しろ腹が減っていた。

食べさせてもらえるなら、この際誰でもいい。

棒のよつこ固まつた足も、どこかで休めたかつた。

「あの……減つてます」

「そつかそつか、じゃあ、一緒に食べよつ」

「でもその……いいんですか？」

「いいの、いいの」

男は振り向き、わざとそのれんをくぐつて中に入つていつてしまふ。

いや、やっぱりオカシイでしょ……そう思つてその場を離れようとしたけれど、男が開いたドアから一気にスープの匂いが押し寄せてきた。

まあ、ラーメンくらいいか。

瞬時にそう思い直せる自分の脳にあきれたけれど、空腹に負けたわたしは、初対面の一言一言話しただけの男に誘われて中に入つた。

「れじや野良猫じやないか。

頭の悪いじいさん、その言葉を押しあげてい。

ストレイキャット。

英語にしてしまえば、なかなかカッコいいじゃん」と呟いていた。

3・カラオケだけだから

店内は煙ついていて、空気は湿つていて、案の定、静かだった。

中国人らしき店主と客の若い男が一人、朱色のカウンターを挟んで向かい合っている。

カウンターの端っこに新聞紙がたくさん積んである。ちょっと押せば、崩れそうだ。

人ごみから開放されたわたしはその閑散さに安堵し、カウンターにつくなり出された水を一気に飲み干した。

すうっと食道を下る冷たさが気持ちいい。

胃を過ぎた水がくねくねと腸を流れていって、ああこんなにお腹が空いてたんだと思つたら、笑えた。

隣の骸骨をちらりと見て、歌舞伎町のメインストリートを思い浮かべる。

田の裏に映像をよみがえらせると、改めて男密度の濃い街だとコップを戻しながら軽く身震いした。

ぐつと伸びをして、ストレッチついでに店内を見回してみる。

まだらに汚れた茶色の壁には、変色した紙が適当に貼られている。

その上にへたくそな筆字でメニュー名が書かれていて、どうやらそれを見て、注文するらしい。

『醤油ラー麺』『ミンラー麺』『チャーシュウ麺』『チャーハン』

……

わたしがこの店の前を何度も通り、何度も看板に書かれたメニューを見直していたのは、このカタコトの日本語の、読みにくさの、面白さからだった。

小さい頃からわたしは、ビリでもいいものに心惹かれてしまうところがある。

スマックを着て、黄色い鞄を提げて、まだわたしが年相応にハツラツとしていた当時、同じ年長組だった亜子ちゃんという女の子を泣かせてしまったことがある。

お弁当の時間、亜子ちゃんのヌースーピーの描かれた赤いお弁当箱の左上に、タコさんワインナーが入っているのを発見したときのことだ。

タコさんの足を数えると六本だった。それがどうにも気になつた。

タコの足は八本だ。

父と茶色いテーブルを挟むひつそりといつもの夕食で、スーパーのパックに入れたままのぶつ切りのタコを口に運ぶ父の姿を、

わたしは気味悪い思いで眺めていた。

ぶちぶちの丸い吸盤。赤みたいな紫みたいな奇妙な食べ物。

タコを口の中でいつまでも噛みしじきながら、眉間に皺を寄せるわたしに父が教えてくれたのは、タコの足はハ本だという豆知識だった。

なのに、亜子ちゃんのタコさんの足は六本なのだ。

それがどうにも気になつて亜子さんに豆知識をひけらかしていたら、彼女の黒くて大きな目から、いつのまにか涙がぽろぽろとこぼれていた。

裕子先生に叱られた。

「でもやつぱりハ本だもん」といつまでも小さな反抗を続けるわたしをなだめる先生の顔は、今思えば、怒つてもいなければ、嘆いてもいいなかつた。

苦笑いの顔とともに言つんだら。

わたしはそれから、同じ顔をいくつも見てきた。

他の人にとつては何でもないものが、わたしには重要だつたり、貴重だつたりする。

しかし関心を持ったそのほとんどがたいして役にたつものではないので、結局、どうでもいいものばかりが身体に、知識に、経験に、増えていくだけだった。

未だに、正しいとされる判断の、基準とかボーダーラインがどういつものなのか、わたしは分かつていないうつな気がする。

「とりあえず醤油ラーメン」と注文すると、「あこな」とぶつからぽつに店主が答えた。

となりで骸骨と店主がなにやら親しげに会話を始めたけれど、わたしはカヤの外だ。

その様子を、観察する。

よく来るのだろうか、ここにある、この店を、あえて選んで。

店主の発する言葉もメニュー同様たどたどしくて、つい吹き出しそうになるのを堪えてもう一杯水を飲んだ。

べたべたに汚れた回転椅子とカウンターが気になつたけれど、力の抜けきつた「こうこう」と「こうは、なんとなく居心地がいい。

足が休まつた開放感も手伝つて、身体をよじつてぐるぐると回転椅子で遊ぶ余裕も出てきていた。

醤油ラーメンの差し出されたカウンターで、割り箸をぱちりと弾

く。

真ん中から上手く割れた。何かいいことがありそつだと思つてみる。

骸骨は黙々とラーメンをすすっている。

「一人で食べたほうが美味しいから」と言つたくせに、わたしに話しかけてくることはなく、時々店主と会話を交わすのみで、こちらをちらりとも見やしない。

まあ、そのほうが気楽だつた。

人と話すのにはエネルギーがいる。

会話にエネルギーを消費するくらいなら、沈黙に耐えていたほうがわたしにはラクだ。

やや脂臭い感はあつたけれど、ラーメンはそれなりに美味しかつた。

三杯目の水を飲み干し、ほっと一息入れる。

骸骨はおしごりでメガネ拭いていた。

顔の大半を閉めていたメガネが外れると、骸骨さ加減はますます濃くなつていて、本当に病人みたいに見えた。

なんだか申し訳なくなつて視線をカウンターに移す。

器の汁の表面で、クラゲの集団みたいな脂が揺れている。

「つむいたわたしの顔が、いくつも映っている。

少し、眠そうだ。

「これから時間ある?」

骸骨はおもむろに口を開いてそつと呟つた。

「はい?」

店に入つて初めてわたしにかけられた男の言葉。

意味よりも、唐突さに困惑つた。

メガネ拭いていたおしほりと同じもので顔をぬぐつた男は、首をかしげるわたしに構わず言葉を続ける。

「カラオケ好き?」

「はあ」

「ちよつとつまづいてくれないかな」

「カラオケ、ですか」

「嫌い？」

「いや、嫌いといつか、数えるくらいしか行ったことがなくて」

突然何を言い出すんだろう、そう思って男をまじまじと見たけれど、骸骨はさつさと会計を済ませて席を立つ。

つらげてわたしも立ち上がる。

尻に張り付いたジーンズは、しつとりしていた。

とりあえず「ありがとうございました」と後姿に声をかけ、男の後について店を出る。

さつきの猫は、もう居なかつた。

「すぐそこだから」

前方を指差し、振り返った男は、ぼんやりとしているわたしの腕を取つて歩き出す。

途端、わたしの心臓は跳ね上がつた。

つかまれた腕が熱い。

「ちゅう…」

放して、と声にしみりとしたけれど、喉に詰まつて出でこなかつた。

動悸したまま、弓をかじられるようにして男の後についていくしかなかつた。

「うーん、カラオケできるかな？」

男が立ち止まつた場所は明らかにラブホの入り口前だつた。

焦つた。

カラオケなんてこんなとこひどやる必要ないだろ？、と思つてみたけれど、ああやつぱつとこう貯持ちで胃が締め付けられる。

それよりも、男につかまれている腕のほうが気になつて仕方ない。

早く放してくれ、と言つたのに、やつぱり声は出なかつた。

「いいよね？」

骸骨が笑う。

なかなかいい印象を持っていたさつきまでの笑顔は、まるで別人のようだった。

窪んだ頬が影を作り、銀縁の奥の目は隣のピンサロ店の明かりを受けてきらきらと気持ち悪く光っていた。

「カラオケだけだから」

マズイ、どうじよい。

足がすべむ。

胃はますます締め上げられ、口の中に胃液が込み上げてきた。

奥歯をかみ締めて、ぐつと堪える。

ラーメンにつられた自分が馬鹿だった。

よく考えれば、いや、考えなくたって分かるようなことだ。

誰が見ず知らずの他人に、気前良く飯をおじるんだ。

上京してまもないとはいって、こんな安直な手に引っかかるなんて、わたしという人間はなんて世間知らずなのかと。

男の力は、体格からは想像つかないほど強かつた。

逃げる隙も与えてもらはず、わたしはあるすると中に入るしかなかつた。

4・死ぬかもしない

三階まで昇る狭いエレベーターの中で、わたしは男に腕をつかまれたまま、うつむいていた。

男の黒い革靴とわたしの黒いスニーカーは、人ひとり分もない距離で並んでいた。

ぎゅっと手をつぶる。

逃げたほうがいいんだろ？　いや、こいつもませ。

けれど、わたしはどこかで諦めていた。

これが援交か。いいじゃん、それで。

手つ取り早く、金が欲しかったんだ。逆に考えればラッキーじゃん。

無理にでもそう思おうとしていた。

田を開くと、男の足が数歩前に出ていた。

床の隅のほうに、小さヒーピアスが転がって光っていた。

エレベーターを降り、男が部屋のドアを開くと、薄暗い部屋のなかの色あせたカーペットが田に飛び込んできた。

ゆるゆるした音楽が流れている。

ぱたんとドアが閉まり、部屋のなかを進むと、枕もとの蛍光灯に照らされた白いベッドが壁際に置かれていた。

狭い部屋で、それだけがやけに大きく見える。

カーペット以外は真新しく、薄暗さの中に白々と浮かび上がる大きすぎるベッドをのぞけば、普通の部屋となんら変わりなく見えた。大きなテレビがついて、安っぽいソファがあつて、テーブルがついて。

陳腐なカラオケマイクが一本、テレビボードに突っ込まれて置いてあるだけだ。

ラブホなんて初めて入ったけれど、なんだこんなものかと、この状況でも少しがつかりした。

もつといへ、お姫様みたいな気分になれると思つていた。

高校生時代、「行つてきた」と自慢していた女子の会話から頭に仕込んでいた前情報とはだいぶ違つている。

田舎のホテルのほうが、案外快適なのかもしれない。

密閉された重苦しい空気は、他人の部屋に上がりこんでしまったときのように気持ち悪かったけれど、もう腹をくくる」とした。

男は上着を脱ぎ、マイクの方など一度も見もせず、ネクタイまで外している。

処女を捨てるなんて、こんなもんなんだろ？

勢いか、焦りか、過ちか。

初めての相手が誰かなんて、思い出としてとておくれどものものでないと思つ。

むしろ恥ずかしさと痛みのほうが、記憶に残るのだらうから。

バスルームから、ジャワジャワと勢いのいい音が聞こえてくる。

いつのまにかパンツと靴下だけの格好になっていた男は、にやにやしながら部屋に戻ってきた。

『やあ』とした。

生白い身体は、やつぱり骸骨だ。

浮き上がったあばらは、別の意味で恐怖心をよみがえらせた。

わたしの田の前まで来た男はおもむろにパンツを下ろした。そして靴下を脱ぎ捨てた。

凝視するしかなかつた。声など出でこない。

その身体に、それか。

初めて見た。こんなになるものなんだらうか。

震えさえ起きなかつた。ただ啞然として眺めていた。

一ヤついた男は背を反らし、どじか満足げに腹をさすつてゐる。

「先に入つてくるから、トレーディも見てて。ちょっと待つてね」

鼻にかかる声で男はそつまつと、わたしの返事など待ちもせず、やや小走りでバスルームへ戻つていぐ。

わたしはへなへなと力なく床にへたり込んだ。

田の前に、男の脱ぎ捨てたパンツと靴下。

小さくさくらんぼが散らばった紺色のパンツだった。足先が擦れた靴下はゴムが伸びていた。

思い出なんて、抱え込むだけ無駄なものはない。にしても、これじや記憶にばっかり残る。

過ちで済めばいいけれど、わたしはここで死ぬかもしれない。

ちよつと待つてね？ 待つてまですることのものだらうか、あの男と。

死ぬかもしれないときの相手くじ一、やつぱりくじやこと選びたい。

バスルームから、シャワーの音と、何だか分からぬメロディーの鼻歌が聞こえてくる。

わたしはドアの隙間から這い出すように漏れてくる匂い湯気を眺めていた。

呼吸が速くなってきていく。

「逃げよ」

決心は早かつた。

立ち上がり、まつりと深呼吸をしてから、だらしなく丸まつた男のパンツを踏みつけ、ドアへ向かう途中で気がついた。

テレビボーイの隅に置かれた男の黒い鞄。

「ぐるりと睡を飲み込んで、じつと見下りした。

きよりきよりと、誰もいないはずの部屋を見渡し、しゃがみ込む。

バスルームからは、まだ男の鼻歌が聞こえてくる。

角だけ窪んでいると思っていた鞄は、全体的にくたびれていた。ナラリーマンの背中そのものだ。

変色した持ち手部分に触れないようにして、静かに開けた。

手帳と何かの書類、水着を着た女が表紙の雑誌、栄養ドリンクの空き瓶と、薬袋。

くじゅくじゅの薬袋には、「北田義則様」と書かれている。

他人の名前は文字にあると、もつとずつと遠くの誰かに感じじる。

眼鏡ケースとボールペン、そして一いつ折りの黒い財布に行き当たつて手を止めた。

確認するだけだ、と自分に言い訳をして中身を抜き出し、数えて

みる。

一万円札が一枚と、千円札が三枚。

これだけでも持つて帰れば、一日のアルバイト代としてはたいした額だ。

一瞬そんな考えが浮かんだ頭をぶんぶんと振って、金を財布に引っ込む。

財布を鞄に戻しかけたときこ、ふと思つた。

ぎりぎりの緊張感のもとでは、案外、頭の回転も速くなるものらしい。

わたしは、この金で買われようとしていたのだろうか。

一万、三千円で。聞いている相場の半分以下で。

そもそも、男のほうにわたしを賣つなどせりあらなかつたのではないか。

ラーメン一杯で釣れた、ラッキー、ぐらいの気持ちで鼻歌なんぞ歌つているのだろう。

あばらの上に、石鹼を滑らせてくるのだろう。

嘘みたいに立ち上がったあれを、じりじり洗つてこるのだらう。

860円で釣れた女といれからゐ」と想像して、やが氣分の
いこゝだらう。

思つてこゝに胸やけに似たむかむか感が込み上げてきた。

もう、震えていなかつた。

なんとなく千円札三枚は引っ込めて、一万円札を尻ポケットに押し込んだ。

立ち上がつてから、もう一度しゃがんで、雑誌を引き抜いて小脇に挟んだ。

シャワーの音が止む。

からんと音がして、男の鼻歌も止まつた。

足音を立てないよにして、わたしはバスルームの前を通り過ぎた。

擦りガラスに映る肌色の輪郭はぼやけていて、ただのカタマリにしか見えない。

入りロードアを開くと、かちゅっと音がして、ぴんぽんと甲高い電

子音がした。

驚いて、部屋から駆け出した。

振り向かず、非常階段を転がるように駆け下りた。

自動ドアの前でホテルに入ってきたカップルとおもいきりぶつかつて、よろめいた女の人が「きや」と声をあげたけれど、謝る余裕なんてまったくなかつたわたしは、猫のようにひらすらに前進した。

歌舞伎町の人ごみのなかを、全力で走る。

どこまで走つても、追いかけられているような気がして振り向けなかつた。

ピンク色は、わたしに執拗についてくる。

足がもつれて、派手に転んだ。

雑誌は一メートルくらい先まで飛んで、水着の外れた女が横たわっているページを開いている。

アスファルトは、生ぬるかつた。

手のひらを見ると、滲んだ血の隙間に細かい砂がいっぱい挟まっている。

人、人、人、靴音。

耳元でするたくさんの音は、雑誌とわたしを取り囲むようにして、
だけど絶えず流れしていく。

一メートル先でしんなりと横たわる女の写真を見ながら、自分は
歌舞伎町の女には絶対なれないだろう、地面に突つ伏したまま、そ
う思つた。

5・東京で頼れる人間は

とぼとぼと、新宿駅へ向かう。

擦りむいた手のひらが、ひりひりする。

打ち付けた膝は、ジーンズに擦れて痛い。カクカクと笑つてさえ
いる。

久しぶりの全力疾走は、身体のあちこちの力を抜けさせた。

胃は重く、なんとなく奥の方がきつきりと痛んでいる。

深呼吸をすれば少しばらマシになるだらうかと思い、めいっぱい空
気を吸い込んで、その勢いのまま息を吐き出したら、豪快なゲップ
が出て、焦った。

しかしいぐらかラクになる。

放置してこようかと思った雑誌は、けれど二つ折りにして、ジー
ンズと腰の間に挟みこんできた。敦司への手土産のつもりだった。
男は、こういうのが好きだらう。

隙間から少し冷たい空気が入ってきて、しめたパンツがひんやりする。

顔を上げるのも面倒で、スニーカーの足先を見つめてただぼんや
りする。

りと歩いていたら、自分がどこにいるのか一瞬、分からなくなつた。

きょろきょろと辺りを見回すと、低いところからぞくぞくと頭が現れて、そこが地下通路へ繋がる階段だと気づく。

一步足を踏み出すたびに膝がかくんと沈み込んでしまって、手すりにつかまりながら、お婆さんみたいに腰を曲げて慎重にくだつた。地下に入ると、時々へんにぬるい風がぶわっと首筋を通り抜けていく。

地下道は嫌いだ。

接着剤みたいな、ガムテープみたいな、粘着力の強そうな匁いがする。そのまま動けなくなってしまうような気持ちに陥つて、いつもなんとなく小走りになつてしまつ。

人の波に押されるようにして駅構内を横断し、券売機の前に着いてポケットに手を入れる。

小銭にたどり着く前に、紙の感触で手が止まつた。

引き抜いた一万円札は、しなりとしていて、くしゃくしゃに縮こまつっていた。

両手で端をつかみ、そっぽを向いた諭吉を見つめてみる。

視線を逸らしている分、何だか無視されているような気持ちになり、半分ムキになつてその目を睨みつけたけれど、かえつて惨め

になるだけだった。

それどころか、札に描かれたその顔が次第にさつきの男の顔に見えてきて、手が震えた。

「やにやと笑うへこんだ頬。

あばらの浮いた白い身体、信じられない勢いで起つていたアレ……が見つめる諭吉の顔とは別のところに浮かんできて、全身が震えだした。

札を握りつぶして、ポケットに押し込む。

小銭を取り出し、券売機に入れようと手をかけたけれど、治まらない震えは酷くなるいつぽうで、わたしは両手で身体を包んでその場にしゃがみ込んだ。

田の前を何人もの足が行き来している。

時々、革靴やヒールが立ち止まるのだけれど、声をかけてくる人はいなかつた。かけられても、今のこの状態では口も開けないだろう。

この街の、こういう薄情さ加減は、でも好きだ。

這いつくばつて隅に移動し、左ポケットから携帯を取り出して開くと、一件の「留守録アリ」のメッセージが表示されている。

震える指でボタンを押し、携帯を耳に押し付けた。

『 ピー……「おー、由佳、お前どいつもつき歩つてんだよ。散歩か？ 買い物か？ つていうか、ビニに腹んだよ。アイス、ハーゲンダッツ、出しつぱなしだったぞ！ 食いたいって言つから高いのわざわざ買つてやつたのによー。洗濯物も干しつぱなしだしよー。全部ひがやんとやつてから出かねるよ。んで、ビ……」 ピー…』

敦司^{あつじ}からだつた。

その声にほっとし、次のメッセージを聞く。

『 ピー……「留守録つて短けーんだな。つていうか、ビニへ早く戻つてこい。倒れたらどうすんだ。これ聞いたら電話しぃ、分かつたな？」 ピー…』

怒つてこるとも呆れているとも、びつひともとれる敦司の少し高い声は、だけど心配しているのが分かる語尾の柔らかさだ。安心してますます力が抜けた。

履歴を表示し、小刻みに震える親指でボタンを押す。

四回の呼び出し音で、勢いよく敦司が出た。

「由佳？ 何やつてんだよお前。もう十時だぞ？ 散歩にしては長すぎただろ」

敦司の声の回りいで、かちやかひやと陶器つぼい音がする。

目でも洗つてこむのだろうか。そういえば頼まれていた昨日の夕食の片付けもしないで出でかけやつたな、と思こ出す。

携帯、濡れたりぬかんだら……またひつともこことが浮かんで苦笑した。

「敦司」

「なに?」

「ヤバイ」

「あ? なに?」

「立てないんだけ? あたし」

「は? 立てないって、何? 何してんの、お前」

「座つて」

あ? と McConnell の声は、少し黙ったあと、思い出したみたいにして受話部分から低くこぼれた。

「由佳お前、今どー?」

「歌舞伎町帰りの新宿」

「あ? 新宿? の、どー?」

「駅。東口。の、券売機前… つていうか、その隅」

「何だよそれ。よく分かんねーよ。いいわ、すぐ行くからじっとしてろ。新宿着いたらまた電話するから。そこに居りよ。動くなよ」

一気にしゃべった敦司はぱつりと電話を切った。

プー・プー・プーといづ音しかしなくなり、抱え込んだ膝の上で携帯を閉じた。

切符を買う人たちのほぼ全員がちらちらとわたしを見ては、怪訝な顔をする。

羽田をはずした若い女の、自分の限度を知らない女の、そんな類たぐいの酔っ払いとでも思われてこるのでない?

「一チのショルダーバッグを下げたお姉さんに「どうしたの?」と声をかけられたけれど、わたしはうつむいて首を振るだけにしておいた。

かまつのも、かまわれるのも、今は面倒くさかった。

周りを無視すると、不思議と足音も声も遠くなり、前を行く人たちなんかも、スクリーンの中で動いているように見えてくる。

膝を抱えて、無声映画みたいなその光景を上目遣いで時々眺めて、敦司を待つた。

四十分、経つか経たないかくらいで握り締めていた携帯が震え出した。

携帯を開いて、もしもしと言いかけてけれど、それより先に敦司のせかせかした声が耳に飛び込んできた。

「着いた。新宿。で、どこ?」

敦司の声の後ろで、電車の「おおお」という音と、ホームに響く駅員の声がしている。

受話の向こうの鼻息が荒い。携帯から漏れてきそうなほどふがふがしている。

ここに着いたらたぶん怒るな、と思いながら、それでもわたしは周りに見える看板の文字や物の説明をし、敦司を誘導した。

仕方ない。立てないのであるから。東京で頼れる人間は、まだ、敦司しかいない。

「は？」「ああ、はいはいはい」「なんだそれ」、少しイラついている敦司の声を聞きながら、ここに辿り着いたときの奴の第一声は何だらか、なんて想像してみる。

おそらく「アホ」とか「馬鹿」とかに違いないけれど、言われて仕方ない。その通りだ。

なんて言い訳をしよう、そう考へてはみたけれど、尻をついている床の硬さに神経は傾いていく。

どうしようもないくらい、わたしは自分本位だ。

むすむすと腰を動かしてふと前方を見ると、人ごみのなかをこちらに向かってつかつかと歩いてくる点が見えた。

携帯の中の声が途切れる。次第に近づいてくる顔の主は、敦司だった。

「よー。」

眉間に皺のよつた敦司の顔を見ながら、わたしは馬鹿みたいに手を上げて笑つてみせた。

最後の数メートルを小走りしてわたしの前にしゃがみ込んだ敦司は、持っていた携帯をぱたりと閉じて、大きく息を吐いた。

グレーのシャツから覗く首元に、薄つすらと汗が光つて見える。

よほど焦っていたのだろう。悪いことしちゃったな、と思いながらも心配をかけたくなかつたわたしは「べ」と舌を出して笑つてみせた。

そんなわたしを見て、ぱりぱりと癖のない真っ直ぐな黒髪の頭をかいた敦司は、やれやれといった表情で、ぽんと軽くわたしの頭の上に手を置いた。

「大丈夫か」

予想外の第一声。わたしは驚いて敦司を見上げた。

「なにが、よ!、だ。馬鹿かお前は。何してたんだよ、こんなところで」

「見れば分かるでしょ。座つてたの」

ああ、違う。

本当は「ありがとう」と言いたかったのだけれど、案の定「馬鹿」と言つセリフが出てきたことに少しばかり腹が立ち、つっけんどんに返事を返してしまつ。

「そうじゃなくて。何でこんな時間に、新宿なんて一人でほつつき

歩ってるんだって聞いてんの」

呆れ顔の敦司はわたしの頭から手を下ろし、まじまじとわたしの田を見ている。

黒目が大きくて、ところよりも田そのものが大きくて、じつくり見られると意識しなくともそわそわしてしまう、敦司の田にはそんな力がある。

「……職探し」

リノリウムの床に視線を逸らしていついついつ、視界の隅に映る敦司の首が傾くのがわかつた。

「職探し？」

「そう」

「職探しって。何だよ急に」

「だって、ぶらぶらしてるなって、敦司言つたじゃん」

言いながら、唇がとがつてくるのが自分で分かつた。

迎えに来てもらつてこの態度もないだらうと心では思つたけれど、

話してこねつかせつけの男の顔がまた浮かんできて、言葉が詰まつた。

また膝を抱えてうつむいたわたしの肩に敦司の手が触れる。

「由佳、立てるか?」

「わかんない」

「ほれ

敦司に両腕を支えられ、まだカクカクと小刻みに震える膝をなんとか踏ん張つて立ち上がる。

敦司のわき腹に手を添える。尻は痛いけれど、少しなら歩けそうだ。

切符を買い、敦司に支えながら改札を過ぎ、ホームへ出る。

轟音を立てながら、電車はすぐにホームへ滑り込んできた。

鉄みたいな匂いの風が吹き付けて、立っている足を少しばかり踏ん張つた。

乗り込む間際、気になつて後ろを振り向いたけれど、知らない顔

たちが笑つたり無表情だつたりして通り過ぎていくだけだった。

残された部屋の中で、骸骨はどうじてゐるんだろう。

無くなつた金に気づいただろつか。踏みつけたパンツをちゃんと穿いただろつか。

あの高ぶりは一体どこから来たものだつたのだろう。わたしまたいな女に興奮するほど、食えてるんだろうか。

居なくなつたわたしと一万円札で、その気持ちもアレも治まつたのだろうか。

そんなことを考えながら、わたしは敦司のシャツを握り締めて、シートに深く腰を下ろした。

窓の外に流れる景色に目を凝らし、その向かいにあるはずのホテルを探してみたけれど見えるわけもなく、映るのは、そこいらじゅうに散らばる色とりどりの灯りだけだった。

6・まだ、抜け出せない

中央線でひとつ先の中野には、あつとこつ間に着いてしまう。

握り締めていた敦司のシャツをもう一度しつかりつかんで立ち上がるが、敦司はわたしの手をシャシ^シごとつかんでホームへ降りた。

電車とホームの隙間はぱくっと口を開けていて、ちょうど深くもないのに、いつも少し、怖い。

踏み出す右足に力が入る。敦司の手にも少しだけ力が加わって、わたしは無事、ホームに帰還する。

改札を出て、中野通りを歩いて北へ向かう。

新宿とは明らかに違う空気の緩^{ゆる}さにほつとして、幾らか新鮮に感じるその空気を吸い込んでみたらバスの排氣の味がした。

東京で、田舎の空氣みたいな美味さは期待していない。

ただしでも、安心する空気が流れる場所くらい、確保しておきたいものだ。

サンプラザ前の広場には、わたしごりの年齢の若者たちが大勢集まつていて、なにやら騒いでいた。

誰かのコンサートでもあったのだろうか。遠田でもわかるほど表情が生き生きとしている。

女の子たちが飛び跳ねながら腕を振り回すたびに、螢光ピンクのサイリュウムが光の緒を引いて、めちゃくちゃに動き回るねずみ花火みたいに見える。

若いな、と思う。

馬鹿にしているのでも、批難しているのでもなくて、今を満喫していて羨ましいな、と素直に感心する。

そしてしみじみ眺めてしまつ。

自分がって十分若いのはわかっているけれど、あんなふうに大っぴらに、若さを周りに振りまける同年代の人間を見ていると、妙に年寄り染みた気分になつてくる。

運動会の控え席にいるときのような、学級会で漫才を披露していれる友人を眺めているときのような、そんな感じだ。

「若くていいね。軽やかだよね、全部

「なにが？」

敦司はわたしを見下ろして首を傾げている。

頭ひとつぶん高いその顔に、車のライトが滑つて通り過ぎた。

首筋はもう光っていない。汗は乾いたみたいだ。かわりに鼻先が少し、照かっている。

「あの子たち。楽しそう。生きてるって感じだね」

「なんだそれ」

敦司は右手で髪をかき上げて、ほんの少し笑つてまた前を向いて歩き出す。

年寄り染みた気持ちを抱えたまま、わたしもその後に続いて、斜め前方の敦司の横顔を眺めてみる。

一つ年上なだけなのに、わたしの手を引く今日の敦司の顔は、おじさんっぽく見えた。

いや、保護者の顔とでも言ひのだろうか。

わたしが作つてしまつている顔なんだと思つたら、少し申し訳なくなつて「じめん」と口にする、「は? 何が?」と不思議な顔をして振り向かれただけだった。

途中のパンジー元寄つて、板チョコとバークを買つ。

わたしだつて、選ぶ物は若者好みから外れていない。

魚より肉が好きだし、あんこよりチョコが好きだし、お茶は好きだけれど、炭酸水を一気飲みしたいときだつてある。

若者っぽいことをあえてしようと思わなくたつて、それらしきことをひやんと選んでやつてこる。

なんだかんだ言つても、所詮若いのだ。

早稲田通りにぶつかつて横断歩道を渡つて、路地を右に入つてしまつと、途端に暗くなる。

春先の蛇みたいな、緩いくねり具合で続いている小道を五分くらい歩くと、居候先の敷司のアパートが見える。

隣の部屋の明かりがアパートの前の砂利を四角く照らしていた。

「せつから氣になつてたんだけど、それ、何?」

部屋の明かりをつけた敷司は、ベランダのカーテンを引くわたしの背中を指差して言つた。

指先と視線をたどると、わたしの腰のあたりに行き着いて、二つの折りになつて突つ込まれている雑誌に行き当たつた。

せついえば挟んだままだつた。

『気』になっていたんならコンビニに入ったときにでも言ってくれればよかつたのに、そう思つたけれど口には出さず、雑誌を引き抜いて表紙を見ると、女の顔が汗で歪んでバスになつていた。

「お土産」

「あ？」

「好きでしょ、ソハニア。手ぶらで帰つてくるのもどうかと思つてね」

「好きつて。いや、嫌いじゃねーけど。わざわざ買つたわけ？ そんなの」

「いや、拾つた、みたいな」

「は？ 拾つた雑誌が土産かよ。つていうか、んなもん拾つてくれくなつて」

「一ラ片手に雑誌を受け取つた敦司は、湿つたページをぱぱぱりとめくつて、寝そべつた女のページで少し止まり、だけど見なかつたことみたいにしてばさりと雑誌を閉じた。

「気に入った？」

「何が」

「裸の女」

「馬鹿かお前は。それより由佳、そこにて座れ」

雑誌をテーブルに放りながら敦司が指差す先には、わたし専用の群青色の長座布団がある。

中野サンモール内の小さな店で敦司に買つてもうつたやつだ。

おばちゃん好みの洋服店の店先で、ワゴンの中に山積みにされていたセール品。

安物商品の布地は、どうしていつも余計な柄が散りばめられているのだろうと思いながら、積み重なった長座布団をめくっていた。

赤い小花柄や大きな牡丹みたいな絵の描いてある長座布団のなかに、一つだけ単色群青色のそれがあって、どうしてか皿ごとまつた。温泉宿の大広間にあるような、ただの四角い浅い座布団が、一回り大きくなつただけのような代物だ。

たぶん、そのときは良く見えたんだろう。欲しくなつた。

部屋の中ではじいじとするのが口課みたいになつていたわたしに、長座布団は必需品に思えたのだ。

学校から帰つてきた敦司に金をせびり、千円札を握り締めてその店へ戻つた。

六百円の長座布団を抱えて、おつりで八百屋の籠入り林檎を買って意氣揚々と帰つたら、敦司は少し、むつとしていた。

そういえば敦司は、昔から林檎が嫌いだった。

林檎は摩り下ろして一人で食べた。わたしは好きなのだ。

「座る？ なんで？」

「いいから座れ」

「どうせ怒るんでしょ。分かってるよ」

「分かつてゐなら、座れ」

命令されて、しぶしぶ長座布団に腰をおろす。

向かい側の床に腰を下ろした敦司は、テーブルの上で手を組んで、生徒指導室の先生みたいな顔をしてわたしを見ている。

じつとあの目で見られて、やっぱりそわそわして、わたしは自分の股の間に視線を落とした。

「人の多い所に一人で行くなつて言つただろ」

少しだけ強い口調だけれど、ちゃんと心配が含まれていて、そこ

が生徒指導室の先生とは決定的に違つといひだ。

「……」「めさん

「職探しするなんなら、俺に言つてからにじむ。何か探してやるから」「自分でみつけようと思つてさ。あたしなつに氣を使ってみたんだ
けど」

「だからっていきなり歌舞伎町はねーだろ。つていうか何で歌舞伎
町なんだよ。この辺だつて色々あるだろ、コンビニとかスーパーと
か本屋とか

「いや、手っ取り早い方法と高い金を、と思つてさ。何となく新宿
に出てみたんだけどね」

あはは、と笑つてみせたけれど、敦司は少しも吊られなかつた。

それどころかますます渋い顔つきになり、組んだ手に体重を乗せ
て前かがみになつてゐる。

「お前が、何する気だつたわけ？　またかキヤバクラとかで仕事し
よつとか思つたわけ？」

「せう。そのとおり。ピンポン」

「何がピンポンだよ、出来るわけないだろーが

「いや、大丈夫かなって思つたんだけど。結局いい店が無くなつてさ。
ま、いいじゃん。ちゃんと戻つてきたんだし」

戻つてから「しまつた」と思い、上田遣いで敷司をちらりと見た。

ちゃんと戻つてくれたのは敷司に迎えに来てもらつたからだ。

さも自分で戻つてきたみたいな言い方をしてしまつわたしは、本当に、救い難い。

「お前なあ」

ため息と一緒に吐き出される呆れた声。

「つむじ」「じめん」といつと、敷司の手が頭に伸びてきて、軽く叩かれた。

「何であんなとこに座り込むはめになつたんだ?」

「……いや、ちょっと人に酔つただけ」

「ホントに?」

「ホントに」

本当に話してしまったかった。

話したほうが気分的にすっきりするより思えたし、一万円札だつて、渡したい。

言ひ出せうと思つて迷い、金魚みたいに口を開け閉めしながら、歌舞伎町での出来事を順を追つて思い出出してみる。

空腹のあまり、初対面の男に誘われてラーメンを食べたこと。

ラブホに連れて行かれて、あんなになつたアレを初めて見て驚いて、気持ち悪くなつて敦司を呼んでしまつたこと。

盗んできた金が今、尻ポケットに入つてゐることなど、全部。

どこかを搔い摘んで話そつとしても、いいところが一つも見当たらない。

勢いで話してしまつても良かつたけれど、結局は敦司の心労を増やすだけの惨事でしかないことに気付いたら、ビックリよくなつた。

無駄に怒らす必要もない。

それより、外出禁止例が出たら大変だ。

「ホントだな？」

やや見上げるよつた黒い目が、確認するよつてわたしに向けられる。

わたしはうんと頷いた。

「とにかくもう、夜一人で出歩くのはやめる」

「了解」

確かにこもつ、一人で夜の街を歩くのは止めておいたほうがいいだ
れい。

「それこそ……男に何かされでもしたら、どうすんだ」

田の前の敦司は、疲れたおじさんみたいな顔をしてこる。

色白で通つた鼻筋。黒田がちな大きな目。イケメンの部類に入る
顔だろうに、すまないことをした、と反省する。

敦司の言つとおりだ。男に何かされたらヤバイだろ。

今回は未遂で終わつたけれど、あれしきの」とてさえ、わたしは
へたり込むほどびびつたのだから。

やっぱつまだ、駄目なのだ。

わたしはまだ、男嫌いから、抜け出せないでいる。

7・近づかず離れずと駄目になる

敦司とわたしは、幼稚園に通つ前から、小学校、中学校とずっと一緒にだつた。

頭の出来が違いすぎたわたしたちは、高校こそ離れたけれど、家が隣同士といつることもあって顔を合わせない日は無かつたと言つてもいいくらい、常に傍にいるような間柄だった。

いわゆる幼なじみだ。

物心がついたときからすでに敦司は傍にいて、互いの家にも行き来していた。

わたしは気がつけば父子家庭で育つていて、父の帰宅が遅いときなど、敦司の家に預けられたりもしていた。

敦司の家にはちゃんとお母さんがいて、お父さんも定刻になれば帰ってきた。

柔らかいオレンジ色の明かりの下で皆で食べる夕食は、自分の家とはずいぶん違うと感じていた。

これが一家団欒というものが、なんて幼いながらに感心していた覚えがある。

お腹一杯になつて敦司とテレビアニメを見て、自分の家にはない

ゲームで遊んで、たまにお風呂も一緒に入って、眠くなれば寝てしまつて、揺り動かされて気がつけば、父に抱かれて自宅の玄関をくぐる朝を迎えていたなんてこともある。

敦司とは、近所の川や公園の砂場でよく遊んだし、待ち合わせなんてことはしなかつたけれど、学校からの帰り道でばったり会つたときには、買い物をしたり、映画なんかを見てから一緒に帰宅したりもした。

敦司は一つ年上だけれど、あまりにも幼い頃から一緒に居すぎたので、先輩という感覚は無い。

わたしは敦司のことを幼稚園のころから呼び捨てにしていたし、隣に住む遊び相手くらいにしか思つていなかつた。

お兄ちゃんという表現が一番しつくりくるかもしれないけれど、それともまた違うような気がする。

そんな関係が続いたある日、大学生になる敦司は家を出ることになつた。

「しつかりやれよ」と、本来ならわたしが言つよつたセリフを残して、敦司は東京へ向かつた。

そしてわたしは高校三年生になり、敦司と初めて離れることになつたというわけだ。

敦司が居ないといつこともあつて、あのオレンジ色の明かりの下で夕食を摂ることも無くなつたし、もともと友達の少なかつたわた

しは、遊び相手も暇つぶしの相手も居なくなつた。

ただ父とひつそりと、過ごした。

別に寂しくもなかつたし、不満もなかつた。

それが普通だつたから、なんとも思わなかつた。

敦司が保護者みたいな顔を覗かせるようになつたのは、幼なじみでわたしが年下という理由の他に、もうひとつある。

わたしが、変質者に狙われた中学一年の春からだ。

朝、いつも通りに家を出たわたしは、気持ちの良さめる冬の青さと陽気の良さに、学校に行くのが面倒になつた。

こんな日は、授業を受けながら眠つてゐるより、外の空気に触れながら本でも読んでいたほうがいいと思つたわたしは、学校へ行く途中の橋の下に寝そべつて本を読んでいた。

薄暗さで文字が読みにくくなり、川面を滑つてくる風がむき出しの足を滑つて少し寒いかも…と感じたときには、陽が半分沈んでいた。

さて帰ろうか、とスカートについた砂と枯れ草を払い、歩き出したその時に、背後に何かの気配を感じた。

腕を掴まれて、驚いて振り向いた。振り向いてすぐに、押し倒された。

背中にコンクリートの冷たさを感じた。頭を打つてしばらく動けなかつた。

動けないわたしの身体に覆いかぶさりながら、黒い物体の息が耳に吹きかかる。

何が起きているのか、分からなかつた。

ぎゅっと目をつぶり、身体を這いまわる熱い感触に耐えていた。

大きくもない胸を弄られ、首筋に唇を押し付けられ、太ももを滑つてスカートの中に入り込んでくる手のひらの温度を感じたときに、ようやくわたしは襲われているのだと気がついた。

硬く閉じていた目を開くと、黒いニットキャップを被つた男の顔があつた。

たぶん、若かつたと思つ。春先にもかかわらず、厚手のニットを着込んでいた気がする。

全身、黒づくめの男だつた。いや、そう見えただけなのかもしれない。よく覚えていない。

視線がぶつかると男は、奇妙な笑いを浮かべた。

笑う田と唇だけがきらきらと光つていた。

男の手がパンツの中に入つてきて、わたしは声を上げた。

男の右手が、わたしの頬を打つた。

打たれた反対側の頬がコンクリートに擦れて、息を吸い込むと砂が口の中に入り込んで、咽まで届いた埃に、咳き込んだ。

夢中でもがいたけれど、男の力は強かつた。

何度も殴られ、その度に鈍い痛みが骨と頭に走る。

口の中は、ぞうついで、血の味がした。

もう駄目だと思った。けれど抵抗を緩めたときに、男の手がわたしの身体を離れた。

ジーンズのボタンに手をかける男の姿を薄目に見たわたしは、右足でおもいきり男の股間を蹴り上げた。

そこが急所だということは、保健体育で習っていたから知つていた。

授業内容が初めて役に立つた瞬間だった。

股間を押さえて奇声を上げる男の股の間から抜け出して、鞄を抱えて、夢中で逃げた。

本を投げ出してしまったことを今でも悔やんでいる。お気に入りの一冊だったのに。

土手を上上がるときに何回か転んで、膝も手のひらも擦りむいて血

が滲んだ。

振り向かず、ただひたすらに走った。

走つて走つて、息がつけず立ち止まつたところが敦司の家の前だつた。

何も考えず扉を開け、まっすぐに敦司の部屋へ続く階段をのぼる。

「由佳ちゃん？」キッチンの脇を過ぎるときに敦司のお母さんの声を聞いたけれど、返事もせずに部屋へ入り込んだ。

こんなことはよくあつた。

わたしは自分の家みたいにして敦司の部屋に上がり込むことなんてショッちゅうだったから、敦司のお母さんが特段気にかけることもなかつたのだ。

夕飯近くになつて、部活動を終えた敦司が帰つてきた。

埃と砂まみれの制服で床に突つ伏したまま泣いていたわたしに、敦司は相当戸惑つていた……という話を、後で聞いた。

学校や近所や、新聞で取り上げられるような大事にはならずにはんだ。

そんなことになつていたら、わたしは不本意な有名人になつて、どこに行つても、レイプされかけた可哀想な女の子という、同情の

含まれた田で見られていたことだらけ。

マイナスイメージで近所のネタにされるとなど、まっぴらだ。

そんな饅頭の皮みたいなしつとりとした哀れみなど、受けたくないかつた。

敦司だけに話した。

話すつもりはなかつたけれど、自分から敦司の部屋に上がり込み、床に突つ伏して泣き、そんな姿をさらしておきながら「何でもない」なんて言えるはずもなかつたし、口ごもつているわたしを優しく問いただす敦司の声に安心してしまつたものだから、わたしは大袈裟に泣いて、敦司にしがみ付いて、どんなに恐ろしかったことか、といふ話をしたようだ。

……他人事みたいな言い方だけれど、その頃のわたしは本当に素直で純情で、男がどんな生き物かもよく分かつていなかつたのだから仕方ない。

わたしの周りにいる男といえば、父か、敦司か、クラスメートのやんちゃな男子だけだし、身に危険を感じるような雄などいなかつたから余計に傷ついた。

そう、傷ついた。身体に出来た擦り傷はすぐに治つたけれど、受けた心の傷は相当のものだつたらしい。

それ以来、わたしは、男という生き物に近づきすぎると駄目になると。

今日みたいに、新宿駅で隅っこに座るはめになるくらい。

あれから五年が経とうとしているけれど、まだ、駄目だ。

敦司はと言えば、それからずっとわたしの心身を気にかけるようになり、じつはいつが懲縮してしまつほど、面倒をみてくれるようになつた。

面倒という大層なものでもなかつたけれど、いつでも気にかけてくれたのは確かだ。

登校時には、わたしが学校をさぼつたりしないように隣にぴたりとついて監視されたし、下校時も、なるべく一緒に帰るように調整してくれていた。

義務感、みたいなものがあつたのだろうか。

昔からずっと傍にいる相手としての。

それとも、わたしの心の傷をわかっているのが、自分しか居ないといつ意味で。

どちらにしても、負担をかけてしまつたことは確かだ。

大学進学と同時にせつかくわたしと離れることができたのに、今またこつしてわたしは、敦司の部屋に押しかけて、世話になつている。

8・少し負けた気分

「出かけるなら皿洗いとその辺の洋服ちゃんと片づけてそれからにしちよ。あと必ず火の元確認して戸締りは絶対忘れんな」

大学とバイト先へ出かける朝、敦司は毎回同じことをいつ。それも一息で。

ロールパンをくわえている時もあれば、シャツに腕を通しながらの時もあり、稀に歯磨きをしながらなんて時もあるけれど、視線だけは、ながら作業ではない。

キツとわたしを睨むみたいにして、少し、キツメに言い聞かせる。

わたしがここに来てからおよそ一週間が経とうとしているけれど、初日を除いた一日目以降の出発前のセリフはいつもこれだ。すっかり覚えた。

日によつて皿洗いが洗濯に、洋服片づけが風呂掃除に微妙に変わつたりもしながら、忙しそうに部屋中を歩き回つているのだけれど、このセリフをわたしに投げることだけは何故だか忘れない。

今日は薄いベージュ色のシャツのボタンをテンポよく追いながら、慣れた手つきで重ね合わせている。

しかしこつ見ても、敦司のシャツ姿は、いい。何というか、ボタンの似合ひ男だ。

「言わなくてもわかってるよ」

「何かしら忘れるだろ。いつも完璧なら何にも言わないの」

「はいはー。こいつらひしゃこませ」

ひらひらと手を振るわたしが、まだ布団の中で丸まつたままだ。敦司のこのセリフを起き上がって聞いたことは、まだ一度も無い。天井とわたしの手のひらの間で、若いくせに渋い俳優みたいな顔をしながら敦司は、丸まつたわたしを見て軽くため息をつく。

「わかつてゐなうちやんとやるよつて。そして昨日みたいな無茶はしないよつて。今日やつたら、もう知らね」

「無茶しません。布団、干しとくから。天氣いいし」

「うん、と伸びをして、窓の外に手をやる。

一階の端の、敦司のこの部屋にはブランドがない。

外には、布団一組を干してしまえばすぐに「つぱー」「つぱー」の、少しだけ茶色に錆びた柵があるだけだ。

下半分が擦りガラス、上半分が透明の窓の外から光が射し込んで、狭い六畳部屋を照らしている。

向かいの家のトタン屋根の上に、青に成りきらない薄い水色の空が広がっていて、その中をスズメが一羽、横切った。

今日は一日、絶対晴れる。

「布団干すなら早く起きろよ」

「もう少ししたら起きるから。掃除も洗濯も、問題なし

「ついでに乾燥ひじき、買つとして」

「乾燥ひじき?」

「作るから。久々に食いたくなつた、ひじき」

「マメな男だ。」

布団の中から敷同の背中を見送つた。

今日は大学と、確かバイトもあつた日だ。

敦司はここから電車で三つ先の大学に通つていて、バイトは大学近くのコンビニでやつているらしいが、詳しいことはよく分からない。

バイトのある日は十時半過ぎに帰つてくる。

布団の中で膝を抱えて丸まつて、一気に伸びをすると掛け布団から埃が舞った。

射し込む光でキラキラ光つて、わたしを取り囲むようにしてゆっくりと落ちてくる。

もぞもぞと布団から抜け出し、四つんばこのまま窓へ移動してカラカラと呟くと、砂利の上に由て猫がいた。

猫は一瞬驚いて、警戒するようにわたしを見上げて、やがて何事もなかつたようにそのままを向いて小道へと歩いていった。

ぴんと立つたしっぽの先だけがぴくぴくと動いていた。

東向きのアパートは、朝こそ眩しく照りし出されるけれど、毎日を過ぎてしまつとせつどもない。

布団を干すなら早めに干して、毎日をひきこむのがベストだ。

長く干しておぐと、東京の空氣みたいにもんやりとして、ギリから流れてくる生臭い匂いが染み込んでしまうような気がして、干したといつ達成感を味わえない。

わたしは家事といつものなどまあ」とへりこにしか出来ないけれど、敦司が言い残していく」とへりこせ、ある程度、ちやんとやる。

洗濯をして掃除をして、気分がのってみると、それ以上のことを

やつたりもする。

敦司が帰ってきて、ぴかぴかになつた床などを見せ付けてみたりもするけれど、反応はイマイチだつたりするので、面白くはない。次の日は大抵サボる。

開けた窓からいに具合の風が入り込んで、前髪を抜けて、少しつとりとしている額に届いた。

立ち上がりて腕を上げ、深呼吸するとパジャマから腹が出て、外の空氣に少し、冷たかった。

部屋の掃除をして、言いつけの皿を洗つて、服をたたんで重ねて置いて、自分の布団と敦司の布団を交代で干して、洗濯をしながら牛乳を啜り、ときどきぽんやりと濃くなり出した空を見上げてため息なんてついてみると、時計は皿を回つている。

布団を取り込んで部屋の隅に押しやり、洗濯物を外付けの竿にぶら下げて一息つく。

することが無くなる。

群青色の長座布団に被さるように寝そべつてテーブルの下を見る
と、あの雑誌が投げ出されていた。

手を伸ばし、そのままページをめくつてみたけれど、ぱりぱりと下に落ちるページが作る緩い風が顔を撫でるだけで、面白くも何ともなかつた。

しばらぐじとじい、天井を見たり、床の傷をなぞつてみたりしていたけれど、それにも飽きた。

起き上がつて流しへ行き、冷蔵庫から食パンを取り出してトースターに入れる。

しばらぐすると、パンの焼ける朝っぽい匂いが流しに広がつて、わたしさそれを取り出して新鮮な氣分でバターを落とし、くわえながら窓へ戻つた。

錆びた柵に寄りかかつてパンを齧つてみたけれど、日はもうだいぶ高い位置にあり、朝の気分は直ぐに過ぎていつた。

さつきの猫がいつの間にか戻つてきていて、向かいの家の側溝の手前からこちらを見ている。

丸まつて両足を揃えて、皿をつぶりながら微かに「ニヤア」と言つてゐる。

ちつちつちと舌を鳴らしてみても、やつぱり警戒しているのが少しも近づこひこない。

そのくせ、いちいち「ニヤア」と皿を閉じながら鳴くものだから、わたしあつこ意地悪くなつてしまつ。

もぐもぐと大袈裟に口を動かして、じつと猫を見る。

ひとかけ分を残して砂利へ落とすと、猫は黙つて、しつぽの先だけを動かして、パンとわたしを交互に眺めていた。

わざとゆっくり窓を閉めながら、隙間からしばらく覗いて見ていたけれど、猫に動く気配はなかった。

ぐるりと部屋を見回して、抜けていることはないかチェックする。皺だらけの一万円札が尻ポケケットに入っていることを確認し、少し怖くなつて肩掛けのカバンに腕を通した。

その中に携帯とむき出しの一万円札を入れて、玄関へ向かつ。流しの火の元を確認し、スニーカーに足を入れる。

ベージュの扉を開くと、まつたりとした春風が髪を揺らした。まだ裏手に落ちてこない日の光は、遠くのマンショングランダを照らしている。

気持ち良やそうにだらりとぶら下がつた何枚もの布団が白く光つている。

やっぱり今日は、天氣がいい。

行き先が必然的に決まって、わたしは玄関の鍵を閉め、抜き出した鍵をカバンに入れ、ドアノブを何度もくるくると回してきちんと閉まつていることを確認してから、歩き出した。

アパートの前を過ぎると、白い猫が目の前を勢いよく走り去つていった。

口に、パンをくわえていた。

少し負けた気分になつて後ろ姿を見送つた。

チャンスは、うまく掘む必要があるらしい。

9・カクアリタイモノヨ

中央線で東京まで一気に出てしまって、山手線に乗り換えて新橋へ向かう。

平日の電車は、サラリーマン率が高い。

東京駅から一緒に乗り込んだグレーのスーツのおじさんが、隣で「あ」と深く息を吐いている。

ついつ革にもたれるよつこにつかまつて窓の外を見ているけれど、表情は無く、眺めるともなしに明後日のお出しが見えていた感じだ。前に座るおじさんも同じ顔をしている。

時々さわさわと田をつぶり、顔中に皺を寄せ、渋々といった感じでゆつくり田を開けて、わたしのスニーカー辺りをぼんやり見始める。ぐつぐつと足を動かすと、おじさんの視線が外れて、ため息とともにまぶたが閉じられた。

サラリーマンの疲労度合いなど、わたしには分からない。

けれど時々、鞄を抱えて眠り込む姿を見ると、泣きたい気分になるのは毎つしてだらう。

そんなことを思つてみると背筋の伸びたサラリーマンが乗り込んできた。見るからにバリバリだ。おじさんなのに、勢いが違う。

人によって、抱えるものも考えも、重みも違ければ受け止め方も
様々なのだろう。

電車の乗り換えは面倒くさい。

第一、何に乗ればどこへ運んでもらえるのが、まだよく分から
ない。

地下鉄は苦手なので避けている。あの、もんやり感が好きになれ
ない。

新橋駅に着き、そのまま改札を出る。

S-L広場は結構な人がいて、にぎわっていた。

古本市をやっていたので一通りぐるりと眺めて見てまわる。

何冊か手に取り、面白そうなものを適当に選らんで、一百円を払
う。

スカーフを頭に巻きつけたおじさんに、「へえ、おねえちゃん若
いのにこういうの読むの?」と感心されたけれど、こういうの、と
いう内容がどんなものか分からないので「ええ、読むんです」とだ
け答えておいた。

本を受け取るときに手が触れて、ぞきりとした。

すらりと並ぶガード下の飲み屋街を過ぎ、さらに小さな飲み屋の立ち並ぶ細い路地を歩く。

一度夜のこの辺を間違つて通つてしまつて、冷や汗とあぶら汗をかきながら歩いたことがある。

ふらふらになつたたくさんのおじさんたちとすれ違つた。

ぶつからないように必死で避けながら歩いた。

触れるのも酒臭いのも嫌だつたけれど、陽気に肩を組み歩くその姿は気に障らなかつた。

うつぶんを曇らすように笑う赤い顔を見て、大いにはしゃげ、と
さえ思つた。

翌日にはまた、何か重いものを抱えて、ぼんやりとした表情で電車に乗り込むのだから、ふらふらになるまで飲んで騒ぐ日があつても、いいと思つ。

店と店の間に突っ込まれた看板やビルケースなんかを見て、敦司もサラリーマンになつたら「いつこいつといふ間に通つよつになつたりするんだろうかと、ふと思つ。

ボタンの似合つ男だ、たぶん、スーツも着たその日からしつくつと似合つてしまつんだろう。

けれどスースイ姿の敦司を、新橋の、この路地裏の雰囲気にはめようとしてみても何だか旨くいかなかつた。

どちらかといえば、駅の反対側に見える、新しいビル街の、そつち側の人間になるような気がする。

大きな道路に出て、見えた東京タワーに向かつてひたすら真っ直ぐ進む。

歩いてる側の日射しが強すぎてめまいがして、横断歩道を渡つて反対側へ移動した。

背中と脇の下に薄つすらと汗が滲んでくるのが分かる。

コンビニに寄つて、迷つたけれど炭酸じゃなくお茶を選んで買つて、また迷つたけれど、いつもの弁当屋へ向かつた。

途中の狭い道に入り、少し進むと小さな弁当屋がぽつんと建つてゐる。

おべんとう、と書かれた緑色ののぼりが、道路に向かつて一本、頭を垂れている。

左側の壁に吊るされたホワイトボードに黒マジックで、数種類の弁当名が丸っこい文字で書いてあって、価格もリーズナブルだ。

カウンターの右端に乗せられたガラスケースの保冷器には一種類のペットボトルのお茶と、何故か、瓶入りのコーヒー牛乳が入つてゐる。

わたしがこの弁当屋をみつけたのは、何てこと無い、道に迷つた末の結果だった。

上京して三日目、東京に来たら東京タワーだらうと、中学生以来の観光気分でやつてきたのだが、案の定、迷った。

適当に歩くうちにものすゞく腹が減つて、ふと店に入ったのがこの弁当屋だった。

のり弁を貰つた。店頭に立つ人の良さ氣なおばちゃんからおつりを受け取るときに、話しかけられた。

「学生さんかい？」

「いや、違います。観光みたいなもので」

「観光？ 一人でかい？ 東京タワー？」

「はい、そんな感じです」

久しぶりに見る三角巾を頭に小粋に巻いたおばちゃんは、ほうれい線がくつきりと刻まれた頬にさらにえくぼを食い込ませ、気持ちのいい顔で笑つた。

赤いエプロンの胸の部分に、熊の刺繡がしてあつた。大きな胸はぱんぱんに張つていて、その下の腹も、気前よく張つていた。

わたしは、人に話しかけるという行為が得意じゃない。

けれど田の前のおばちゃんの、ゴム鞠のような風貌を見て、話し

かけても、言葉の妙な吸収などせず、ほんと素直な軽やかさで返事が返つてきそうな感じがした。書はないように思えた。

弁当を取出って、しづらへんの場でもじもじしていった。

あるとおばちやの方から話を切り出してくれた。

「どうしたんだい？」

「あの、分からなくなってしまって。その、東京タワー。そのため」「ここに来たんですけど」

「なんだ、迷ったの」

「はー」

「あぐわいせ、せひ、見てみ？」

おばちやさんの指差す方向に身体を向けて見上げると、この店に降るはずの日光をさえぎつてくるビルの窓の上に、タワーのトッペン部分が見えていた。

ああ、なんだ、近くに来てたんじゃん、そいつたら安心して可笑しくなって、振り向いて笑った。

「あ、いい笑顔だね。味噌汁つけてあげるよ、持つていきな」

笑顔を褒められたのなんて初めてのこと驚いた。

笑顔ひとつで味噌汁までサービスしてくれるのが、このおばちゃん少し単純すぎるんじゃないかとその時は思つてしまつたのだけれど、どうやらそうではなく、単に人がいいのだといふことを後々知つた。

話しかけてもらつたのと、味噌汁をサービスしてくれたのと、おばちゃんの雰囲気が好きだつたことで、わたしは東京タワーに行く前に、この店に寄るようになつた。

弁当を買つと、やつぱり味噌汁をつけてくれる。

まだ四回目だけれど、相変わらず赤いエプロンでこころと顔を出すおばちゃんとは、仲良くなつたと思つ。やつぱり、わたしがなつてこるだけかもしれないが。

「ほんちがわ

「ほんじがわ。今日も東京タワーかい？ 飽きないね、あんたも

「はい、飽きないです」

「天気のいい日はすつきつ見えるからね、遠くまで。たまには夜のタワーに上つてみたらいつだい？ そのほうが綺麗だろ、若いし、そういうの好きだろ」

「夜は、駄目なんです。それに上つてるわけじゃないし。下で弁当

食べて、見てるだけなんです

「見てるだけ？ なんだい、それ」

「下から見るタワーが好きなんで」

変わった子だねえ、とほうれに線をさりげなく墨にくしませて、おばちゃんは笑つた。

弁当を受け取つて、タワーへ向かう。

どんどん大きくなつてくるタワーは、水色の空をバックに、凛と朱色に構えている。

変わらぬここにある安心感、それが好きだ。

途中の大きな方の芝公園の中を突つ切つた。

カメラを手にした若い男やおじさんがたくさん居て、何をしているんだろうと近くに寄つてみたら、花壇の前でしゃがんでにっこり微笑む人がいて、どうやらその姿を撮影しているらしかつた。

ちようどタワーが真後ろに見える位置の小道でも撮影をしていて、腰に手を当てた人が次々にポーズを変えていく。

ビニール袋をぶら下げたまま、しばらくその様子を見ていたけれど、隣に立つた若い男の視線を感じ始めてそっちを見ると、カメラを向けられて、驚いて逃げた。

学生たちがロードワークをしている。

歩道の端に寄り、そろそろと歩きながら交番の手前の小さい方の
芝公園まで歩く。

こつものベンチに荷物を置き、背伸びしてタワーのほうを見やる
と、平田だとうのに相変わらず入場待ちの列が出来ていた。

その前で、でんと、堂々と、東京タワーがそびえ建っている。

待ち構えているわけではないけれど、来るものを拒まない、そん
な感じだ。

力強いのに何処か優しい感じがして、わたしは下から見る東京タ
ワーが好きだ。というか、好きになった。

初日、タワーに来たのはいいけれど、入場料がもつたいなくなっ
て中に入るのを諦めた。

真下で口を開けてタワーを見上げていのちに、下から見るその
姿にはまつてしまつた。

ひづらは一心に見上げて感心しているのに、タワーのまづはと言
えば腰を屈めるようなことはしてくれず、かと言つて見下すような
こともしない。

ただ遠くをじっと見据えて、自分の中に入つてくるものを受け入
れて、涼しい顔をして、立派だ。

上つてしまつと分からなければ、下からこうして見上げると本当に大きくて、てっぺんがどの辺りまで伸びていてるのか、曖昧になつてくる。

今日みたいに雲の無い日は尚更で、天井が果てしない分、先が見えなくて吸い込まれそうで、くらくらする。

しばらぐほんやりとタワーを見上げて、わたしは味噌汁を啜つた。唇についたわかめを舌で取つて、飲み込んだ。

木の陰を、車が忙しく過ぎていぐ。

のり弁を食べきつて、ベンチに横になる。

平日のこの辺りは、犬を連れた散歩のおじいさんくらいしか通らない。

買った本を読もうかと広げてみたけれど、直ぐに眠気が襲つてきた。

わたしは本を頭の下に敷いて、両手を胸の上で組んで、すっかり青くなつた葉の隙間で踊る木漏れ日を田で追つた。

時々鋭く落ちてくる眩しさに田を細める。

木漏れ日の向こうで、東京タワーの朱色の身体が、傾きかけた日の光を受けて鮮やかに色を増していた。

水色の空と光以外、背後に何も抱え込まないタワーが羨ましい。

カクアリタイモノヨ、なんて思つてみて目を閉じると、輪郭だけになつたタワーがまぶたの裏に映つてゐる。

まぶたを閉じたまま、緑色のその輪郭を眺めているうちに、わたしはいつしか、眠りに落ちていた。

父の夢を見た。

八畳の、薄茶けた畳の敷かれた見慣れた空間。自宅の茶の間だ。部屋の中央にある四角い茶色のテーブルの奥に、横になつた父の姿が半分見えている。

ぐぐぐと、ぐぐもつたいびきが聞こえる。どうやら寝ていいようだ。

部屋の奥の左隅に小さな黒いテレビ、右隅に母の写真の飾られた黒い仏壇がある。

手前の右隅に客用の深緑色の座布団が五枚ほど積み上げられていて、全体的に、しんみりとした部屋だ。

他に目立つものといえば、右側の壁に青いクレヨンで描かれている、目と頭の大きいお姫様の落書きくらいのもので、その絵は、幼いこのわたしの作品らしいのだが、まるで覚えない。

本当にわたしが描いたのか不思議なくらいの、三段レースのふりふりのドレスを着た少女趣味のお姫様だ。

つま先立つたお姫様は、頭と身体のバランスが悪い。につこりしながら、傾いている。

ふらふらしてゐる。向となく、わたしに似てゐる。

彩度明度ともに低いこの茶の間は、わたしが小さじ頃から少しも変わつていない。

変わるものとこえは、仏壇に供える花と食べ物と、縁側の向いの見える猫の額ほどの庭を覆つた季節毎に生えては枯れる雑草くらいのもので、プロック塀に沿つて並べられている何も入つていない植木鉢なんかも、記憶が出来たころから何うにそこにある。

テーブルに添つよひにして仰向かで眠る父の隣に立つ。

寝巻き代わりの紺色の作務衣の胸元から、浅黒い顔につり合わない白い肌が覗いている。

だいぶ広くなつた額に、くつせつとい二本の皺が刻まれている。

両サイドの髪も、そろそろ危ないだろ。

いつしへじつへじつ顔を見てみると、随分歳を取つたな……と思われるを得ない、艶のなくなつた皮膚だ。

見下ろしたまま「お父さん」と声をかけてみたけれど、返事はなかつた。

しゃがんで顔を覗き込む。時々いびきが止まるので、ほんの少し、心配になる。

わたしが育ったこの家は、一階に茶の間と和室一部屋、二階に和室一部屋の、父とわたしが暮らすには広すぎるくらいの木造住宅で、一階の一室をわたしが部屋として使つてゐる。

もう一方は物置部屋と化していて、ランドセルとかダンボールがぎりぎりぎりに詰まつてゐる。

父は一階の一一番奥の和室を卧室としているのだけれど、ソーラー寝ている姿はあまり見たことがない。

いつも今みたいに、茶の間でじろじろと横になつて、そのまま朝まで眠つてしまつ……といった感じだ。

父の朝は早く、夜は遅い。

知り合ひの運送会社に勤めている父は、四トン車で中距離コースを廻るドライバーで、主に県内か隣県のスーパーに牛乳やヨーグルトや、トマトやキャベツなんかを運んでゐる。

たまに、ぐしゃぐしゃになつたプリンなんかを持つて帰つてくる。

降りし損じたものらしさのだが、ぐしゃぐしゃでもプリンはプリンだ。喜んで受け取る。

大型免許も持つてゐるのだけれど、父は中距離をあえて選んでいる。

遠出の多い大型車だと、びつしてもその田中に歸つてこれないことが多いらしく、家にわたしを残していくことを考えてのことだそだ。

それでも、帰りの遅い日はとことん遅い。朝方になることもある。

そのまま少し休んで、わたしのお弁当を作つて、また出勤する、なんてこともしちゃうひだつた。

眠そうに台所に立つ父の姿を見て、「弁当なんていいよ」と言つたことがあるのだが、父は菜ばしを持ちながら、「おかあさんと約束したから駄目なんだ」と腰に手を当てて、慣れた手つきで油の中のコロッケをひっくり返していた。

母は、わたしを産んで、一年も経たないうちに死んでしまつたらしい。

父にわたしを残して、逝つてしまつたのだ。

だからわたしには、母の記憶がまったく無い。今日までずっと、父と二人で暮らしてきた。

父とは、朝の僅かな時間と夕食時くらいしか一緒にいることもなかつたのだが、それでも父は、わたしの話をなるべく聞こうとしたし、学校行事にもきちんと参加したし、家庭訪問もこなしたし、自分も仕事の話なんかをして、一生懸命に、父親をやつていた。

ただやつぱり、味氣ないこの部屋の、一人きりのテーブルは、ひつそりとしていた。

それでも、暖かかった。初めから母の記憶がないわたしには、それで十分だった。

父は、よくやつてこないと思ひ。

じつしても手の回らないことせ、会社の事務のおばちゃんに助けてもらつたり、隣の敷司の両親に頼んだりしての生活だったみたいだけれど、男手ひとつでわたしをここまで育てあげたのだから、相当な苦労があつたはずだ。

わたしはわたしで、同性の母親がいなことで多少苦労したこともあつた。

ひねくれてみよつと思つた時期もあつたけれど、血縁いかなくて、結局流れれるままに生きてきた。

反抗期なんかも知らないうちに通り越していたし、特にわがままも言わず、それなりにいい娘として、すくすくと育つたと思つ。

家を出たい、と言つてみたのは、高校を卒業する一ヶ月前の11月だった。

石油ヒーターのぼおおとうつ温風と、テレビから聞こえる野球中継のやかましいアナウンサーの声を聞きながら、「東京に行つてみたいんだけど」と、ふと口をついた。

野球をぼんやりと見ていた父の、かつおのたたきを口元に運ぶ手の動きが止まつた。

驚いた顔をして、「なんだ急に」と聞いた父に、「なんとなく

みたいな返事をした。

数日後、許可が下りた。

敦司のところに電話になるとこう条件付きで。

年頃の男女を同じ部屋に住まわせるのが条件というのもおかしなものだが、それだけわたしと敦司は兄弟みたいなものだつたのだ。

どうせいつもの氣まぐれで、わたしの東京行きも短期間のものだと思つたのだろう。

父が敦司の両親にぽろりと話をしたら、「それならしばらく敦司の部屋で様子を見てみたら」という内容でまとまつたらしい。

わたしもわたしで、一人で何かしてみたい、という願望みたいなものは持つていたけれど、だからといって東京でなにをしたいという目標もなかつたし、ただ何となへこいを離れてみたかつただけだから、それで納得した。

父が、いくら敦司に送金しているのかは分からぬ。敦司にも聞いていない。

家の状況からして、大した額ではないだろう。

一人で何かしてみよつと思つていたくせに、父に、敦司に、敦司の両親に、わたしは頼ついている。

とりあえずバイトへらことは、早くみつけたほうが多い。

父の呼吸を確認して、母の写真の前に立つ。

若く、綺麗なその人は、線香立ての隣でわたしに微笑んでくる。

母親、なのだろう。

どんな人だったのかまるでわからぬのに、おかあさん、ということが本能的にわかる。

いつも心の深いところで、切なによつた物悲しいよつな、だけど温かい、懐かしい感覚が沸き起つてくる。

この人の中で、守られていたんだろうと、感じじる。

顎がきゅっと締まつた、結構な美人だ。どうして父と結婚したんだろう。

父は、お世辞にもカッコいいとは言えない。

丸顔に、低い鼻、大きな口に、つぶらな瞳。愛嬌は、ある。

わたしは、父親似だ。遺伝子の殆どを、父のものを受け継いでしまった。

けれど、くつきりとした一重まぶたは、おかあさん譲りの可愛い田だね、と言われる。

それだけで、満足だ。母との繋がりも、絶たれていない気がして、嬉しくなる。

マッチから直接線香に火をつけて、一本だけ、供えた。

細い煙が、真っ直ぐに天井へ上って、落ち着いた香りが広がった。

縁側へ出る。

雲のない空は、檸檬色に光っている。夕日が放つ、辿り先の無い光で、覆われている。

その下に、かわら屋根の低い家々が並んでいて、なぜか、連なる家のずっと遠くの方に、東京タワーたどが見えていた。

遠くにありすぎて、まぶたの裏に映った緑色のタワーみたいに、輪郭がぼやけている。

ふと気配を感じて振り返ると、いつの間に起き上がったのか、作務衣姿の父がぼんやりと立っていた。

両手を腰に当てていた。いつものポーズだ。運転は、腰に来るらしい。

「東京タワー、ここからも見えるんだ」

わたしは何も考えず、そんなことを言っていた。

「見える田と見えない田があるけどな」

父も、当たり前みたいに、ぼそりと言った。

父と立つ縁側に、線香の香りが届いた。

「飯にでもするか」

「お腹減っていないんだけど。せっかく食べただばかりだもん」

「じゃあ林檎でも食つか

「だから、お腹、減っていないんだって」

そうか、と言つて遠くの景色に田を細める父の手には、また一つの間にか林檎が握られていた。

檸檬色の光を浴びて、東京タワーみたいな色をしていく。

父の左奥に見える仏壇の線香の、長く伸びた白い灰が、音もなく、落ちた。

「お父さん

「ああ?」

父を呼んでみたけれど、何を言いたいのかわからなくなつた。「なんでもない」と言ってから、わたしは黙つた。

父はまだ、田を細めて、東京タワーを見ている。

「お父さん」

もう一度呼んだ。

父は黙つたまま、ん？ といつ顔でわたしを見た。

今度は、わたしの手にも林檎が握られていた。

昔から、ずっと遠い昔から、わたしは林檎が好きだ。ほんの少し明るくて、ゆつたりとした温かいものに包まれて丸まっていた、本当に小さなころから。

きっと、それも遺伝なのだろう。

「弁当作りのほかに、おかあさんと約束したことってなに？」と聞こえうとして口を開きかけたときに、父は大きなあぐびをした。

わたしあがられた。

二人で同じ格好で、縁側に立っていた。

線香の香りが、殊更に強くなつて、そして消えた。風がさわりと

通り過ぎた。

少し寒くなつてぶるつと一回震えた。東京タワーも手にした林檎もぽんやりと薄らいできた。

あぐびで出た涙のせいかと思い目を擦つていらうつちこ、全部が見えなくなつて、わたしは、目を覚ました。

11・回りをやり始めた

鼻先がくすぐったい。

葉の擦れる、さわさわとこつ音が聞こえていた。

顔に手をやると、サイドの髪が束になつて被さつていた。

髪を払つて手のひらをあわと握り締めると、ぱせぱせと音がなつた。少し、むくんでいた。

急に強い風が下から上に舞つて、わたしの髪をぐしゃぐしゃにして、葉を搔き分けて、道路のまつへ逃げていった。

顔に髪を貼り付けたまま、ぼんやりと上空に田を凝りすと、夕日に照らされた丸い雲がひとつオレンジ色に染まつていて、薄紫色の空にぽつんと寂しげに浮かんでいた。

ん？と思つて首を傾けると、父の姿はなかつた。ああ夢か、と納得して身体を起します。

春とはいえ、何もかけずに跳り込んでしまつと、さすがに寒い。

両腕で冷えた身体を摩る^{なす}と、いろんなといひからずの音がなつた。

わたしの身体は、鈍^{なま}りすぎている。

東京タワーは、まだ点灯していなかった。変わらずに前方をじっと見据えている。朱色は少し、くすんでいた。

携帯を取り出して時間を見ると、五時を過ぎていた。

留守電が入っている。「一件だ。

むくんだ指先でボタンを押し、耳に運ぶと、肩甲骨あたりが痛かつた。首筋も張っている。肩までこつたらしい。

『　　ピー……「あ、俺。布団、ちゃんと干したか？ 取り込んだか？ あと皿。洗った？ 出かけてもいいけど、遅くなるなよ。今学校終わつたから、これからバイト。洗濯物も取り込めよ。夜、雨になるみたいだからな。じゃ」　　ピー……』

敦司だった。やっぱり、マメな男だ。

一件目を聞くとして思に出した。

そういえば洗濯物は出しつぱなしだった。

空を見上げる。雨の降る様子は伺えない。まあ、大丈夫だひとつ次のメッセージを確認する。

『　　ピー……「忘れてた。もう一個。ひじき、乾燥ひじき、ちゃんと買つとけよ。できたら戻しといて。水に付けとけばいいから。じゃーな」　　ピー……』

敦司は、頭の休まるひとつであるんだろ？かと思つてしまひ。

常に、いろいろなことを覚えていて。過去のことまで抱えて、先のことまで気にかけている。

それが普通なのだろ？か。やうだとしたら、どうしてわたしには、その能力がないんだろ？ 数時間前に干した洗濯物のことさえ、すぐ忘れてしまう。

自分で自分に呆れる。そして敦司を、少し、頼もしいと思つてしまひ。

しかしママがゐるのもどうかと思つ。

敦司からの留守電は、いつも大体、一件、納まつてゐる。

わたしは滅多に携帯を使つことがない。時計代わりに使つているやうなものだ。

なので、電話に気づかなことが多い。気づいたときには、留守電が入つてゐる。

といつてもわたしの知り合いなど父が敦司しかいないので、納まつてゐる声といえば、ほとんど敦司のものだ。

父は、わたしがこつちに出てきてから、まだ一回しか電話を寄越していない。話下手なのだ。わたしも、父も。

道路を走る車のヘッドライトがひらひらと点滅始めた。

木々の間を、相変わらず忙しそうに走り去っていく。

枕にしていた本の表紙は、真ん中が少し窪んでいる。鞄にしますうと手に取り、裏表紙の砂を払った。

「あれ？」

ベンチの上に視線を這わせる。

無い。

座つたまま腰を屈めて、ベンチの下を覗き込む。

無かつた。

「あれあれあれあれ」

立ち上がって周りを見渡した。後ろの側溝、前の土手、隣の水道の陰。

「ない、ないないない、ない」

肩掛けの鞄が消えていた。

「どこを見渡してもみつからない。在るのは、のり弁の空き容器が入ったビニール袋だけだった。

「ここのに座ったときに、肩から外した。たぶん。そして、どこに置いていたらいい。足元だつただろ？ 尻の下だつただろ？ いや、尻の下なら、潰れることはあつても無くなることはないはずだ。

東京タワーと弁当に、気を取られていた。鞄のことなど、何も考えていなかつた。

洗濯物どこの話ではない。わたしは、自分で身につけていた鞄のことさえ、すっかり忘れている。

注意力がなさ過ぎる。あの猫でさえ、次に取る行動がわかつているのに。

「最悪」

誰かに、持つていかれたのだろうか。

「この辺は、散歩のおじいちゃんくらいしか通らなかつたはずなのに。」

散歩する犬がくわえていったのかもしれないなんて思つてみて、いや、犬が持つていくとすれば弁当の空き容器のほうだらうなんて考へて、馬鹿馬鹿しくて、ため息が出た。

でも確かに無いのだ。わたしでなければ、誰かが持つて行つてしまつたと思つしか、ない。

自分が歌舞伎町でやつたことと、同じことをやられたのだ。

「どうしよう

しばらく途方に暮れた。あの中に、崩した一万円札のおつりが全部入っていた。

頼まれた乾燥ひじき、買って帰れないな、と思つてみた。敦司にまた、お小言を言われる。生徒指導室の、先生みたいなあの格好で。

けれど問題はそこではなかつた。帰ることすら出来ないよつだ。尻ポケットをあさつてみても、今日に限つて小銭のひとつも入つていなかつた。

「Jから歩いたら、何時間かかるんだ？」

言つてみて、啞然とする。そして、途方に暮れた。

「いろいろ帰る方法を考えみたけれど、結局浮かんでくるのは、『どうしよう』しかなくて、ベンチに腰掛けてただ時間だけが過ぎるうちに、空の色が陰り、怪しくなつてきた。

後ろを振り返る。東京タワーは点灯していない。夜はまだ、少し先だ。

ぽつんと浮かんでいたオレンジ色の雲は消えていて、薄いけれど低い雲が広がり始めていた。

握り締めていた携帯を見る。

やっぱり、敦司しかいないんだろう。

開いて名前を表示させ、指をボタンに這わせたけれど、どうしても押せなかつた。

朝、確かに聞いたのだ。「今日やつたひ、もう知らね」と、敦司は言つていた。

けれど電話をすれば敦司は、昨日みたいに飛んできてくれるだろう。首筋に汗を光らせて。

しかし連日だ。そしてバイト中だ。迷惑をかけるのが、さすがに躊躇われた。

「参ったな」

言いながら頭をかくと、ボブカットの後頭部の髪が盛り上がりっていた。

ため息をついて足元を見る。木の影も、わたしの影も、無くなっていた。

ふと、スニーカーの横の、空容器の入ったビニール袋が目に付いた。

弁当屋の名前の裏に、味噌汁の容器の「わかめ」の文字が書いてある。

おばちゃんの顔が浮かんだ。ほうれい線が深く入った、えくぼのおまけ付きの人の良さそうな笑顔。

「行つてみようか」

ビニール袋を取り上げて、膝の上に置いた。縛つたところから、割り箸が飛び出している。

迷つたけれど、わたしは立ち上がり、本を小脇に挟んでビニール袋を両手で持つて、歩き出した。

芝公園を後にする。

わざとは違つ学生たちが、やつぱりロードワークをしていた。

ダッシュの練習だらうか。ものすごい勢いで一ぱりに向かって走つてくる。

日が陰つてるので、シルエットがぼやけていて、なんだか怖か

つた。歩道と車道の境の柵に寄り添つて、学生を巧みにかわした。

道路の交通量は増えていた。塊になつた車が、イライラとわたしの傍を過ぎていいく。

学生と車に急かされて、わたしもいつしか小走りになつていた。

薄紫色だった空は、灰色に変わつている。

空気がもんやりとしてきた。本当に雨が降るかもしね。急に心細くなつた。

敦司の顔が浮かんで、それに負けて、携帯をポケットから取り出してボタンを押しかけたけれど、傍で鳴つた車のクラクションに驚いて、はつとして、やめた。

学生たちと離れると、若い人やおじさんたちとすれ違つた。昼間とは微妙に違う^{めんつ}面子だ。

ビニール袋を持つ手に力が入つた。割り箸は、ますます長く顔を出した。

走り出したら、小脇に挟んでいた本が黒いアスファルトにばさりと落ちた。

本より先に進んでしまい、慌てて戻つてしまふ。拾い上げた。もう一度小脇に挟んだけれど、安定しないのでビニール袋と一緒に抱え込み、立ち上がつた。

小道に逸れる。

弁当屋の明かりが、薄暗くなつた狭い通りを照らしていた。緑色のぼりは、片付けられていた。

少し進んで、緊張してきて、足が止まつた。

「じつじつ

じつじつ、じつじつ。

思いついて来たのはいいけれど、そんなことしていいのだらうか。

密として通つてゐるだけで、しかもまだ四回しか弁当を貰つていないのに、言えるだらうか。

わたしは、おまけやんに金を借つよつとしていた。

大きな胸と、気前よく張つた腹と、感じのこい笑顔。事情を話せば、きっと貸してくれるだらう。

わう思つたのだけれど、なかなか前に進めなかつた。

緊張する。汗で湿つた手のひらがビニール袋に張り付いて、梅雨どきのテープルの上を撫でたときみたいになつっていた。

ぼわりと強い風が吹いて、じいか遠くの方から運ばれてきた、雨の匂いがした。

アスファルトとオイルの匂いが強い、手のひらと回しかみついで運つた風だ。

意を決して、右足を踏み出した。

明かりの前に立つと、シャッターが四分の一ほど下りていた。

店先に、おばちゃんの姿はなかつた。何だか、しんとしている。

背伸びをして、後ろの壁に付けられた窓から奥の方を覗き込んだ。半分開いている。

青いエプロンの誰かが動いているのがわかつた。

窓は低い位置にあるので、胸から上が見えなくて、顔がわからなかつた。

よく見ると、胸も腹も出でていなー。おばちゃんでは無いのは確かだ。

しばらくその場でそわそわと身体を動かして、つま先とかかとを上げ下げしながら、動く青いエプロンを見つめて、うじうじしていた。時間を稼いでみても、おばちゃんが現れる気配はなかつた。

よし、よしよしよし、と心で言い聞かせ、おもいつきつて青いエプロンに声をかけた。

「あの、すみません」

思つていた以上に、小声だつた。

緊張で咽が渴いていた。唾を飲み込んで、もう一度呼びかけた。

「あの、すみません」

窓の向こうの、青いエプロンの人の動きが止まる。

スポンジを持った手がこちらを向いて、窓のほうに近寄ってきた。

ほつとしたけれど更に緊張して、その人が窓から顔を出すまでの僅かな時間、わたしは身を硬くして両肩を上げて、ビニール袋と本を握り締めて、お祈りをしているような格好で、待ち構えた。

カウンターの脇の保冷器が、うんうんうんうん唸つ^{うな}っていた。

12・霧雨は避けにぐい

「はい？」

泡だらけのスポンジを持ったままの手で窓を引いて、身体を屈めて顔を覗かせたのは、男の人だった。

背が高いんだろう。窓枠の向こうで、顔が真横になつている。

円形の水色の帽子の下に、切れ長だけれど腫れぼつたい感じの目が見えた。

蛍光灯のせいだろうか、顔色が悪く見えて、そして少し、怖そな感じがした。

「弁当？ もう終わつたよ。悪いけど」

男の人は、窮屈そうに窓枠に納まりながら、構えて立つてゐるわたくしに面倒そうに言った。

それだけを言つと身体を起こして、また泡だらけの手で窓を閉めそうになつたので、わたしは慌てて身を乗り出した。

「あの！ 違うんです」

半分叫んでそのまま窓を開いた。自分の声にびっくりした。男の人が顔を見せて、さつきみたいに真横になつている。

窓枠を、洗剤の泡がゆっくり滑り落ちていく。

男の人は、わたしをほんの気持ち見たけれど、窓枠を伝う泡に視線が移つて、その泡が下にたどり着くまでゆっくりと田で追つてから後ろを振り返った。

布巾を取り出したと思ったらしゃわしゃわと泡をぬぐつて、なぜか、窓を閉めて姿を消してしまった。

「あ

あからさまに無視されたと思った。突然として窓の向こうを眺めた。

そのまま立ち尽くしていたら、しばらくして窓の左側にある扉が開いて、男の人があらうと出てきた。

手の泡は無くなつていて、代わりに白いタオルが握られている。

丸まつたタオルで手拭いていた男の人は、それをふさりと肩に掛け、カウンターに手をついて「なに?」という顔をした。腫れぼつたいまぶたが、くつと持ち上がっている。

店の人なんだろうか。帽子を被つてエプロンをしているし、きっとそりなんだろう。なのにこの威圧的な態度は何なんだろうと思いつながら、わたしは少し、後ずさりした。

のけぞって、ビニール袋をきつく握り締めた。なのに手から本が滑り落ちて、赤いマットの足元にぼそりと落ちた。

慌ててしゃがんで本を拾つて、急いで腰を浮かせたらカウンターに頭を打ち付けた。焦りで勢いづいていた。『じん、』と鈍い音が店先に響いた。

「あててて

後頭部さすを摩すると、髪にはまだ寝癖ねびがついて盛り上がり^ていて、奥のほうが、じんじんと痛かった。

「ぶつ」

目の前で、男の人が吹き出した。

切れ長の目じりが下がっている。笑う顔を見ると、さほど怖い感じもしなかった。

青白く見えていた顔はなんてこと無い普通の肌色で、唇の色だけが少し、薄い。

わたしと敦司より、少しだけ年上って感じだ。落ち着いて見えるけれど、笑う顔を見ると少年っぽい。同世代に感じる独特的の匂いみたいなものがする。

「すんすんと頭が痛んだ。ぶつけたところを指で押すと、首筋にじんと響いた。

恥ずかしくて情けなくて痛くて、わたしは頭を抱えたままつむいていたけれど、くくくと、男の人があまりにも長く笑うので、なんだか頭にきた。

「あの」

声を強くして、上目遣いでにらんでみせた。かなり、勇気が要つた。

「大丈夫？」

男の人は目じりに涙を溜めたまま、そんなわたしを無視して拳を口に当てる笑っている。ひとしきり笑つて、肩にかけたタオルの端で顔全体を軽くぬぐつてから、男の人は被っていた帽子を無造作に脱いだ。

帽子で癖のついた前髪がふんわりとおでこに垂れて、表情がぐつとやわらかくなつた。

“えり、とした。

上半身を引いて、わたしは構えた。

「弁当じゃないなら、何？」

低い声だ。こもっていて、聞き取りにくい。

せつときまで全然興味無さ氣だったくせに、急に珍しいものを見る
よつな田つきでわたしを見始めた。涙が、田の端に残っている。

「おばさん、いますか」

「は？」

「おばさん、あの、赤いエプロンの」

「赤いエプロン？　ああ、エカーナれる？」

「エカーナれる？」

「違うの？」

切れ長の田が、少し大きくなつて、わたしをじつと見ている。

「いや、名前、知らないくて。その、赤い上プロンの、いい、太った、おばさんです」

「やつぱつぱわんじんだる。何? パウハニなんか用?」

「あの、ちゅうと、お話を」

「話?」

「はー、話」

「今、居ないよ」

「え?」

男の人は、不思議そうに首をかしげている。どうしてわたし見た
いな若い女が、おばちゃんに用があるんだろう?... って顔つきをして
いる。

「パウハニ何の用? 弁当の予約? なら俺が変わりに聞いて
くナダ」

「あの、お金が無くて」

「は?」

「いや、その、うたた寝をしてたら、持つていかれちゃって。鞄。
その中に全財産が入つてて、お金が無いんです、今」

わたしの話に、男の人はますます首をかしげた。眉間に皺がよっている。

「それで？」

「それで…その、おばちゃんにお願いして、お金を貸してもらおうかと思って、来たんです。帰りの電車賃がないんです」

語尾は殆んど切れかけていた。

男の人はカウンターに手をつけたままじつとわたしを見ているので、なんだか怒られてる子供みたいな気分になっていた。

幼稚園のころの裕子先生みたいに相手が女人ならいいけれど、目の前にいるのは男の人だ。尖^{とが}らせていた唇も、萎^なえた。

「ミウさん、しばらく帰つてこないと思つよ」

「え？」

「今夜は友達とカラオケ教室だから

「カラオケ教室」

「そ。終わつたら絶対飲んでくるし、遅くなるよ」

言つて、男の人はよつやく身体を起こした。

もう一度前髪をかきあげて、首を回している。わたしの首みたいに、ぽきぽきなんて音は聞こえなかつた。

「そうですか」

おばちゃん… ヲウ「さんを待つていたら、ひょとしたら夜中になるかもしねない。

待つてゐるうちに敦司から電話が入つて、結局は迎えに来てもらつことになるだらう。

立つてゐる赤いマットの上の、自分のスニーーカーを見つめて落ち込んだ。自然とため息が漏れる。せつかく勇気を出して來たのに、拍子抜けした氣分だつた。

「どうから來たの」

男の人の声に反応して顔を上げる。Hプロンのポケットに両手を突つ込んだ男の人は、左足を前に出して休めのポーズをとつていた。

「東京タワーです」

「は？ 家^{うち}だよ、家^{うち}。場所、どこ？」

「あ、中野、です」

「ふーん。歩いては、帰れないよな

「…はい」

「ちょっと待つてな」

そう言つて出てきた扉から中に戻つてしまつた。

言われたとおりちょっとだけ待つていると、戻ってきた男の人はカウンターにぽんと手を置いて、離した。離したカウンターの上に、皺だらけの千円札がのつていた。

「足りるだろ」

わたしはカウンターにのつた皺だらけの千円札に少し身を乗り出して、見つめた。それから男の人を見て、また千円札に視線を移して「あの」と言つた。

「とりあえずそれで帰りな」

「え？」

「傘、持つてんの？」

「へ？」

「傘。雨、降ってきたけど」

男の人は、わたしの後ろを顎でしゃくった。

振り返ると、細かい霧みたいな煙った雨が狭い通りを覆っていた。
道路と電柱はまだ模様になつていて、風に運ばれなくともアス
ファルトとオイルの匂いはもう、この街にたどり着いていた。

真っ暗だった。夜はいつのまにかやって来ている、二メートル先
の街灯がちかちかと眠そうに点滅を繰り返している。

そのまま向かいのビルを見上げると、東京タワーの頭が見えた。
明かりがついている。暗い空にそれだけが赤く滲んでいて、静止し
た金魚みたいだ。

「本降りになるかもな」

本当にそう思っているのかいないのか、どちらでもいいよつな口
調で男の人は言った。

「やうですね」

タワーのつづペんを見ながら、わたしもさうでもいい感じひとつやいた。

東京の街は雨を交わして歩く」となんて容易たやすい。田舎たけと違つて、屋根代わりになるものが、こいつぱにある。

けれど、問題は洗濯物だ。洗い直しは確実だらう。まあこいな、と思つてこむと、後ろでぱたんと扉の閉まる音がした。

振り返ると、男の人の手に傘が握られていた。

「一応持つていつたら?」

カウンター越しに渡されたのは透明のビニール傘で、無色だけれど古びていて、茶色っぽく見える。

「じゃ俺、仕事に戻るから」

男の人は、あつやつさつ言つて、振り返つて扉に向ひて行つてしまつた。

え? え? と思つてゐるうち、窓枠に青いエプロンが納まつた。顔がまた、見えなくなつた。

とりあえずお礼を、と思つて青いエプロンに向かつて「ありがとうございます」と声をかけると、左手だけが軽く持ち上がり、手のひらが見えた。やつぱり、顔は見えなかつた。

手にした傘は、ただの棒みたいに固まつている。

窓枠の向こうに田を凝らしたけれど、男の人気がわたしの相手をする様子はもうなかつた。ありがとうございます、もう一度つぶやいた。小声は、湿つた空氣に溶けるだけだつた。

小刻みに動く青いエプロンをちらちらと見ながら、カウンターの上の千円札をかさりと握つて、尻ポケットの中に、そそそとしました。

割り箸の飛び出したビニール袋は、店先にある「マリ箱」に、そつと捨てた。

何だか、一連の動きが「そ」をしてしまつた。

ビニール傘と本を抱えて、大通りまで小走りで出た。

霧雨が顔に張り付いた。

棒みたいなビニール傘は、ひだ同士がしつかりとくつついていて、開ぐのに手こずつた。

ぱりぱりぱりと音を立ててようやく開いた傘を肩にのせて、身体の力を抜いて、駅までの道をゆっくり歩く。

雨の中で、ビルの明かりと信号と、ヘッドライイトの明かりと街灯の明かりが、入り混じって揺れている。

晴れの日よりもずっと眩しくて、目を閉じながら深呼吸をした。

まとまつた、塊みたいな空気が肺に流れ込んだ。水槽の中みたいだ。エラ呼吸つてどんなだろ？、と思った。

まだ、ぞきぞきしていた。

横断歩道で立ち止まり後ろを振り返ると、傘に、東京タワーが透けている。

雨に濡れたビニール越しのその姿は、ぼんやり滲んで、さつきよりも大きな金魚になっていた。

抱えた本が落ちないように、濡れないように、わたしは傘の中で身を縮めて、ひっそりと歩いた。

霧雨は、大粒の雨よりも避けるのが大変だ。

駅についたころには全身がしつとつとしていた。

やつぱり濡れるんだな、と思つて、傘があつてよかつたとしみじみ感じながら、やわらかくなつたビニール傘を閉じた。

雨の匂いが、そこいらじゅうに満ちていた。

13・わかんねーんだらうな

中野に着いたときには七時を過ぎていて、雨も、男の人^が言つたとおり本降りになつていた。

ビニール傘に落ちてくる雨の音が、耳元でぱぱぱぱぱぱと不安定なリズムを刻んでいた。

風は大したことなくて、雨だけが真っ直ぐに空から降つてくるので、傘にバウンドした雨粒は、地面に素直に落ちていつた。足元に跳ね返るけれど、全身に当たる量としては、少なかつた。

八時まで営業のスーパーに駆け込んで、乾燥ひじきを買つた。

洗濯物のことが気になつていたので、必然的に敦司の顔が浮かんで、ひじきのことも忘れずにすんだ。お金も、千円札のおつりがあつたので、足りた。

男の人の青いエプロンを思い浮かべながら清算するレジで、他に忘れ物は無かつただろうかとぼんやり考えた。

ぱうつとしていたのでそのまま雨の中に出てしまい、「あ、傘」と、濡れてから気がついた。わたしは、少し前のことから忘れていくらしい。

サンプラザ前の広場にはさすがに人の気配は無くて、けれど相変わらずバスの匂いが漂つっていた。雨に濡れた、シートっぽい匂いだ。

洗濯物、洗濯物、頭の中で繰り返しながら急いでアパートに戻つた。

「あ

玄関の前に立つて気がついた。鍵が、無い。

鞄の中に入れていたのだ。

「嘘でしょ

何なのだろう、今日は。

終日晴れると思っていた天気には裏切られ、鞄を取られ、人に金を借り、頭を打ち付けて、濡れて、部屋にまで入れない。

「はあ…」

洗濯物が気になつたので、傘をさし直して、窓のある砂利道に出た。

びしょ濡れになつた服たちが、泣いてるみたいにぶら下がつている。

手を伸ばして、敦司のグレーのシャツの袖を掴んだ。腕の手ごたえがないと、当たり前だがただのシャツだ。着る人がいないと、ぱつとしない。濡れているから余計に頼りなく見えた。

敦司が帰つてくるまで、まだ一時間以上ある。

シャツの袖を掴んだまま壁の中央で立ち止まっていた。ジーノル傘に当たる雨の音は、れりあと波打つ音よりもはるかに不^安定に鳴っている。

とりあえず玄関先まで洗濯物を移動しようと竿に手を伸ばしたときにもしかして…と気づいた。

窓枠に手をかけて、恐る恐る引いてみた。

「あ。開いた」

からからと、か弱い音を立てて窓が開いた。鍵を、かけていなかつたのだ。

自分の忘れっぽさに、このときばかりは感謝した。声には出せなかつたけれど、心の底から喜んだ。

きょろきょろと周りを見渡して、柵に手をかけた。もう一度振り返つて、誰も見ていないか確認した。人影はない。錆びた茶色の柵は体重をかけると少しきしんで、きいつと音を上げたけれど、構わずに急いでまたいで乗り越えた。

靴のまま上がりこんだ部屋のフローリングがきゅっと音を立てた。靴を脱ぎ、部屋の電気をつける。

洗濯物を取り込みながら、誰も見ていなかつたか確認した。前の家の側溝に光る点が見えてきょととした。目を凝らすと猫がいた。朝の、白猫だ。両手を揃えて、わたしを見ていた。齧かすなよ、と舌打ちして窓を閉めた。

傘とスニーカーを玄関に運び、洗濯物を洗いなおした。洗つていの最中で気がついて、乾燥ひじきを水に浸しておいた。

洗いあがった洗濯物をカーテンレールに引っ掛け、ほつと息を吐く。

完全に疲れきつていて、群青色の長座布団に腰掛けると、一氣に力が抜けた。

そのまま寝転がって天井を眺める。壁掛けの時計を見ると十時少し前だった。

弁当屋での出来事を思い浮かべた。

態度のでかい、青いエプロンの男の人。けれど意外に気がきいて、傘まで貸してくれた。

千円札は、どこから出てきたものなんだろう。まさか店のお金を出すわけもないし、あの人の財布から出たものなんだろうか。

くくく、と笑う顔を思い出して、また少し腹が立つた。けれどす

ぐにふんわりと垂れた前髪を思に出して、治まつた。

敦司とは対照的な、やわらかそつた茶色い髪の毛。切れ長の腫れぼつたいまぶた。

優しいのか優しくないのかよく分からぬあの応対。

お金、返さなきやな、と思つて寝返つを打つとしたときには、玄関から鍵の音が聞こえた。

「ただいまー」

間延びした、敦司の少し高い声がする。

わたしは身体を起して、正座をして、敦司を出迎えた。

「おかえり」

「ただいま。何だよ、正座なんかして」

敦司のベージュのシャツは、両腕の部分がぼちぼちと濡れていた。真っ直ぐな黒髪は、しつとりしてくる。

「水もしたたるイイ男」

「は？」

思つたままを口にしたら、敦司は、何言つてんだこいつ、とこいつの顔をして、鞄を下ろして流しに消えた。

「お、由佳、ちやんとひじき戻しておこたんだ」

嬉しそうな声を出しつつ、かちやかちやと何かやつてくる。

わたしは少くとも「うん」と言つて、正座していた足を崩した。

テレビをつけ、テーブルに頬杖をついて、敦司のかちやかちやが鳴り止むまでそつしていた。

流れていたのは洋画で、途中からだつたから状況がわからなくて、ただぼんやりと見ていた。見ながら、別のことを考えていた。なんて言おうか、困っていた。

狭い六畳部屋に、いい匂いが充満し始めた。甘じょっぱい感じの、腹をくすぐる懐かしい感じの匂いだ。

「由佳、飯食つたの？」

匂いの先から敦司の声がした。「まだ」と言つて敦司がやってき

て、テーブルの上に二つんと皿が置かれた。ほやほやの、ひじきが入っていた。きゅうっと腹が鳴った。

「ほれ。自信作」

「美味そつ」

「飯も食わないで何してたんだ、お前」

「…洗濯」

「洗濯？ 洗濯なんて一日中やつてないだろが。飯、食うなら運べ。俺も腹へつた」

敦司のベージュのシャツはすっかり乾いていた。

後ろ姿を見送つてから、わたしも立ち上がる。

即席のインスタント味噌汁を入れて、冷蔵していたご飯をチンして…を敦司がすでに終えていたのでそれをテーブルに運んだ。敦司は、フライパンで茄子を焼いていた。生姜のいい匂いがした。

一人で向かい合つて遅い夕飯を食べた。

敦司の作る料理はいつも美味しい。ひじきは初めて食べたけれど、これもびっくりするくらい美味かつた。父とたまに食べた、スーパーのお惣菜なんかよりもずっと美味かつた。

「コース番組を見ながら味噌汁をする敦司の横顔を何度もちらり見た。

味噌汁をすすりながら、まだ口の中には「」飯がいつぱい詰まつて
るらしく、ほつぺたが膨らんでいた。

わたしの茶碗にはまだ半分以上「」飯が残っているけれど、敦司は
もつ、全部食べていた。

右の口元に、「」飯粒がくつこっている。

そんな姿を、少し可愛ないと思つてしまつわたしは何なんだろ？
ちょっとだけ、和む。

お小言を言わなきや完璧なのに、そんなことを思いながらテレビ
を見ている敦司を眺めていたけれど、気象予報士が明日は雨でしょ
うと書つたところがふと我に返つた。雨で思い出した。傘、そして
お金、返しに行かなきゃならない。

敦司の頬がへこむのを見計らつてから、おずおずと声を出した。

「敦司、あのね」

「んん？」

「お小遣い、千円…いや、一千円くらい、貰えるかな

」「一千円？」

敦司の大きな黒い目が「こちらを向いて、ぴくっと眉が動いた。

ああ、来るな、とわたしはいつものように身構えた。

「別にいいけど、何で？」

「使っちゃったから」

「ペース早くな？」

「先週、東京タワーに一回…えと、今日も行つたから。弁当も買つたし。あと本も」

「また行つたの？ 好きだなお前も」

眉はつり上がつたけれど、なんだそんなことかみたいな感じで、
敦司はテレビに目を戻した。口元にまだ、ご飯粒がくつづいている。

「あと、もう一個あるんだけど」

「もう一個？ 何？」

「鍵なんだけど」

「鍵？」と言つて敦司はわたしを見た。雲行きが、暗くなってきた。

「無くしました」

「は？」

「部屋の鍵ね、無くしちゃったの。『めん』

「無くしたって……じゃ、ビルやつて入ったんだよ、『めん』

「窓から、入った

「はあ？ 窓から？ 何だよそれ……」

言つて敦司はカーテンレールに下がつた洗濯物を見た。やけにしんなりして、洗い立て感がありありと残つてゐることに気づいたのだろう、その後、敦司の尋問が始まつた。

結局、わたしは今日の出来事をすつかり全部話すはめになつた。

話している間、敦司の顔はまた、おじさんみたいになつていた。

わたしは怒られながらも、敦司の口元の『じ』飯粒が気になつてそばかりを見ていた。

「ちやんとお礼言つてこよ。しかし何でお前は…」

ふうっと息をついて、敦司が顔をぬぐいと、『飯粒がぽとっとトーブルに落ちた。

「あれ

「やつと落ちた

「由佳、氣づいてたの？」

「氣づいてるにもなにも、ずっとついてるんだもん、分かるでしょ」

「だつたら言えよ。っていうか、ちやんと話聞いてた？」

「聞いてました。すみません」

何だかおかしくて、わたしは笑ってしまった。そんなわたしを、
敦司は頬杖をついて眺めている。あき呆れているというか、呆けている
ところか、どちらかと言えば感心しているに近い顔だ。

「由佳

「ん？」

「ホントに氣をつかないよ」

「ん？ うん」

妙に落ち着いた口調だった。いつもより、声のトーンが低かった。

わたしが食べ終わるのを待つて、敦司はテーブルの上を片付け始めた。わたしも手伝った。

敦司が洗い物をしている間、わたしはお風呂のお湯を張った。

洗濯物のところに行つて触つてみたけれど、敦司のシャツもわたしの靴下も、まだしつとりしていた。

窓際の空気はそこだけがじつとうしている。

カーテン越しに外の雨音が聞こえていた。少しカーテンを引いて、外を見た。窓を、いくつもの雨粒が伝つて、落ちていく。

部屋の明かりが砂利道に差して、前の家の側溝まで届いている。白猫はどこかに帰つたらしく、いなかつた。

敦司のシャツをピンチからはずしてハンガーにかけた。メタルラックの端に吊るして、ぱんぱんと叩いて皺を伸ばした。

ちょっとといい事をした気分になつて、流しに立つ敦司の隣に行つて、鼻歌を歌いながら敦司の洗つた皿を拭いた。

斜め上で、ぼそぼそと敦司が何か言つている感じがしたので鼻歌を止めて、見上げた。

ベージュのシャツの、ボタンの上の敦司の顔についた黒い墨じぶつかつた。しばらく見つめ合つた形になつていったけれど、敦司は何も言わなかつた。

きちんとたたまれた棚の上の白いタオルを手にとつた敦司は、ゆっくりと手拭いて、「わかんねーんだろうな」と呟いた。^{つぶや}

14・じゃあやつてみまよ

次の日は朝から雨だった。

この日ばかりは布団から抜け出して、着替えまでして、敦司の出发前のセリフを聞いた。

わたしがスペアキーを無くしてしまったので、敦司の鍵を預かった。敦司よりも、先に帰つて来なきゃならない。

遅くなるな、といふところに力を込めて、戸締りを強調して、二回ほど振り向いてから敦司は部屋を出て行つた。今日は、細かいストライプの入つた青いシャツを着ていた。

敦司から「しばらくこれでもたせろ」と五千円札を受け取つたわたしは、丁寧にそれを折りたたんで、小学生のころに父に買つてもらつた赤くて丸いジップパー付きの小銭入れに閉まつた。

ポイントでゲットしたトートバッグに、財布と携帯と、一応、昨日買った本も入れて、身支度を整えたところでロールパンをかじる。

テレビをつけて、天気予報を確認する。今日は、全国的に雨らしい。細い日本列島に、傘マークばかりが群がつている。

ロールパンをかじりながら窓の外を見ると、向かいの家の傾いた雨どいから、雨水が勢いよく飛び跳ねていた。

せつかく早起きした朝だといつのこと、空はどんどん激しくなり、低い。

出かけるのが億劫になつてきただめ息をついたら、窓が白く丸く、曇つた。

天気が悪いと、どうも氣分がのらない。

掃除機を持ち出してコードを引き、コンセントまで手を伸ばしたところですっかりやる気を失くした。

ソラに日は危ない。やる気じるか何もする気が無くなる。

群青色の長座布団を、部屋の隅に追いやつた。寝転がつたが最後、一日中そのままにして過ごすことに成りかねない。

伸ばしたままの腕を強引にコンセントへ運び、掃除機を起動させた。

部屋中を歩き回り、掃除機をかけた。かけ始めると、つこさつきまでのやる気の無さは何だったのだろうと呆れるほど、夢中になつた。

やつてしまえばそれなりに楽しめるものだ。腰あえ上げれば、なるようになる。

つこでにフローリングを拭きしてみた。ただでさえ雨で湿氣る部屋の湿度はさらに上がつた。歩くと、裸足の足に床が吸い付いてきた。

掃除を終えて、コーヒーを飲んで一息ついた。まだやる気のあるうちに、と思ったわたしはトートバッグを肩にかけ、窓の鍵をかけ、

玄関へ向かった。

立てかけておいたビニール傘と、水色の自分の傘を手にして外に出る。

扉の外は生ゴミみたいな匂いが立ち込めていて、屋根から落ちる雨水で玄関先にいくつもの水溜りが出来ていた。

雨の匂いが違う。わたしが育ったところは草と土の匂いがした。

黄色いレインコートに身を包み、赤い長靴を履いて、ビニからか現れる青蛙を眺めていた。水溜りをつま先で蹴つて歩いた。

何でもないそんな行動が、結構楽しかった気がする。

なのほどうして、少しばかり大きくなつた今、雨の日は好きじゃないんだろう。

灰色の空と真っ黒になる道路の色と、空気さえも重くなる雨の日の、けれど行き交う人たちのカラフルな傘の群れに感動していたときもあったのに、今じゃいつとうしさでこっぽいだ。

年を重ねるごとに、好きになれないものばかり増えしていく気がする。

玄関の鍵をかけて、ドアノブを回して確認して、気になつたので砂利道へ移動して窓に手をかけて引いた。

戸締りは完璧だった。傘を肩の上で回して、雨粒を振りまいて、駅までの道を歩いた。

新橋に着くと、雨の勢いは更に増していた。

広場にたまる人は少なくて、傘をさす人たちがつむき加減で足早に過ぎていく。

SJは大きな身体をびっしょり濡らして照かせ、所在無げに佇んでいた。

こいつもの路地を抜けて、弁当屋へむかひ。

見えてきた東京タワーが、灰色で低い空を突き刺している。くつきっと見える雨足のなか、朱色の身体は相変わらず悠然とそこに居た。

タワーを眺めながら歩こうと、こいつのまにか弁当屋へ折れる道の手前までやってきていた。

緑色ののぼりは、同じ色をした雨避けの下でひかえめに頭を垂れている。

やや上り坂氣味の通りの向いから、雨水がだらだらと下りてくる。

弁当屋の前でゆるくカーブして、わたしのスニーカーにぶつかって、後に流れさせていく……を繰り返していた。

雨水に逆らって店先まで移動すると、赤いHプロンのおばちゃん……ミウさんはカウンターで電話中だった。

「はい、三つですね。はい、ありがとうございます。ええ、はい」

忙しく、けれど注意深く、メモ帳にボールペンを走らせるおばちゃんの左手に握られた受話器が戻される。

小窓に振り返つたおばちゃんは、「カズくん、これお願ひ」と大きな声で中の人呼びかけた。

窓の奥の青いエプロンの人近づいてきて、メモを確認する手が見えて、小さく「了解」と声がした。

傘に落ちる雨の音でよく聞こえなかつたけれど、たぶん、昨日の男の人だろう。顔の見えない青いエプロンが奥に引っ込むと、おばちゃんの赤いエプロンの、大きな胸と胸前よく張つた腹がこぢらに向いた。

「お、また来たね、いらっしゃい」

ぼんやり立つていたわたしに気づいたおばちゃんは、あの笑顔でカウンターに手をのせた。

「いらっしゃいませ」

つられたわたしも笑顔で答えた。

「まさか今日も東京タワーかい？ 好きだね、あんたも。今日なんて下から見てたらびしゃびしゃになっちゃうよ」

「いや、今日は違つんですね。」

「そう。買い物か、なんか？」

「いや、今日はその、お金と、あとこれ、傘を返して来たんですね」

わたしは言いながら手にしていたビニール傘を差し出して見せた。トートバッグにぶら下げてきたビニール傘は、全体的に濡れていた。

「お金？ 傘？」

おばちゃんは小首をかしげた。顎の肉が、軽く一段になつている。

「あの、昨日借りたんです。夜に。ここに来て。その、青いエプロンの男の人には」

「借りた？ 青いエプロン？」

「はい。たぶん、今奥にいる、あの青いエプロンの男の人には」

「カズくんに？」

「カズくん… なのかどうか、わかんないんですけど、たぶん、その人に」

わたしは店先に立つたまま、昨日の出来事をぽつぽつとおばちゃんに話した。

雨の勢いは治まらなくて、話している自分の声さえ聞き取りにくい。

だんだんとつま先が冷たくなってきて、寒くなってきて、くしゃみが出た。

気をきかせてくれたおばちゃんが、カウンターのなかに入れてくれた。丸いパイプ椅子を差し出され、それに腰かけた。

話の途中でまた電話が入り、おばちゃんと会話が途切れた。椅子に座った分、低くなつた目線の先におばちゃんの尻がある。丸いけれど意外にも引き締まつた尻に驚いた。

手持ち無沙汰から小窓に視線を移すと、青いエプロンの男の人を見えた。やっぱり昨日の人だ。まな板に肉のかたまりをのせて、適度な大きさに切り分けている。

黒い半袖から伸びた腕が、包丁を動かすたびに、筋張つたり緩んだりしている。

切れ長の目がついた横顔は真剣で、清閑せいがんだった。鍋から上がる湯

気が時々その横顔を隠す。

ぱつと眺めていると、横から肩をたたかれて、びくんと背筋が伸びた。

「いい男だわ」

おばちゃんはにやにやしながらわたしを見ていた。

男の人は、富瀬一弥といつも前らしい。

一応社員という形をとつて雇つて、もう三年が過ぎるとこ。わたくしよりも三つ年上だった。ずっと厨房に立つて何百何千という弁当を排出してきたんだ、と大袈裟に語るおばちゃんは、妙に誇らしげにカズくんを褒めちぎっていた。

へえ、とか、ほつ、とか、短い返事をしながら、いつのまにかわたしの話からおばちゃんの話に切り替わっていた会話に飽きてくること、突然おばちゃんに顔を覗き込まれた。

「どういひあなた、今なにか仕事してゐの？」

至近距離のおばちゃんの顔にびっくりして、少しのけぞりながら「いえ。探してゐるんですけど」と呟いたり、おばちゃんは更に続けた。

「じゃあ、ついでバイトしないかい？ 若いんだから何もしないなんて勿体ないだる。先週一人辞めちまつてね、ちょうどバイト募集しようかと思ってたところだつたんだよ」

言しながらカウンターの下の棚に手を伸ばしたおばちゃんは、手書きのバイト募集のペラペラの黄色い紙を取り出した。

「これ、セレの壁に貼りつと思つたら電話が入つてね」

「はあ」

「あたしとカズくんと二人でしばりやつてみたけどやつぱり毎時なんかは手が回らないんだよ。配達だつて入るだろ？ 店番も必要だしやっぱりもう一人欲しいところなんだわ」

「はあ」

「ね。試しにやつてみないかい？ 難しいもんでもないし、すぐこ慣れやれ」

肩に手をのせられた。軽い感じだつたけれど、おばちゃんの重みでずんと肩が沈んだ。

おばちゃんの顔には、ほうれい線とくぼがくつきりと食い込んでいる。ああ、やっぱり感じのいい笑顔だ、そう思つて赤いエプロンの胸と腹を見た。ああ、やっぱり大きそうな人だ、そう感じて

じゅあやつてみます」と頷いた。

おばちゃんの話は唐突で、自分の返事も早すぎるだらうと思つたけれど、断る理由なんてなかつたのだ。面接の手間も緊張も省けるし、この東京で、顔を知つたおばちゃんのところで働くなら、逆にありがたい。

良かつた良かつたと手を叩わせるヨウコさんは、うんうん唸つている保冷器から瓶入りのコーヒー牛乳を取り出して、わたしにくれた。

また、電話が入つた。「幕の内一個ね、いつもありがとうね」ヨウコさんの引き締まつた尻を見ながらコーヒー牛乳を飲んだ。給食の味を思い出した。「コーヒー牛乳がここにある意味が、少し分かった気がした。

カウンターの外ではまだだらだらと雨が降り続いている。

電話を終えて振り返つたおばちゃんが開けた小窓から、「ご飯の炊ける、いい匂いが流れてきて、雨の匂いを消し去つた。

「カズくん、これ、お願ひね。あと今日は木曜だからあの人来るかもね。マー婆ー用の豆腐、仕込んでおいたほうがいいかもね」

カズくんが振り向いてこちらへ歩いてくる。

目が合つた。お、といつ顔をしている。

「一ヒー牛乳を持つ手に力が入った。

ぺこりと頭を下げるみたけれど、なんだかすゞしく、緊張していた。

15・思わず、見惚れる

「ううしてわたしのバイトは始まつた。

働くなんて勿論初めてのことで、最初こそいろいろ困惑つたけれど、ヨウコさんにあれこれ教えてもらって日にちが経つにつれて、次第に慣れていった。

弁当用の発泡スチロール容器を準備したり、鍋を洗つたり、お茶と「コーヒー」牛乳を補充したり、消毒をしたり、初めはそんなところから入つたけれど、最近ではカウンターで注文を受けることも出来るようになつた。

これは結構緊張する。相手はおじさんやまとめて頼まれてきたらしい若い人などさまざまだけれど、ビジネス街なので男の人の割合が圧倒的に多い。

お金を受け取る手に触れないように慎重になつてしまふので、ただでさえたどいたどしいわたしの動きと口調は口ボットみたいになる。

「見ない顔だね、新入りさんか」

「はい、新入り、です」

なんていう当たり障りのない会話を交わしていると、「可愛い子でしょ、覚えてやつてね」ヨウコさんの合いの手が入つて、おじさんの意識がわたしから外れるので助かる。

若い男性客なんかは、わたしのことを意外にもじろじろと見る。目が合うと、わたしよりも先に向こうが視線を逸らす。相手のほうが弱いと、それを楽しんだりする余裕がある。

たまにピンク色やグレーの制服に身を包んだ〇ーさんもやつてくれる。

毛先がしつかりカールされて、程よい感じの茶色の髪をくるくると指先で丸めながら「のり弁とお」なんて言われると、可笑しくなつて少し笑う。向こうも笑う。つられてもう一度笑うと〇ーさんもさらに笑う。きっと、わたしたちは別の意味で笑いあつている。

電話にもたまに出るよいつになつた。

かけてくるのはほぼ常連さんで、注文の弁当も大体決まつてている。

メモにとつて、小窓を覗き込んで、カズくんに声をかける。

それが、一番の緊張[△]ことだつたりする。

バイトを決めた二週間前、敦司にそれを報告すると、シャツのボタンを三番目まで外していた指の動きが止まり、大きな目を丸くさせて驚いていた。

「大丈夫なの？」

その日はおじさんみたいな顔でずっと心配していた。中野からわざわざ芝公園近くの弁当屋に通うことに対しても、わたしより敦司のほうが不安がっていた。

朝ちゃんと起きれるのか、サボり癖が出ないか、失敗ばかりしないか、「バイトでもみつけたら」と言っていたくせに、かなり心配して質問攻めだった。

一番の心配事は、歌舞伎町で起こったわたしの発作だったらしく、「絶対無理はすんなよ」と何度も頭を撫でられた。敦司の手のひらの温度を感じながら、外れたボタンを見ながら、「大丈夫だつて」と笑つてみせた。

朝は敦司と一緒にアパートを出る。戸締りは敦司がしつかりやるのでわたしはその姿を後ろから眺めているだけだ。

並んで駅までゆっくり歩いて、改札で別れる。

「がんばれよ」

敦司の手が頭に置かれる。敦司は、田舎にていたころよつずつと、泣い顔が多くなった。

弁当屋は、午前中と昼下がりまでが忙しさのピークだ。

それ以降は、立地にもよるのか、人が来ると電話が鳴るものほと

つりぼつととなる。

人が途切れたころを見計らって、カウンターの丸いパイプ椅子に腰掛けで休憩する。

おばちゃんから貰つたコーヒー牛乳を両手で包みながら、ほつと息を吐いて、小窓の向こうを眺める。

カズくんは、一日の大半を厨房のなかで過ごしている。

わたしは滅多に厨房に入らないので、一週間が経つ今も、カズくんとはほとんど会話がない。

メモを渡すときに「お願いします」と言つて、「了解」とカズくんがそれを受け取るまでの僅かな時間がわたしたちの接点だ。

なので、カズくんと言う人がどんな人なのかイマイチよくわからぬ。

わたしがお金と傘を返しにきたあの日も、「なんだ、別によかったのに」とぼそりと受け取つて、わたしが「ありがとう」といました」と頭をかきながら言つと、思い出したみたいに「頭、大丈夫だった?」と細い目をさらに細くして、くくくと笑つていた。

怖いのか、そうでないのか、掴めない。ま、わたしが頭を打つたことに対してもだけ笑えるのだから、若いのだろう、とは思う。

厨房で働くカズ君はいつも青いエプロンに半袖のTシャツだ。

キャベツの千切りなんて、びっくりするくらい早い。肉の塊も、

あつとこつまに小さくなる。

その度に腕の筋肉が綺麗に動く。コーヒー牛乳を持ったまま、思わず、見惚れる。

「由佳ちゃん、口、開いてるよ」

高い声がして振り向くと、美月ちゃんが立っていた。

「あ、おかえり」

「ただいまー」

美月ちゃんさんはおもむろに保冷器を開けて、中からお茶のペットボトルを取り出すと「クククと小さな咽を動かして美味しいようにそれを飲んだ。

美月ちゃんが「」からコーヒー牛乳を取り出したところを見たことがない。いつも、お茶だ。なかなか渋い子だ。

「今日学校でやー、リョウくんに告られたやー」

「告られた？」

「うん、好きなんだけど、だって」

「くえ」

「面倒くせこんだよねー」

「…くえ」

美用かやんは、田中口さんの娘なんだ。小学校五年生で、まだ赤いラングセルを背負つた子供だ。しつとつとした肩までの癖のない黒髪は、まだ何にも手を加えていない瑞々しさで溢れている。

「由佳ちゃんや、こつも見てるよね、カズくんのこと

「へ？」

「せうひと見てるよ、あたしが帰つてくるとこつも」

「にぎりもなんにもなこつるつるの顔に、からかうよつな笑顔が浮かんでいる。ぱつんと切りそろえられた前髪の下の田字がくくると踊つてこる。

「カズくん、よーく見ると、あ、よーく見ると、だよ、結構カッコいいもんねー」

小窓の向いの窓を覗く美用かやんのつま先が立つている。

「カズくんね、彼女いないみたいだよ、由佳ちゃん、立候補してみたら。あたしも目、つけてたんだけどさー、でもすんごい年上でしょー。あたしが大人になる」が、カズくん、もうおじさんだもん」

美月ちゃんは、まるでヨウコさんのようにわたしの返事もまたずにペラペラと一人でしゃべっている。ああ、親子なんだなと思いながら、スリムなジーンズに包まれた、ヨウコさんに似た引き締まつた尻を眺めた。

ぴょんぴょんと飛び跳ねる美月ちゃんに気づいた小窓の奥のカズくんがこちらを見た。美月ちゃんがひらひらと手を振つて、それに答えるようにカズくんも手を振つた。肉を抑えていた左手のひらが、ぴかぴかしている。薄い色の唇の端がきゅっと上がつた。

窓を開けて、背伸びをした美月ちゃんが「カズくん、由佳ちゃんが好きなんだつてー」と中に向かつて大声を張り上げた。

わたしはびっくりしてパイプ椅子から腰を浮かせた。

美月ちゃんを静止しようと口元に手を伸ばすと、「あはは、『冗談』とけられると笑つて、「あたしあ菓子買つてくるー」とランセルを揺らしてカウンターの外に走り去つていった。

台風みたいな子だ。

わたしは呆然とその姿を見送つて、パイプ椅子に腰掛けた。両手で包んでいたコーヒー牛乳は生ぬるくなつていて、手のひらが汗ば

んでいる。

「ませた子だら」

今度は直ぐ傍でする声に驚いた。「つわっ」とまた腰を浮かせる
と、小窓からカズくんが顔を出していった。真横になりながら、くす
くすと笑っている。

ぱっ、と自分の顔が赤くなるのが分かつた。意識していないのに、
美月ちゃんの言葉を思い出して焦った。

「俺がここで働き始めたから、ああなんだよ、美月ちゃん。最
近の小学生って、すごいのな。電車に乗っても笑えるぞ、芸能人
の否定話なんて、テレビとか雑誌なんかよりすごいからな」

くくくと笑う田と視線がぶつかる。わたしは口をぱくぱくと動か
して、今の美月ちゃんの言葉を否定しようと必死だった。

「好きなの？」

笑いながらカズくんが言った。美月ちゃんみたいな、悪戯っぽい
目だ。

「は、いや、違くて、美冴ひめさんが勝手に

「分かつてゐるって」

「は…」

「あんた、入ったときからよそいこもんな、苦手なんだろ、俺のこと」

片手を窓枠にかけて、まだ真横になつたままわたしを見るカズくんに見下され、わたしは口を半開きにしてまたまた固まつた。

「よく怖いつて言われるからな。別に脅してゐわけじゃねーんだけど」

「…やうじやなくて」

「田つきが悪いからかな」

「こや、やうじやなくて」

「やうじやなくて?」

「あたしが、苦手なんです」

カズくんは、は? という顔で私を見ている。

「ふ。 やつぱり苦手なんじゃん、俺の！」と

「あ、そういう意味じゃなくて、その、男の人気が、苦手で」

「あ？ そなの？」

「やつなんだす」

わたしはつづむいた。瓶を持つ手は、わざと汗ばんでいた。

「ただいま。あれ、なんだい、若いもん一人で。お邪魔かしき。
深刻そうだね」

「やつ」さんが配達から帰ってきた。

小窓で横になるカズくんの顔と、パイプ椅子でうつむくわたしの
様子を見てなにか勘違いしたのか、ちょっと声が低かった。けれど、
表情は興味津々といった感じで、楽しそうだ。

「いいねー、若いつて。うん、いい、いい

面白やつにして、カズくん、あんまり由佳ちゃんをから
かうんじゃないよ」とこやこやと笑つてどこかへ電話をかけ始めた。

「あ、あたしだけどね、今日のダンス教室にさ、娘もつれて行こうかと思つてるんだけど平氣かね、いやね、カッコいいお兄ちゃんがいるんだって話したらさ、あの子興味持っちゃつてね。え？ そりなんだよ、参つたね、ませガキで。あはは。友達もつれていきたいつていうんだけどね……」

大きな声がカウンターに響く。

おばちゃん、ダンスもやつてたんだ…思ひながら尻を見た。ビックリで引き締まっているわけだ。

カズくんのほうを振り向くと、カズくんもおばちゃんの背中を見たまま黙っていた。

ふと目が合つた。どちらからともなく、わたしたちはくすりと笑つた。自然にそつたことに、わたし自身が驚いた。

怖い人じやないのかもしれない。初めて会話らしい会話ができたことと、笑うと下がる田じりをまじまじと見たことで、抱えていた緊張も多少ほぐれた。

美月ちゃんが帰ってきた。ぶら下げたコンビニ袋の中に、ちっちやくてカラフルなお菓子がいくつも入つている。「あー、なに一人で笑つてんのー」と興味津々だ。

カウンターの外で「ランドセル」とぴょんと跳ねる美月ちゃんと、大きな声で電話を続けるヨウコさんの姿を眺めて、わたしとカズくんは、声を出して笑つた。

バイトを始めて、わたしの生活は規則正しくなった。

店は基本的に日曜が定休日だ。それ以外の日はほぼ毎日出勤して、精力的に働いている。真面目な勤労者だ。だいたいハ時間働いて、帰してもいい。

美月ちゃんとはかなり仲良くなつた。年齢の差はあれど、そこは女同士だ。そこそこ話は合ひ、美月ちゃんの恋愛話も、わたしの小学生時代とまるで異なるので、嘘みたいで面白い。

「アハハ」と美月ちゃんの余話に混ざるよつこじて、わたしとカズくんもそれなりに距離が縮まつた。もう、顔を見ただけで緊張するようなことはなくなつたけれど、腕の筋肉とかふんわり垂れる茶色の髪を見ると、軽く動搖する。

一ヶ月が過ぎ、初めての給料日、わたしは中野サンモールをあちこち物色してまわり、ジャガイモやニンジンや、イチゴジャムや食パンなんかを買いあわって部屋に戻つた。

敦司はバイトがあつてもなくとも、大抵わたしよりも遅く帰宅する。それでもちゃんとご飯を作る。

包丁も鍋も水道も食材も、計算されているような速さで見事にそれぞれの役割を果たしていく。

敦司にしてもカズくんにしても、女のわたしよりもそれらしい。

料理をするふたりの後姿を見ていると、たまに台所に立つ父のことを思い出す。

可愛らしいお弁当を作ってくれはしたけれど、父の、包丁使いは何年経つても危なしかった。大きな手の太い指で握り締める包丁は、おもちゃみたいに小さく見えた。

父は今夜なにを食べるんだろう、と思いながら冷蔵庫に食材を詰め込んで、わたしはカレー作りに取りかかった。

給料日で気分が良かつた。自分が稼いだ金で、敦司に手料理でも作ってやろうと思い立つたのだ。

それでカレーだ。カレー程度ならわたしにも作れる。田舎にいたころも、カレーは何度か作った。父にはそれなりに好評だった。

念には念を入れて、作り方の手順を見ながら慎重に進めた。

包丁をがっちりと握り締め、カズくんみたいに適度な大きさに材料を切り刻み、敦司のようにそつなくことを運んだつもりでいたけれど、途中、まな板から数回ジャガイモが転げ落ちた。

部屋のなかがカレーの匂いで充満し始めるころ、テーブルの上で携帯が震えていることに珍しく気づいた。

手に取り、出でみると田舎さんからだった。

『あ、由佳ちゃん?』

「はー」

悪いんだけどね、と鼻息も荒く始まつたヨウコさんの話によると、あさつての午前中納品でかなりまとめた数の弁当の注文が入ったらしい。イベント会場の昼食に配るのだそうだ。

業者が午前十時半までに引き取りにくるので、それまでに仕上げないといけないらしく、どうやら明日の営業が終わって、明け方から…ともすると夜通しの仕込み、詰め込み作業になりそうだという。

『明日も、由佳ちゃんにも残つてもういたんだけ大丈夫かね』

一度帰宅して、始発でまた出勤してもそれじゃ遅いだろ?。第一、一度寝てしまつたら始発に乗れるように起きれるかどうかも分からぬ。

「はー、大丈夫です」

『いやー、助かるよ。助つ人も探しておくからさ、悪いけど頼むね、

由佳ちゃん』

ヨウコさんはその後、まだ興奮した様子で何か話していた。

大変だなあ、とは思つたけれど、なんだか緊急事態みたいで、わたしはヨウ「さん」の声を聞きながらわくわくしていた。一端の、働く人間みたいな気分になつていた。

電話を切つてからもそわそわしていたので、火にかけたままのカレーのことをするつかり忘れていた。気づいたときには、底のほうがだいぶ焦げていた。

働く人間を氣どる前に、身につけなければならぬことがわたしにはまだまだありそうだ。

落ち込んだままカレーをかき混ぜていると、敦司が帰ってきた。

「いい匂いすると思つたらまさかここからとは。何? どうしたの?」

「カレー作った」

「いや、それは匂いでわかるけど」

「給料入つたんだ、今日。あたしのおじりであたしのお手製カレー」

「すうじいな」

「すうじよ、いろんな意味で」

「由佳が、作つたんだよな」

が、の部分を強調して、敦司は言った。

靴を脱いでわたしの後ろに立つた敦司は、へえ、へえ、へえ、へえ、繰り返している。焦げ臭いこと、気づかないんだろうか。

すぐ嬉しそうな敦司は、部屋で鞄を下ろしてからシャツの腕をぐいと捲くり、レタスをちぎつてサラダを作った。あつというまだつた。

「なんかいいよな」

同じセリフを独り言みたいに何度も言いながら、敦司はひたすらスプーンを口に運んだ。

勢いがいいので、敦司のグレーのシャツにカレーが飛んでくつ付いてしまわないか、心配になってしまつほど食いつぶりだ。焦げなんて、まるつきり気にしていない様子だった。

わたしはそんな敦司の男の子らしい姿を眺めながら、思いのほかパンチの効いてしまつた辛口カレーをちびちびと口に運んだ。何度も牛乳を飲んだ。

失敗作とはいって、相手のために作ったものを喜んで食べてもらおるといつことがこんなにも気分のいいものだとは知らなかつた。

わたしは、父や敦司の作った料理を、こんなにも満足げに充実した顔で食べたことがあつたろうか。

作つても「うひ」とがあたりまえで、淡々と口を動かしていただけだろ。美味しいときは「美味しい」と言葉が自然に出るけれど、嫌いなものにはまず手がない。

美味しくない場合には素直に「まずい」と文句をつけ、「えられたものを腹に流し込むという行為を繰り返していただけの気がする。餌のように。食べたくないものを目の前にした猫が、ふいとそっぽを向くよ。」

「作つてもうれつていいよな」

敦司はまだ言つてゐる。今日は口元にじり飯粒はくつといなければ、鼻の頭にぽつんぽつんと細かい汗が浮かんでゐる。

「良かつたよ。そんなにがつがつ食べるなんじ。焦げてるけど」

「いや、なかなかイケル」

「カレーだからね、そつそつ失敗もしないでしょ。…焦げてるけど」

「好きなやつに作つてもうひつてこののがいいよな、やつぱつ

「は？」

「あ

スプーンをくわえてわたしを上目遣いで見た敦司は、そのまま一瞬止まって、「なんでもない」と妙に焦つて口走り、スプーンの音をやけに高く鳴らしながら、皿に広がったルーをかき集めた。

よほど辛いのか、それとも暑いのか。

おでこにまで汗をにじませ始めた敦司は、シャツの襟元をつかんでぱさぱさと胸に空気を送り込んでいる。皿を持ち上げてわたしから顔を隠すようにして、集めた最後の一囗を飲み込んだ。

結局、敦司は三杯もおかわりした。

わたしは、一皿たいらげるのがやっとで、がぶがぶと飲んだ牛乳で腹が張っていた。次に作るときには、中辛と甘口のルーを混ぜてみようと思った。いつ作ろうかな、と考えたけれど、そう遠くない未来のような気がした。

敦司と流しを綺麗にしてから、窓際に体育座りをして一人で涼んだ。ときどき、柔らかな夜風が前髪をかすめる。

茶色の柵にもたれると、錆びた鉄の匂いがした。鼻先にかかった髪の毛からは、玉葱の匂いがする。

右の空に傾いた丸い月が、白白と浮かんでいた。濃いめの藍色の空に、金属用のペンキを一滴垂らしたみたいなクリアな月だ。身体

に染み入るような月明かりで、気持ちまでまつむらひになつてたつだつた。

「の光が、余分なものや凝り固まつたものや、そういう不必要なものを淨化してくれればいいのに」と思つた。

胸につつかえているものはしづとくへ、いつまでも取れない。いつのまにか沈着してこる。

固まつてしまつと取り除くのは容易でない。その上に溜まつていぐものも流れていかないし、新鮮なものを詰め込んでこまかしてみても、古いものに邪魔されて、新しいものから零れていつてしまつ。

「綺麗だな」

「うん」

「盆踊りのときもこつも、満月だつたよな」

「うん」

敦司となつて、こへりでも昔話ができる。

丸い月を見上げながら、いつしか幼い頃の話になつていた。

順を追つて中学生一年のじふの話までたどり着いたときには、わたくしたちの会話は途切れた。少し重い空気が漂つて、何もしてくれない月明かりだけが窓際を照らしてこる。

「あのときは参ったよ」

沈黙を吹き飛ばそうとわざと明るく言ったわたしの顔を見て、敦司は苦い顔の口元を少しだけ上げて、頷いた。

なーお… なーお…

遠くのほうで猫の声がする。春特有の鳴き声だ。わたしはその声に耳を凝らしながら、体育座りのジーンズの膝をぎゅっと抱え込んだ。裸足の足先が冷えてきて、つま先を擦り合わせた。

「好きなんだよな」

ぼそりと敦司が言った。何のことか意味がわからなくて顔を上げると、敦司は、わたしの足先をじっと見ていた。

「なにが?」

「お前が」

驚いて足の動きが止まった。

それでも敦司は、わたしのつま先をまだ見ている。

「好きって、なにが」

「だからお前が」

「なに、急に」

「わかんね」

突然なにを言い出すのだろう、この男は。冗談にしては意味が深すぎる。からかいにしては性質たちが悪い。

「好きなんだよ、昔から。なぜか、ずっと」

わたしではなく月を見上げた敦司の横顔の、耳の後ろが陰つてい
る。月明かりが、敦司の思考を狂わせたのだろうか。ほんやりと、
うわ言みたいな調子で呟いている。

「敦司、大丈夫？」

本気で聞くと、わたしに顔を向けた敦司と目が合った。黒い目が

ゞ」など潤んで見える。ほんの少しどよみて、言葉を繋いだ。

「どうしたの？」

「好きなんだよ、由佳が」

さすと何かが込み上げた。心臓を掴まれたような感じだ。敦司の言葉の意味がやっとわかつて、わたしは何度もまばたきをした。すればするほど動搖して、何も言えなかつた。

なーお…なーお…

遠くでまだ、猫が鳴いている。月の明かりが次第に弱まって、辺りの色のトーンが落ちる。

少し陰つた敦司の大きな目が、真つ直ぐにこちらを向いてくる。素直な、正直な視線だ。敦司がなにを思つてゐるのか、すぐにわかつた。

予感、というのは、こいつのものなのだらつか。映画より、ドラマより、ずっとリアルだった。

敦司の顔が近づいた。わたしの気持ちを量ような少しの間があつて、やがて躊躇いがちに静かに。

左肩にのせられた敦司の右手を、わたしは自然に受け入れた。唇が触れている間、わたしはじつとして、息を止めていた。

緊張していた。けれどさっきまでの動搖はなかつた。

離れても、不思議とわたしは落ち着いていた。

敦司は全然おじさんみたいな顔なんてしてなくて、若じいような切なそうな、反省しているみたいな顔で、ゆっくりと離れていった。

わたしがいつまでもぼんやりしていたので、敦司のほうが困惑っていた。耳を真っ赤にさせ、「じめん」と呟いた。

敦司がお風呂に入っている間、わたしはまだ柵に寄りかかつたまま窓際で月を見上げていた。

どうしてかわからないけれど、泣きそうだった。

悲しいんだろうか、嬉しいんだろうか。よく、わからない。

つかえていたものが取れたといつよつは、何かが溶け出して広がつたような、複雑な気持ちだ。

けれど同時に、その気持ちを覆うようにして、透明で薄い、柔らかな膜がはつたような感覚もあるのだった。

なーお…なーお…

猫の声が近づいてくる。それに応えるよつこじと、近づいてくる
同じ鳴き声がした。

円は知らん顔で、わたしを見おろしてくる。

17・人と係わらない限り

カーテンの隙間から差し込む光が眩しくて、わたしは目を覚ました。

雀の鳴き声があちこちから聞こえていた。微かに羽ばたく音もある。

顔を横切る光は壁に届いて、一本の黄色い細い線を描いていた。

もぞもぞと寝返りを打つて、光を遮った。

壁にくつつくよつにして、敷司はぐっすり眠っていた。毛布にぐるぐるこぐるまつて、ミノムシみたいだ。黒い頭だけが覗いている。

敷司の枕もとの目覚まし時計を見ると、六時少し前だった。音が鳴り出すまで、あと二十分ある。

タベはなかなか寝付けなかつたので、二十分でも寝たい気分だった。けれど目を閉じて深呼吸してみても、一度寝出来る感じがしない。

仕方なくわたしはむづくりと身体を起こして、這いつくばりながら窓際へ行つた。カーテンをひくと、擦りガラスを通して朝の光が眩しかつた。

ぎゅっと目を開じる。

起にしてしまつんじゃないかと振り向いて確認してみたけれど、

敦司に動く様子はなかつた。細かつた光は大きくなつていて、部屋
いっぱいに広がつてゐる。

静かに窓を開けた。五月の朝の、まだ汚れていない爽やかな風が
流れ込む。

キスの後、特になにが起つてもなかつた。

「おやすみ」を言ひ合つて、いつものように畳々の布団に入つた。
なーおなーおと鳴く猫の声を黙つて聞きながら、お互に、沈黙
に耐えていた。

敦司がなかなか寝付けないでいたのはわかつてゐた。わたしも、
布団のなかで息をひそめて丸まつてゐた。

動いちゃいけないような気がした。毛布を深く被つて、その中で
ちびりちびりと呼吸していたので、苦しかつた。

同じ体勢でいるのがさすがに辛くなつてきて、慎重に、ちょっとと
だけ身体を動かした。が、布団が擦れて、かさりと弱い音を立てた。

しまつた、と失敗したような気分でいると、「そりと敦司も動い
た。妙にほつとして耳を澄ましてると、「めんな」と小さく聞
こえた。

わたしは黙つていた。寝たふりをしていたのだけれど、起きてい
るのは敦司もわかつていただろう。

悶々とこうか、ぴりぴりとこうか、どつこも居心地の悪い空気が漂っていた。

なにか言おうかな、と何度も思つたけれど、いい言葉が思い浮かばなかつた。

言つたところで、お互に緊張がほぐれるわけでもないだらつ。逆に朝まで眠れないかもしれない。

そのうちわたしは眠りに落ちた。何だか変な夢を見たような気がするけれど、覚えていない。

片田を開じて、まだ白っぽい空を見上げた。昨日月の居た場所には、尾を引いた千切れた雲が薄っすらと浮かんでいる。

しばしば眺めていると、雲はゆっくりと、空に溶けて無くなつた。
足を部屋に投げ出して、柵に寄りかかる。

夜、ここで敦司とキスをした。

その出来事も敦司の言葉も、昨日見た夢の一部だったんじゃない
かと思つてみたけれど、脣に指をあててみると、敦司の感触は意外
にもしっかりと残つているのだった。

毛布にくるまつた敦司をぼんやり眺めていると、田舎まじが勢い
良く鳴つた。

そもそもと、敦司が顔と腕を出して田原ましを止めた。少しむくんだ顔で、眩しそうに田原を細めながらこっちを向く。「おはよ」と言つと、敦司は少し驚いた顔をして、「早いな」と言つて起き上がつた。

夢みたいな夜の後だつて、朝は必ずやつてくる。

昨日の残りのカレーを温めなおして、神妙な雰囲気のなか、朝ごはんを食べた。

焦げ臭さは昨日よりも鼻について、わたしは眉間に皺が寄つた。敦司の顔を黙つて盗み見ると、同じような顔をしながら口を動かしていた。

ほとんど会話も無いまま、わたしたちは部屋を出た。

空は、水色になつている。遠くのマンショングランダの窓がいくつか開いていた。既に洗濯物のぶら下がつている部屋もある。

わたしと敦司が小道に出ると、白い猫が前を横切つた。

塀の隅で警戒するようにこちらを見上げている。「昨日鳴いていたのはお前か」とおもわず呟くと、敦司のほうが反応して歩調が緩んだ。

大通りに出る。平日のような交通量はない。

坂を下る途中で、腕を組みながら歩くカップルとすれ違つた。酔

つているような足取りで、わたしたちの後ろに過ぎてこぐ。さやはは、と女人人が甲高く笑うのが聞こえた。

「コンビニの前には中学生くらいの男の子たちがいて、漫画雑誌を全員で覗き込んでいた。一人が笑うと他も一斉に笑う。格闘シーンかそういうじやないのか。筆圧の強いページを開いている。

乗客の少ないバスが通り過ぎた。窓際のおばあさんと田が合つた。ような気がするだけで、わたしの後ろの何か別のものを見ていたのかもしれない。

適度に緩い、土曜の朝だ。

無性に炭酸が飲みたくなつて、自販機でコーラを買つた。がごん、と景気のいい音と共にボトルが落ちてきた。

「なんか飲む?」と聞くと、敦司は少し迷つてから同じものを指差した。やつぱりな、と思ひながらボタンを押す。

歩きながら半分まで一気に飲み干すと、我慢するまでもなくゲップが出た。思つていた以上に豪快だつた。

あはは、と敦司を見上げて笑つてみせた。笑つていふうちに本当に可笑しくなつてきて涙と鼻水が出てきた。

何か拭き取るのではないかとジーンズのポケットをあさつてみると昨日のレシートしか出でこなかつた。焦げ付いたカレーを思い出すと全部が可笑しく思えてきて、腹を抱えて笑つた。

「ぶ

何かが弾けたように、敦司も笑い出した。「汚ねーな」とわたしの頭を叩く顔に、いつも調子が戻つてきている。「カレー、焦げてたでしょ」と言うと、「朝氣づいた」と答えた。

意外に鈍い奴だ。

すれ違つたおじさんが、いちやつくな、みたいな顔をしてわたしたちをじろりと見ていった。

そんな感じに映るのだろうか、わたしと敦司も。恋人同士がじやれ合つみみたいに。

誰がどんな時間を過ごしていったのかなんて、すれ違つただけの人にはわからないものだ。

あのカップルも、中学生たちも、おばあさんも、おじさんも、昨日どんな時間を過ごしてこれから何をするのかなんて、わたしの知つたことじゃないし、関心だつてない。

人と係わらない限り、想像だけで終わってしまうんだろう。

サンプラザ前をジョギングしている女人人がいた。水色の上下のジャージ姿だ。空の色と同じで、見ているこちらも清々しい。

ポニー テールが左右に揺れて、楽しそうだ。でも走っている本人は苦しいのかもしれない。表情だけでは本当のところはわからない。

隣の敦司を見上げると、美味そつと「コーラを飲んでる。

「コーラ、美味しいね」

「朝から炭酸はちょっとキツイかもな」

そうか、とわたしは最後の半分を一気に飲み干した。

駅に着いた。敦司はいつものようにわたしの頭に手を置いた。今はわたしも、負けじと敦司の肩を叩いてやった。

シャツの後姿を見送つてから、改札を抜けた。

ホームには今日も知らない顔たちがそれぞれの面持ちで並んでいる。

その列のひとつに、わたしも静かに連なった。

昨日は何もあつませんでした、みたいな顔をして。

店に着くと、カズくんもヨウコちゃんも既に仕込みに入っていた。

「おはよう」「わあ

「おはよ、由佳ちゃん」

「はよ

挨拶を交わし、わたしは自分の黄色いHプロンをしてこつむぎんりの営業が始まった。

黄色のHプロンはヨウコちゃんが与えてくれたものだ。「由佳ちゃん」と渡されたのだけれど、どうこう意味だらけ。新米、とことことだらうか。

左右のポケット部分だけが黄色とオレンジのチョック柄だ。まあ気に入っている。

その由はのんびりと過ぎた。土曜はいつも客が少ない。明日の準備のため、夕方過ぎには早々にシャッターを下ろした。

弁当屋の厨房の奥に、二畳ほどの小さな部屋がある。そこをわたしゃカズくんが休憩室に使っている。

たまに美月ちゃんの友達が集まっていることもある。美月ちゃん

に似た、おませな印象の女の子たちだ。

わたしとカズくんが一緒に入っていったりすると、ひそひそと、何やら勘ぐられる。が、それにも慣れた。

一階は三ウ「さんと美月ちゃんの居住スペースだ。入ったことがないでの部屋の様子は知らないけれど、一人きりで暮らしているのは何となく分かる。三ウ「さんのお旦那さん…美月ちゃんのお父さんにある人を、見たことがないのだ。

「一時くらこから仕込み始めよつと思つんだけどね、大丈夫かい？」

赤いエプロンの裾で手を拭きながら三ウ「さんは言つた。わたしとカズくんは目を合わせて、それから「くづと頷いた。

「よろしくね。それまで休んでてね。あ、その辺の材料適当に使つて夕飯食べていいからさ、カズくん、由佳ちゃんになんか作つてやつて。あたし支払いと集金と、仕入れに行つてくるからね、んじゃよろしくね」

カズくんが「いつてらつしゃい」と返事をした。それを見て、わたくしも「はい」と声を出した。

厨房の掃除を始めたカズくんを手伝つた。掃除が終わるとカズくんは、「先に休んでて」と腰に手を当てながら言った。「じゃ、そうします」と答えて、わたしは厨房を出た。

部屋にはテレビもラジオもない。おもちゃみたいな白いテーブルと赤茶色の座布団が何枚かあるだけだ。

今日はヨウ「さんが毛布を準備してくれていたので、その上に寝転がって天井を眺めた。することが無かつたので、持つてきいていた本を読んだ。ページをめくつてもめくつても内容が頭に入つてこなくて、何度も前に戻つた。たぶん、わたしは興奮している。

本を閉じて毛布に絡まつた。「ぐるぐると部屋を転げまわり、ひとり樂しんだ。

何だかお泊り会みたいな気分になつていて。今日は「」に泊まって、夜中から仕事を開始するのだと思つと、妙にわくわくした。

「転がりながらふと気づいた。」「に泊まるところ」とは、カズくんも一緒ということだ。

急にどきどきし出した。敦司以外の男の人と、ひとつずつ部屋で長い時間一緒にいたことなんてない。

「やばいな

どきどきが不安に変わつて、絡まつた毛布の端を握り締め、天井の蛍光灯を眺めていると突然ドアが開いた。

「なにしてんの」

ドアの先にカズくんが立つていた。弁当容器を一つ抱えて、丸まつたわたしを見下ろしている。

日向ぼっこの中腰に襲われた猫の気分だ。目を見開いたまま固まってしまった。

「面白〜?」

「あ、いや、全然」

「つていうか、もう寝んの?」

「まだ、寝ません」

焦つてわたしは起きあがつた。毛布が絡んでいたので時間がかかつた。

カズくんはわたしの弁当を用意してくれていた。野菜炒めとハンバーグと、ポテトサラダと煮物と、ワインナーとおしんこが入っていた。

「なんか、豪華」

「あまり物だし」

ワインナーは「丁寧にタマさんになっていた。

足を数えてみると、六本しかなかつた。ちろりとカズくんを見て、出そうになつた言葉を呑みこんだ。

カズくんは、わたしにもタマさんワインナーにも、特に興味もなさそうに黙々と口を動かしていた。Tシャツの裾がべろんと捲れていた。

食べ終わるとカズくんは、畳の上にござりと横になつた。

背の高いカズくんが寝転がつたせいで、三畳部屋はもつと狭くなつた。

わたしは隅のほうで膝を抱えて、寝ながら腹をさするカズくんの姿を眺めた。一人きりだとやつぱり緊張する。

Tシャツが上下して、腹が見え隠れしている。食べたばかりなのに平らで引き締まつた腹だ。そんなところは、敦司と同じだ。

天井を見ながら、カズくんが口を開いた。

「あんたさ、東京タワーが好きなんだつて？」

「へ？」

「アウタさんが言つてたよ、由佳ちゃんは下から見るタワーが好き

なんだって

「え」

「変わってるよな」

「わ、ですかね」

「上らないの？」

「上らないってこりが、タワーが見たいだけだから下からでも十分で」

くくと笑つたカズくんは、そうか、と呟いた。

「中野から通りの、大変じやねーの」

話が飛ぶ。緊張してこるので、質問に反応するのが大変だ。

「はい」

「それ、どうち？」

「あ、大変じやない、のう」

「そ」

質問するくせに、あつもつしてくる。会話はそこで終わる。

カズくんはどうから通つてゐんだらば。やつてえばわたしは、この人のことを何も知らない。

わたしが中野から弁当屋に着くと、カズはいつも先に来ていて仕込みをしてくる。

帰りもわたしのほうが先に出るので、カズくんがどうに帰つてくるのかも分からぬ。

そもそも若いのに、じつじつこんなちっぽけな弁当屋に勤めているのだらう。三年も。

「あの」

「んん?」

思わず声をかけてしまった。しまった、と思つたけれど、振つてしまつたので続けるしかない。

「じつして弁当屋...」じつて働いてゐるのですか

「タワーが見えるから」

「へ？」

「東京タワーの見えるところで働きたかったから」

頭の下で腕を組みながら、普通にそんなことを言っている。可笑しな人だ。

「見えるところって」

「タワーが好きなんだよ俺も。別にどこでも良かつたんだけど、ヨウコさんもいい人だしさ。ま、縁があったというか、そんな感じ」

「へえ…」

「上京して調理の専門学校通いながらバイトさせてもらひてたからさ、資格とつたら他に行こうと思つてたけど、何となくまだここにいる」

「そう、ですか」

「うう」

タワーが見えるからって…カズくんだったわたしのことを言えた口じゃないと思う。そんな理由か、なんて少し思つてしまつたけれど、どうしてか笑う気になれなかつた。

なんとなく分かる。わたしが東京に出てきて、真っ先に東京タワ

ーが見たいと思ったのと同じようなものだらう。

東京タワーを見ていると、自分が東京にいるのだと実感できる。けれど同時に、この街に出てきたことの意味を考えて何となく落ち込んでしまつたりもするのだが。

わたしなんて特にそうだ。何がしたくて、ここに居るのだらう。

カズくんは天井を見つめたまま、わたしは膝を抱えたままでしばらく無言だった。

もやもやしていたけれど、少し嬉しかった。係わりを持つ人のことは、ちょっとだけでも何かしらの情報は仕入れておいたほうがいい。そのほうが、やりやすい。

「よし、行つてみつか」

高く持ち上げた両足を下ろし、反動をつけて勢いよく身体を起したカズくんが言った。

「え？」

「東京タワー」

「東京タワー？」

「行くぞ」

「へ？」

立ち上がったカズくんは、ドアの前で振り向いて「行くぞ」ともう一度行つた。

「行くぞって」

「たまには夜のタワーもいいだろ」

「いや……」

「嫌?
いや?」

「あ、いや、そりゃやなへ」

「じゃ、行くぞ」

靴を履いたカズくんはさっと部屋を出ていってしまった。

「あ、待つて」

訳が分からぬままわたしもつらるるように立ち上がった。スニーカーに足を入れ、つまづきながらカズくんの後を追つた。スニ

大通りに出る前に追いついた。カズくんはジーンズのポケットに手を入れて歩いている。足取りは軽い。

そのまま後ろについて歩いた。

右に折れると、赤く色づいたタワーが見えた。

風は極弱く動いている。

赤い東京タワーがどんどん大きくなる。

点灯したタワーをちゃんと見るのは久しぶりだつた。といつよりも、タワーをじっくりと見ることが最近なかつた。

バイトを始めてから田中はずつと弁当屋の中だ。たまに店先に出で向かいのビルの上から頭を覗かせる姿を見たことはあつたけれど、もう随分と縁遠くなつてゐるよつた気がした。

「下からつて、どの辺りから見てたの、いつも」

「え？」

「下から見る東京タワーが好きなんだろ？　どこで見てたの」

「ああ」

ちょっとN公園の横を過ぎるとこりだつた。

指を差し、「そ！」と答えると、カズくんはその方向に向かつて土手を登り始めた。すたすた行つてしまつ。わたし以上にマイペースだ。慌ててあとに続いた。

狭い階段を登ろうとしたときに、前のめりにこけた。「いで」と声をあげると、「大丈夫か」と先に登つていたカズくんに見下ろさ

れた。

「あんたって、いちいち面白いのな」

笑いながら手を差し出された。反射的にその手を取りついとして右手を上げかけたけれど、はつとして引っ込める。

「だ、大丈夫です、一人で立てるし」

「そ」

カズくんはまた、くくつと笑つて手を引っ込めた。

「この人は笑つてばかりだ。わたしがカウンターに頭を打ちつけたときも、今も。

カズくんには少し、薄情などこりがあるような気がしてきた。そうじやないのかもしれないけれど、あまりぐいぐいと踏み込んでこない。

「結構です」と言えれば、「じゃあ、お好きに」と言つタイプだらう。

「大丈夫」と言つても、「本当に?」とこつまで経つても心配し続ける敦司とは正反対だ。

でもいい。無駄に優しくされると緊張してしまつ。男は苦手だけ

れど、このくらいの距離感はむしろやつやすい。だからわたしはこうして、カズくんと一人で夜道なんて歩けるのだろう。

「セレのベンチ」

「ふーん」

弁当を食べながらぼんやりとタワーを見上げていたベンチだ。そして鞄を盗られた場所だ。何だか随分前のよつた気がする。

「なるほど。いいポジション」

「でしゃ」

ちよつと嬉しくなる。

夜空に煌々（ひかほ）と浮かび上がるタワーを見上げた。昼間とは全然違う顔。赤くて、何となくすましている感じだ。

相変わらず前方をじっと見据えている。しゃんとしている。夜もいいな、そう思つた。黒バックも、なかなか似合つている。

「セレにお金失くしたんですね」

気が緩んだのか、わたしはあの日のこと話を語り始めた。

「やつなの？」

「ソリで寝ちゃって、起きたら鞄がなくなっていて」

「こんなところ寝るからだろ。普通は寝ないだろ」

「…あまつにも気持ちが良くなつて。晴れてたし。おれか盗られるなんて思つてなかつたし。おじこちやんくらいしか、通らなこし

「イタズラされなくてよかつたな」

「え？」

「男苦手なんだろ？ ソリの場所こそ危ねーぞ」

「はあ」

「あんたが、無防備すきんだよ、たぶん」

無防備、なのだらうか。それよりも、かなりのバリアを張つて生きてきたつもりなのだが。

踏み込まれないよつ。自分からも踏み入らず。受け入れるものも、なるべく少なめにして。

もつとも、カズくんの言つ無防備は、そういう意味とはまた違う

のだれのナビ。

「せつかくだし、上り口

カズくんはまたさつと行ってしまった。

階段を下りて、わたしを見上げている。

手、貸すつか、なんて言つてはいるけれど、両手はポケットに入つたままだ。貸すつもりなんて全然なさそうだ。

さつきのわたしの態度で、わたしが手を借りるなんてしないことをわかつての言葉だろう。

「人の人、どうこうもつなんだ、との手を見やりながら「平氣です」とぶつかりぼうに答えて、わたしは薄暗くてよく見えない段差を足先で探つた。

入り口でカズくんに入場料を払つてもらつた。

慌てて出てきたので、財布も携帯も全て置いてきてしまつっていた。

Hレベーターに乗つた時点では、わたしは既に浮き足立つていた。

展望台なんて、本当に何年ぶりだらう。下に下ること流れしていく東京タワーの赤い身体と、どんどん小さくなつていく地上の建物に少しめぐらしくしてしまつ。

それでもわたしはガラスにへばりついて、小さく子みたいにきやあきやあはしゃいだ。

乗り合わせたカップルがくすくすと笑う声が聞こえたけれど、聞こえないふりをした。

「す」ーー

エレベーターを降りると、別世界だった。目の前に光の海。普通に感動した。

ぐるぐる歩き回り、三百六十度分、おもいつきり夜景を楽しんだ。気づくとひとりぼっちになつていて、慌ててカズくんの姿を探した。

南側のガラスの前でカズくんの後ろ姿をみつけると、妙に安心した。隣に立つと、「はしゃぎすぎだし」と笑われた。

カズくんは、遠くのレインボーブリッジ辺りをじっと見始めた。わたしなんとなく、その方向に目を凝らす。

「綺麗」

「だな」

「東京タワーって、毎日こんな景色見てるんだ」

「なんだそれ

「昼も夜も、一田中」

「毎日毎日」

「フトフロ、深いね」

「今タワーの腹の中だしな」

「あはは、そうだね」

隣を見上げると、カズくんの切れ長の目は余計に細くなっていた。素直に楽しんでいる自分に気づいて、急に照れくさくなる。

視線をそらして、遠くじゃない、足元の、ずっと下の方に広がる明かりを田で追つた。

明るいけれど、黒の中に身を潜めたいつもとは違つ街並み。きょろきょろと視線を彷徨わせて弁当屋を探してみたけれど、全然見つからなかつた。

明かりを落としてしまつたあんな小さな弁当屋なんて、探せるわけがない。

今、わたしがここに居るなんてことも、下にいる人たちには勿論わからないんだろう。

（）からだつて、下に誰がいるのかなんてわからないし、見えな

い。

「一体どれくらいの人たちが、どんなことを考えて、この夜を過ごしていいのだね?」

「この光の海の中で。魚みたいに泳ぐだけな、たくさんの人たちは。

「なんか、小さこよね」

「なにが」

「こりこり」

「いろいろ、な」

「なんで、抱えてるものはおつかへ感じるんだ?」

「…捨てられないからだろ」

「…なんで捨てられないんだ?」

「捨てなくてもいいんじゃないの」

机に向かって、カズくんは伸びをした。ぐつと反らされた背中のくぼみをなんとなく田でなぞる。真っ直ぐな、いい背骨だ。

ガラスに視線を移す。光にまきられるよつとして、わたしとカズくんが並んでいる。ガラスに映る田と田が合ったような気がするけれど

ど、光に邪魔されて、よく見えない。

ぼんやり映るわたしたちは、頬りない。

「捨てたいものも、忘れないものも、いっぱいあるよ」

「まあな」

「いろいろ、めんどくさい」

「タワー好きなんだろ?」

「え?」

「タワーみたいに受け入れればいいじゃん、とにかく」

「なにそれ」

さあな、なんて言いながら身体を起こしたカズくんは、尻ポケットに手を入れて首をかしげた。自分で言つたくせに、本当にわからない、みたいな顔をしている。

ビルの窓の明かりは、灯つては消え、消えては灯りを繰り返している。微妙な時間帯だ。

車の長い列がゆるゆると連なつて交差しながら走っている。

観覧車は、気づかないくらいの速度でゆっくり動いている。

あちこちに散らばる看板の明かりが周期的に点滅する。

綺麗だけれど、次第に寂しくなってきて、その明かりを包むようにして広がる空を見上げた。

空の藍色は変わらない。ずっと同じことにある深い空を見上げると、この街も自分も、ものすごく小さく思えてきた。

一人同時に、ため息に似た息をふつと吐いた。

もう一度、わたしたちは顔を見合させて笑った。極弱く。

「」の距離感がちょうどいい。すっとぼけた感じのカズくんの態度も、気楽だ。

なかなか興味深い人だ、とわたしはひとり、頷いた。

感心に似た気持ちは、帰り道で一転三転した。

わたしはカズくんにおんぶされていた。

カズくんの背中で、どこに手を置いていいのか分からず、上体を反らして乗つかつっていた。

大通りに出てすぐ、何もない歩道でわたしは派手に転んだ。

どうして、この人の前でばかりいろいろ失敗するのだろう。

転んだ痛みよりも、何もないところで転んだことに自分でびっくりしてしまつて起き上がれずにいた。アスファルトに突つ伏しながら、睡然としていた。

なかなか顔を上げないわたしを心配したのだろう。両脇に手を突つ込まれたかと思うと、わたしの身体はひょいと起こされていた。と同時に、近いところで顔を覗き込まれた。

「大丈夫か？」

さつきまで普通に会話ができるていたのが嘘みたいに、これにわたしは反応した。途端に緊張して、案の定固まつた。両脇に置かれたままの手が、熱い。

なかなか歩き出さないわたしに業を煮やしたカズくんは、今度はおもむろにわたしを背負つたのだ。

「あわわわわ」

降りして、の言葉もえ声にならなかつた。ばたばたと足を動かすわたしに、「落ち着けつて」と喝を入れながら、カズくんは歩き出した。

「あああああ、あの」

「ハハハ」

「お、おお…」

「は？」

「おひ、降ひし…」

「やだね」

くくく、とかづくんはいつもその調子で笑いながら、とんとんとんと軽快に歩いている。

そのうち鼻歌まで出てきた。この状況を、楽しんでこらしこら。

「だ、大丈夫、だ、から…」

「荒治療だ、もつと引っ付け」

前から来る人たちは、見て見ないふりをする。

後ろからやつてくる人たちも、ちょっと振り返って、余計なものを見てしまったような顔をして追い抜いて行くだけだ。

敦司とは、キスだつてできたのに、何なのだらう、この動搖は。

「ほん、とにかく、大丈夫、だから」

「まあ、いいから」

答えになつていない。

やつと出るよくなつた声を振り絞つて、何度も「降ろして」と訴えただれど、聞く耳を持つてくれない。

必死で足をばたつかせても、ますますがっちり抱え込まれるだけで、無駄な抵抗だった。

「ちゃんとしてろつて。むしろしがみ付くべらにしろよ。つまんねーな」

思つていたタイプじゃない。「そうですか」と受け流すタイプでもない。これじゃ、かなりのドリだ。

「いんなことも駄目なの？　この先どうすんだよ、男できたら」

どうすんだよつて、どうすんだよ。回らない頭で言葉を返そつとしたけれど、抵抗するのが無駄だとわかると、力が抜けてきた。

観念したわたしは、まるで荷物みたいにカズくんに背負われたまま大通りを下り、店まで運ばれた。

カズくんが一步足を踏み出すたびに、心地よい振動が背中から伝わってくる。なのにわたしはカズくんの背中に寄りかかれなかつた。真っ直ぐな背骨は、わたしを背負つたせいで少しまつっている。

途中、車のクラクションが一回鳴つて、冷やかされた。

カズくんはずっと鼻歌を歌つてゐる。

恥ずかしいのと情けないのと、観念の後に残つたいつもとは違う緊張に、頭が混乱していた。

普通に、どきどきしていた。

背骨、撫でおけばよかつたな、と何日後かには思つたのだけれど。

19・大丈夫の答え（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

ノッポンブラザーズをご存知ですか？ 東京タワーのキャラクターです。

双子の男の子、という設定のピンクのバナナみたいな姿に、それぞ赤と青のオーバーオール着用したゆるキャラです。

彼らの夢のひとつに、「子供から逃げられないようにしてること」とあるのですが、彼らの身長は「一メートル一十三センチ」。

大人でも逃げ出しそうなその身長設定に、彼らの夢が夢で終わってしまわないことを祈りました。

20・人と係わつていいくつて

店に戻ると、部屋に美月ちゃんがいた。

毛布の上にうつぶせになつて、雑誌を読んでいる。

若そうな、けれどわたしとは違う種類の女の子が好きそうな、パステル調の色合いが強い雑誌だ。美月ちゃんの、ピンクと水色の上下の服装とぴったりマッチしている。

わたしたちの姿を見て、美月ちゃんの目がみるみるうちに大きくなつた。

「なに、なにいー？ なんでおんぶなんてしてんのー？」

カズくんはわたしを背負つたままだつた。

「こつまにやつこう関係になつたのー？」

美月ちゃんは、明らかに勘違いしている。

毛布の上にがばりと起き上がり、見ていた雑誌を両手でつかんでぱんぱんと床を叩きはじめた。何だかわからないが、ひどく喜んでいる。

「ち、違ひ、そなんんじゃなくて」

焦つたわたしはカズくんの肩を叩きながら抱え込まれている足をバタつかせただけれど、カズくんの方はと言えば、この状況も樂しんでいるらしかった。

「つ」れつきから

くくく、と笑いながら、美月ちゃんのことまでからかい始めた。

「つ」れつき！　ねえねえ、一人でどこ行つてたのー？

「いいとこ」

「えー？」

好奇心でいっぱいの美月ちゃんの顔は、少しばかり赤らんだ。

靴を脱ぎ、部屋に上がつたカズくんは、「よいしょ」とわたしを降ろした。

降ろされたわたしは足に力が入らなくて、といつよりも全身から氣力が奪われていて、畳の上にへたり込むしかなかつた。

「大丈夫？」

両手を畳について足を投げ出し、既にリラックスしているカズくんが笑いながらわたしを見ている。

大丈夫って、あんたがこうさせたんじゃないか、と上目遣いで睨んでみせたけれど、効果はなかつた。

毛布を抱え込んで部屋の隅に移動したわたしは、まだ力が入らない。

そんなわたしを尻目に、カズくんと美月ちゃんはけらけら笑いながらおしゃべりをしている。

東京タワーに行つたこと、わたしが階段でこけたこと、何もない道路の上でおもいつきり転んだこと、わたしの失敗談ばかりをして、すごく楽しそうだ。

わたしのことなんて、完全無視だ。唇を尖らせて、そんな二人をしばらく部屋の隅でぶうたれて眺めていた。

何なんだろう。最近は疲れることがかり多くて大変だ。いろんなことに振り回されているような気がする。

敦司にしてもカズくんにしても、どんだけわたしを仰天させれば気が済むんだ、なんて少しイラつきながら、おしゃべりを続けるふたりをこちらも無視してやる。と本に手を伸ばしたとき、携帯のラ

ンプが青く点滅していると気づいた。

確認すると留守電が一件入っていた。

「敦司だ」

一件、といひことは敦司に決まっている。聞いてみるとやはりぱりそうで、一件目に楽しそうな高い声で『今日は何か食いに行こうか』と入っていた。

そこで「あ」と思い出した。今日は帰らないことを言つていなかつた。

朝の神妙な雰囲気に飲み込まれて、すっかり忘れていた。

やべ、と思いながら一件目を聞くと、半分怒つているような、でも心配そうなトーンの落ちた声で『もつすぐ夜で暗くなるしどこまつつき歩いているんだ』という内容のメッセージが流れてきた。

また心配かけてしまつた。

改札で別れた敦司のシャツの後姿を思い出して頭をかいていると、美月ちゃんが目敏く声をかけてきた。

「どうしたの由佳ちゃん、渋い顔して。電話？　あ、もしかして彼氏？　えー、それじゃ浮気になっちゃうじちゃん、カズくんがいるのこー。ねえカズくん」

美冴ちゃんはわたしの返事など待たず一人で勝手に妄想して面白そうにカズくんに話をふる。『ウウさん』そつくりだ。

カズくんは、口の端だけを上げて笑っている。

「いや、違うんだけど」

「誰、誰ー？」

「いや、ちゅうど」

「怪しー」

「今日、戻らないって言つの忘れてきちやった」

言つてから慌てて口をふさいだ。これじゃ、美冴ちゃんの好奇心をますます煽つてしまつ。

「えー、誰にー？」

思つたとおり田を輝かせ始めた美冴ちゃんに詰め寄られた。

わたしは身を引いて壁に張り付いた。小学生の女の子にビビッてるすんだ、と情けなくなる。なんでもない、と訴えても美冴ちゃん

んはなかなか引かない。

「由佳ちゃん、誰かと一緒に暮らしてんだー。ねえ、誰と? 女の子? 男の人?」

「友達……」

「だからあ、女の子? 男の人?」

「お……」

「お?」

「い、いいじゃん、誰だつたら」

「あーー、男の人でしょー、言わないつてことは絶対そうだ」

ますます楽しそうな美月ちゃんを横田にカズくんの顔をちらりと見た。

一瞬目があつたけれど、興味なさそうに視線を逸らされる。

さつきはわたしのことをからかっておんぶまでしたくせに、今度は知らん顔だ。

なんとなく、ムカついた。

「男の人。一緒に住んでるの。ずっと昔から知ってる人。心配して電話くれた」

視線は美月ちゃんの顔を通り越して、そっぽを向いたカズくんを見てしまい、自分でも驚くほど棘のある声が出た。

なんだか、いろいろぶちまけたい気分だ。

「男の人！」

「うん、そう」

「やつぱり！」

「いつも心配かけてばっか

「えー、由佳ちゃんそういう人居たんだー」

「まあ……そう」

あ、これでは彼氏みたいに聞こえてしまう。

「ねえ彼氏？」

「そうじゃないけど！　あ、違うけど……でも…　昨日の夜、キ…」

「 もへ。」

「 キ、キ、」

カズくんは畳に横になつた。うん、と伸びをしていく。

なんだよ、なんなんだよ。

口をパクつかせたまま眺めていると、肩肘をついて頭をさやえた
カズくんがこっちを向いて、目が合つた。

急に焦る。

「 キ、キ、金魚」

「 はあ？」

「 ちゅうと電話してくるー。」

わたしは立ち上がって外に出た。

扉の前で寝転がるカズくんが邪魔で、その上をまたいだ。妙に緊張していた。

「 あ、敦司？」「 めん、あたし」

電話をすくないとすぐには敷向が出た。

『お前やー、もひ夜だぞ、何してんだよ』

おもいつきり不機嫌だ。かさかれど、何かの音がする。また掃除でもしてゐるんだろうか。

「『』めん、今日歸れないって言ひの忘れてた」

『は？ まだか、また金盜られたんじゃねーよな。つてか、また動けないとか？』

電話の向ひの声が急に荒てだす。しん、として音が鳴り止んだ。

「ううん、やうじやなくて、弁当屋が忙しくて。明日までこすりいいっぱい弁当作んなきゃなんないの。で、今日泊まつて、夜中から皆で作業するんだ」

『……よくわからんんだけど』

「えーと……」

頭を整理する。

敦司は「は?」とか「うん」とか、「で?」とか「日本語で話せ」とか言いながら、わたしのヘタクソな説明を聞いていた。

一メートル先の街灯が、ちかちか点滅している。

巧く説明できなくてもやもやしながら、Tシャツの裾から手を突っ込んで背中をかいだ。

開いた隙間から、すうっと涼しい風が入り込む。

帽子を被つた若い男の人が、狭い通りの向こうからゆっくりと歩いてきた。

店先にぽつんと立つわたしをじつとじつと見てくる。歩調が緩む。値踏みするような目つきだ。

ぞくりとして、携帯を耳に当たまま一歩後ひこ下がった。「あんた無防備すぎんだよ」カズくんの言葉を思い出して、Tシャツに入れた手を降ろす。

「そんなことないもん」

背筋を伸ばし、キツと男の人を睨んでやつた。男の人は眉間に皺を寄せて、ペッと唾を吐いてから大通りのほうへ消えていった。

『は？ なに？』

電話の向こうで、敷司が怪訝な声を出す。なんでもない、と言いかけた時にいきなり後ろから肩を叩かれた。ひいつと声をあげて振り返ると、ヨウコさんだった。

赤いエプロンはしてないけれど、同じ色をしたTシャツ姿のヨウコさんの大きな胸が目の前にあった。「びっくりしたじゃないですか」と声をあげると、ヨウコさんの気前よく張った腹が上下した。

「下に下りてきて聞いたんだよ美月から。由佳ちゃん男の人と電話しに行つたってね」

「え？」

『おい由佳、ひいつてなんだよ今の話』

「聞いたって……」

「友達かい？」

『由佳？』

「あ、なんでもない」

「その子、暇かね？」

「え？」

『おいつじょ。誰かと話してんの？　由佳？』

「ウ」さんは敦司の一人に質問されて、びつりと話しているのかわからなくなってきた。

わたしは一つのことを同時に進めることができない。

ひとつのことを整理するのだけ、時間がかかるタイプだ。

電話に出で、カレーを焦がしたよ。玄関の鍵をかけて、窓の鍵を忘れたよ。」

あたふたしてると、ひょこと「」さんは携帯を奪われた。

「あ」

「もしもし？　あら、ホントに男の人だね。あ、ごめんなさいね、あたし弁当屋のものですけど。そういう、由佳ちゃんの。じんばんは」

「えええ…」

「ウ」さんは奪った携帯で敦司と話し始めてしまった。

「」として眺めていると、「」さんの「あはは」という大きな笑い声が狭い道に響いた。大きな胸が揺れている。

「こやそん」となごよ、由佳ちゃん、すゞくよく頑張ってくれますよ。え？ あはは、さうだね、ちょっと変わった感じあるけどね」

「変わったって…」

ドラマなんかで見る、おばちゃんの電話シーンのようだ。

三つ口さんの手の中でわたしの携帯がぽやりぽやりと点滅している。確かに繋がっている。普通に会話していくその姿で、口を開けて見入ってしまった。

「急に」「めんなさいね。ええそつなんですよ、久しぶりの大注文ですね。彼氏さんだろ？ 由佳ちゃん借り出しだしきりて悪かったねえ。え？ ああ違うの、なんだそうなの。うん、うん、へえ、そうなの」

「……」

敦司も敦司だ。いきなり代わられて、よく会話なんてできるものだ。しかも何の話題で盛り上がってるのだ。

「ところでや、あんた…あ、あんたなんて悪いね、名前なんていうの？ カワハラ…アツシくんね、アツシくんさ、手伝いに出てこれ

ないかい？」

「…は？」

手伝いつて、いきなり何を言い出すんだろ？わたしは驚いて田を見開いた。田中さんはわたしと田を合わせて、にっこり歯を見せた。

「友達ふたり、助つ人で頼んでおいたんだけど、急にひとり駄目になっちゃったんだよ。バイト代もちゃんとお支払いしますんで。いやいや全然。駄目かね？」

なるほど、そういうことか、と納得しかけて頷いてしまった。けれどすぐにはっとして、おじまじと田中さんを見つめていると、ぱっと表情が明るくなつた。いつも以上にえくぼがくい込んでいる。

「ああ、ありがとうございます。うんうん、ごめんな、急でね。助かります。あ、じゃあ田佳ちゃんに代わるからね」

はじよ、と携帯を差し出される。わたしは何度もまばたきをして田中さんを見た。

助かつた助かつた、と言いながら、わたしに片手をあげた田中さんは、ほうれい線をえくぼと共に顔に刻み込みながら、店の裏手に消えてしまった。

『かんと立つてく。』

左手に握られた電話から、「おーー」と声が漏れてきて、慌てて耳に運んだ。

「あの」

『すげーな。いつも言っていたコウ「セツツで人だろ?』』

『うん。ついでか、敦司、来るの?』

『やうみたい』

『やうみたいて』

『あ、明日曜だしいわ』

電話の向こうで敦司が軽く笑った。

「なんか、『めん』

『別にいいよ。それ』…』

「それに?』

『心配だし』

「しん…」

『場所、教えて』

「あ、えっと」

またヘタクソな説明で敦司に弁当屋の場所を教えて電話を切った。

「はあ」

息を吐き出して携帯を尻。ポケットに入れた。

大変だ。いろんなことが一気に起ると、すぐ疲れれる。

父とふたりで暮らしていたときは、こんなに焦つたり、緊張したり、睡然とすることだってなかつたのに。

ひとつひとつ周りに何かが増えていくたび、予想もしないことが突然起る。

社会と…いや、それじゃ大きすぎるか。人と係わっていくって、こんなことなのだろうか。

面倒だけど、じきじきする。

はらはらするのに、わくわくする。

遠足の前日みたいな感じだ。

小学生の終わりから、もつと味わっていなかつた。しばらくぶりだ。久しぶりすぎて、どう対応していいのかイマイチよくわからない。

「大変だな」

飛び跳ねながら部屋に戻る。

言葉とは裏腹な自分の行動に、ふつと鼻先で笑いが漏れた。

20・人と係わつていへつて（後書き）

「敦司、アホ！」ちゃんと話すの巻

「もし…え？ 誰？ 弁当屋：あ、由佳の。ああすみません、こんばんは」

「いつも由佳が世話になつてます。迷惑かけてばつかじやないです
か？ かなりマイペースだし」

「何だか忙しいみたいで。彼…いや、違います。兄弟みたいなもん
で。最近由佳がこっちに出てきたんで一緒に暮らしてますけど」

「はい？ あ、河原…敦司です。はい？ 手伝い、ですか？」

「ええ、そうなんですか。バイト代…いや、そんなのはいいんですけど。夜中から、ですよね」

「えつと、わかりました。明日はバイトも休みだし、行つてみます。
いえいえ全然。あ、はい」

21 爪先立ちで、ふらふら

「うわー、カッコいいー！」

敦司到着後の部屋に響いた第一声は美月ちゃんのものだつた。

扉の前に立つ敷司はペニツと一礼して、どうしていいのか分から
ない顔をしている。

「アシシくん、だつたよね、いやこせりめんな、急にかり出したやつ

たが、じつはじつは、と手招きして部屋に促したのはアカハヤシだ。

美月ちゃんと田中さんふたりに機関銃のように話しかけられている敦司は、終始頭をぽりぽりとかいていた。

が、そこは敷司だ。「いえいえ、そんなことないです」「急なことで大変ですね」「できるだけのことはお手伝いします」なかなかのお手前でふたりの会話の相手をする。

わたしは敦司が到着してから一言も会話ををしていない。「あ、来た」と言つたきりだ。

「いつも由佳がお世話になっています」の保護者みたいなセリフが

敦司から出たところで、少しうつむいて、顔が熱くなつた。

思わずカズくんを見てしまう。にやにやしているカズくんの切れ長の目と視線が合つて、うつむいて、萎えた。

隠していたものを発見されてしまったときのような気分だ。

「由佳ちゃんいいなー。こんなカッコいい人と一緒に住んでるんだー！」

美月ちゃんはすごい。どんどん敦司との距離が近くなる。終いには容赦なくあちこちを触りまくつっていた。

小学生相手に少々顔を赤らめてる敦司は、困惑氣味に苦笑いを続けていた。

ただでさえ狭いところに五人が揃つてしまつたことで、部屋は異様な熱氣を帯び始めていた。

変に動搖していたわたしが、暑いと感じていただけかもしれないけれど。

「ちょっと飲み物買つてくる」

わたしは財布片手に立ち上がつた。怒つたみたいな声になつていた。

「あ、んじゃ俺も行く」

そう言つて腰を上げたのはカズくんだ。「え」と立つたままぼけつとしているわたしの横を通り抜けるときに肩を叩かれた。

「行くぞ」

「あ、はい」

条件反射みたいに返事をして、靴をはく。

振り返ると敦司と目が合つた。何か言いたそりに口が開いているけれど、「でね、アッシくん」美冴ちゃんにシャツの裾をつかまれて、動けずに入る。

うん、うん。美冴ちゃんに顔を向けた敦司は、微妙な笑顔を貼り付けたままでもう一度わたしを見た。

「ほら行くぞ」

カズくんがわたしの頭を軽く叩く。

「あ、じゃ行ってくる。みんなも何か買つてくれるね」

敦司の視線を背中に感じながら部屋を出た。

「何でカズくんまで出でたの？」

「悪いの」

「悪くないけど、別にあたしひとりで大丈夫だし」

「別に心配して一緒に出でてきたわけじゃないし」

「えへ、ですか」

「あの場にいると疲れるだら、美月ちゃんとアコちゃん、粗変わらずすうじいな」

くく、と笑つたカズくんは、歩きながら両腕を左右に振つて、ストレッチみたいな動きをしている。Tシャツの背中にプリントされたサルの顔が歪んで、笑つたり怒つたり泣いたりを繰り返す。

「あの子と住んでんだ」

「なんまりと顔を覗き込まれて、わたしは赤面した。しながら頬が膨らんだ。

「幼なじみで、敦司が先に東京に出てきたから。今は仮住まことせてもらってるだけで、その、別になんにもないし。それに」

「なんでムキになつてんの?」

「む、ムキになんてなつてないし」

「出でへるときも、心配やつだつたな」

また、くくくと笑う。

「そうかな」

「あんたのことが好きなんだろ」

「え?」

「からかい甲斐のありやうなタイプ」

「ちょっと」

カズくんの本性がだんだん見えてきた。やっぱり、相当なイジワルだ。

「だ、駄目だからね、敦司はすゞしい奴なんだから。いじめたら

「ぶ。いじめるとかねーし」

「ホントに、いい奴なんだから」

いい奴なんだから…何だろう。いい奴なんだから、いじめたら許さない、とでも言いたいのだろうか、わたしは。

カズくんには自分から男の人と一緒に住んでるなんて勢いでバラシテおきながら、実際敦司がやってきてそれをからかわれると、その事実を隠したくて仕方ない。

見せたくないものを見られちゃったみたいな感覚がビックリももやもやする。

なのに今度は敦司をからかわれると、それにもむかむかして敦司をかばつてみたり。しかも自分のことまで正当化しようと必死だ。

なんなのだろう、わたしは。どっちに付きたいのだ。

つていうか、何がしたいんだ、わたしは。

「あーーーー、もうー！」

「なんだよ」

「めんどくさい」

「じゃ、戻れよ」

「やうじやなくてー」

「また貰えつてー?」

「違うからー」

「コンビニでオレンジジュースとバークと缶コーヒーなんかを買つた。

美月ちゃん用に、カラフルなちひきのお菓子もこくつかごに入れた。

今夜は涼しい風が吹いている。

火照った顔を撫でる風は、イライラしながらでも気持ちがいい。両腕をあげてぐるぐる回りながら歩いた。

回るたびに、カズくんと東京タワーの姿が交互に視界に入つてくる。

カズくんは呆れ顔だ。タワーは、いつもどおりだ。

ムキになつてスピードを上げた。髪の毛の一本一本まで風にさらしたかった。

ふりふりになつてもまだ回つた。

「キサーにかけられた林檎みたいに、柔らかく、しつとつと、ぐちやぐちやになつてみたい。

それでもちやんと、自分でいられるだらうか。林檎みたいに、自分の味を保てるだらうか。

そのつち氣持ち悪くなつてきて、しゃがんだ。しゃがんだついでに寝転がつた。

アスファルトはひんやりしていて、気持ちがいい。

田を闊じると暗闇がぐるぐると回つていて、地面にゆつへつ吸收されていくようだ。

溶けて、液体になつて、染み込んでいく感じだ。

「おこ」

「気持ちわる

「あんだけ回ねば当たり前だろ」

「いのまま寝る

「はあ?」

急に敦司の顔が見たくなる。助けに来てくれないかな、と思つ。

なのに上から見下ろしてゐるカズくんに、抱き起こしてもうれないかな、とも思つてしまひ。

なんだ、この女の子みたいな気持ちちは

ふと、壁に描かれたお姫さまの絵を思い出した。三段レースの、ふりふりのドレスを着たお姫さま。わたしが描いた、乙女チックな、傾いた、バランスの悪いお姫さま。

「あはは」

「狂つたか」

「お姫さま、爪先立ちで、ふらふらしてんの」

「はあ?」

「あたしに似てるんだ」

「お姫さま? なんだよそれ。まさか今度はお姫さまだつことか言
うんじやねーだろーな」

「無理。死ぬ」

言えれば、どうなるか、さつきの「こと」で何となくわかつていた。「やめて」と言えれば、「やる」人だ。

寝転がりながら、しばらく待つてみた。

「じゃ、そのまま寝てろ」

そういうものでもないらしい。

わたしはしじぶしじぶ立ち上がり、背中と尻の砂をさらった。

カズくんの背中のサルに追いつく。真面目な顔でわたしを見ている。

可笑しくなって、その顔を叩いてやった。「いでー」サルの変わりにカズくんが声を上げる。

「なんだよ、起きたのか。寝てればいいのに」

「イジワルだね、カズくんは」

「甘やかさないと言え」

「ふーん」

夜空を見上げる。東京タワーの赤い頭が見えた。

わたしとカズくんが出てきてからの東京の景色も、じつと見ていたのだろう。

わたしは、どんなふうに映っているんだろうか。それともやっぱり、暗くて、光に紛れて、小さすぎて見えないだろうか。

「おーい」と赤い頭に向かつて手を振りたい気分だ。わたしはこじだ、と。

背後にいろいろ抱え始めたけれど、動いてるわたしはそれなりに頑張ってるぞ、と。

22・その前の選択

部屋に戻つて、わたしは真つ直ぐに敦司の隣に座つた。

それが普通のよつな、そうしなければいけないよつな、そんな気がしたからだ。

聞きたいことはすべて聞いてしまつたのか、美冴ちゃんはおとなしくなつて畳に寝転んでいた。眠そうだ。「おかえりー」と声を曰がとるんとしてこる。

「や」「せ」とは居なかつた。一階に戻つたのだね。

敦司は所在無げに壁に寄りかかつてあぐらをかいていた。隣に滑り込みながら「ただいま」と小さく囁つて、「おかえり」とそつけなく返事を返された。

他に言葉が出てきやしないかと見上げながら少しのあいだ待つてみたけれど、敦司は口を結んだまま、わたしをじっと見下ろしてゐただけだった。

「ほい」

とカズくんがジュース類を畳の上に広げると、美冴ちゃんが起き上がり、まずお菓子に手が伸びた。迷いなくウーロン茶のボトルを小さな手でつかみ、コクコクと美味しそうに飲んでいく。

わたしは「一々」に手を伸ばした。が、なにか間違つたような気分になる。

缶コーヒーを手にしてみてもしつくりこなくて、オレンジジュースのボトルを取つた。つかんでからもこれでよかつたのかと首をかしげる。

今わたしが身体に流し込みたいのは何なのだ？

お菓子とウーロン茶を手にした美月ちゃんの調子が戻ってきて、三十分くらいは美月ちゃんの話に三人で耳を傾けていた。

時々、似たような苦笑が浮かぶ。

しばらくするとユウコさんがやつてきて、「美月、もう寝なさい」と小さな頭をやんわり撫でた。

ふつくりした、けれど手の甲が遠由でも荒れているのがわかるユウコさんの手が美月ちゃんのしつとりした黒髪を揺らしていく。

わたしはほんやりとその様子を眺めていた。美月ちゃんの癖のない髪は、蛍光灯の明かりに幾度も反射した。

昔、これと同じような光景をどこかで見たような気がして、ああ父だ、と思い出す。

薄暗い茶の間の、蛍光灯の明かりを背負つた赤茶色の父の顔。うたた寝をしてしまつたわたしの頭に置かれた大きな手。

そのときの感触を思い出そうと目を閉じる。温かかったらうか、グローブみたいな手は重かつただろうか。わたしは、どんな顔をしていたのだろう。

父はもう、寝ただろうか。それともまだ、仕事だらうか。

美月ちゃんが一階に戻つてから、ヨウコちゃんとわたしたちは明日の作業のことを少し打ち合わせた。

「じかん、いつみつけたっておいてね」

三ウ「さんが一階に戻った。壁掛けの時計を見ると、十時になろうとしている。

美月ちゃんと四九二さんが居なくなると、途端に部屋はしんとする。ほんやりしながらも、居心地は悪かった。わたしは足の指を動かして、そこばかりを見ていた。

「明日、宜しくお願ひします」

最初に声を出したのは敦司だ。黒髪をかきながらペーントと頭を下げた。

「急で驚いたんじゃない？ パカパカと、あの通りだから」

茶色の髪をかきあげて、カズくんが言へ。細い目が、くこと下がる。

「ええ、正直」

「これからまたちょくちょくあるかもよ。パカパカと、気に入るとしつこいから」

「え、そつなんですか」

「うん」

微妙に緊張しているのだらつか、お互いに、話しながら髪の毛をいじりっぱなし。

敦司は通った鼻筋をかけて、カズくんは細い目で端をかけている。

わたしは、動かしていた足の指を無意識じきゆうとつかんでいた。

「あ、いいんですけど。でもこつも今日みたいに急に声がかかると参つやめますね」

「覚悟しておいたほうが多いかもよ」

「え」

「美月ちゃんにも相当嫉に入られかけたみたいだし」

「あはは。小学生ですよね？ すまつですね」

「俺もここに来たとき同じ感じだったよ。俺なんて結構避けられることが多いのにや、結構いなしに攻撃されたもん」

「やつですか」

「でもまあ、そのおかげですぐ慣れたナビ。つか今やるもーい人
だし」

「人が良さやうですもんね、じつ、見るから」

「はは」

「あはは」

ふたりの両手はもう畳に降りていた。

敦司はあぐらの股の間に、カズくんは身体を支えるようにして後ろへ。

わたしだけが、つかんだ足先から手を離せずにいた。

男同士の会話なんて近くで見ることもなかつたから、妙に真剣に見入つてしまつた。

しかも敦司とカズくんだ。なんだこの共演は、と尻がむずがゆい。なんだよ、二人して微妙に仲良くなつちやつて、そんなことを思つていた。

長縄跳びのロープの隙間を狙つように、会話に混じるタイミングを計つていただれど、再び睡魔に襲われ始めたわたしの視界は細くなる。

まぶたが落ちるたび、ぱつと田を見開き、鼻をすすつてみたり、頭をかいてみたりしていただれど、気づくとかくんと首が折れるという動きを繰り返してしまつ。

それでも途切れ途切れに続くふたりの会話を聞こいつと必死で堪えていた。

何度田かで敦司の肩におもこきりこめかみをぶつけた。意外に痛い。

ふつと鼻先で笑つて、毛布を投げて寄越したのはカズくんだ。

「だから道路で寝てくれば良かつたのに

「道路?」

カズくんの含み笑いの声の後に、ぶつけた肩の上から敦司の言葉が降つてくる。

「東京タワーではしゃぎすぎたんだろ」

カズくんは面白がり笑っている。

「そんなことない」

「滑るし」

「すべ……」

「転ぶし」

「ちよつと……」

「酔おわ……」

「あーーーー もうここの一

反射的に敦司を見上げた。黒い目が、やめひととしてわたしを見ていた。「なに?」と言つ顔だ。

「早く寝ろ」

茶色の髪をかきあげて、カズくんはまた笑った。ふわっと戻ってきた髪が額に垂れて、いい具合の形を作つたけれど、それに見惚れてる場合じゃなかつた。

わたしは毛布を頭からかぶつて寝転がつた。

毛布を通して、なんだか敦司の視線を感じる。

くすくすと聞こえるカズくんの笑い声に怒りながら丸まつていた。

鼻先に押し付けた毛布が次第に温かくなつてくる。目が冴えてしまつたようでも駄目だつた。相当疲れていた。

ふと目を開くと目の前に敦司の寝顔があつて、驚いて飛び上がつた。

部屋は電気がつけられたままだ。壁の時計を見ると、零時を過ぎている。

両隣を交互に見ると敦司とカズくんがいて、すっかり寝入つていた。

わたしはその中央で、飛び上がつた状態で尻をついていた。

「なんで真ん中…」

三人で寝るとさの、一番嫌なポジションだ。

どりやらわたしは、怒つておきながら速攻で眠つてしまつたらしい。

今この状況に困惑する。まさに川の字の真ん中だ。

一人に挟まれているというのが落ち着かない。

毛布を抱えてそろそろと前に移動して、壁に寄りかかってふたりを眺めた。

敦司は毛布に包まって、カズくんは仰向けに腹を出して眠つている。

ちょっと腰を浮かしてまじまじと寝顔を見てやると、一人とも揃つてまつげが長かった。そして口が開いている。

「ふ

ふつふつと可笑しさがこみ上げてきた。一人のまつげを引っ張つてやりたい気分だ。

だけど、色も質も違う髪の毛を撫で比べてみたい感じもある。なのに、立ち上がって蹴り飛ばしてやりたい気持ちにもなる。

二人はどういう反応をするだろ？。怒るだろ？か、笑うだろ？か、それとももつと別のリアクションをとるだろ？か。

それをわたしはどんな顔で眺めるのだろ？。その顔を作つてから、この表情でよかつたのだろうか、なんて悩むのだろ？か。

その前に、引っ張るか、撫でるか、蹴り飛ばすかの選択だ。

オレンジジュースを手に取つた。けれどやつぱりお茶にして少しだけ飲んだ。生ぬるくなつたほろ苦い液体は、胃にじんわりと染み入つた。

しばらぐ一人の寝顔を見比べていたけれど、結局なにもしなかつた。

そろそろと這いつくばつて二人の間に戻つた。

左右均等に幅をとる。

川の字を整えて天井を眺めていると、何故か安心するのだった。

一時過ぎてからやんに起された。

わたしたちは眠い目を擦りながら厨房へ向かつた。

ヨウコさんに似た体つきのヨウコさんのお友達のおばちゃんは、もう準備に取り掛かっていた。「おはよ」と言ひ言葉に、三人でペ

「うつと頭を下げる。

作業は順調に進んだ。

田中さんはとカズくんと敦司で調理をして、わたしと田中さんは
のお友達が出来上がったものから容器に詰め込んでいった。

敦司は田中さんに包丁使いを褒められていた。カズくんが言つ
たとおり、「うつでバイトしな」としきりに攻められている。

頼むからそれはやめてくれ、とわたしは唐揚げを容器に詰め込み
ながら頭のなかでぼやいていた。

そんなことになつたら、一人が厨房にいるあいだ、わたしはどん
な顔でカウンターに居ればいいのかわからなくなつてしまつ。

さつちに注文のメモを渡せばいいのか、迷つてしまふそつだ。

さつちに渡しても、それでよかつたのか、いつまでも悩みそうだ。

田中さんのお友達もやつぱりおしゃべりで、並んで作業をして
いるあいだ、しきりに話しかけられた。

わたしは曖昧に返事をしながら、敦司とカズくんの後ろ姿ばかり
横目に入れて、おばちゃんの声の隙間にふたりの声を捕らえようと
した。

けれどフライパンの中では弾ける油の音や調理器具が立てる金属音
なんかで声は打ち消されて、会話までは耳に届いてこない。

じきじき顔を見合わせて笑う姿を見て、三ウ「さんのお友達の声に「そうですね」なんて上の空で返事をしながらも、一人の様子が気になつて仕方がなかつた。

でもなんだか、いい気分だつた。

「よしー 終了ー。」

三ウ「さんのチェックが終わり、その大きな声とともに作業が終わつた。

銀色の調理台の上にたくさん積み重なつた弁当を見ると、何かを成し遂げた、みたいな気持ちになる。

べたついた身体は気持ち悪いけれど、すつきりする。

「す、す、す、久しぶりにこんなにいっぱいの弁当見たー。」

八時には起きて厨房に下りてきていた美月ちゃんも、調理台に手をかけてぴょんぴょん飛び跳ねて、嬉しそうだ。

わたしも美月ちゃんと同じことをしながら、喜んだ。敦司とカズくんは、揃つて腕を組んでいる。脂で顔がてかてかしていた。

十時半までには後片付けも終えていて、大量の弁当はパレットに積まれて業者が引き取つていった。

トラックの後姿を見送りながら、ぐんと伸びをする。

日曜の、空が青い。

夏休みの宿題を、一夜漬けで終えた気分だ。

朱色に戻つた東京タワーは、今日もジルの上から頭だけを覗かせている。

明るくなつたこの場所は、見えているだらうか。誰かに、この達成感を伝えたくて仕方がない。

黄色いエプロンを外して、振り回した。タワーに向かつて、「おーい」と叫んでみる。

返事の代わりに風が吹いた。汗ばんだ頭をふわっと撫でていく。

23・よくわかんないんだ

厨房での敦司とカズくんの会話には、東京タワーでのわたしの失敗談が出たらしい。思つたとおりだ。

弁当屋からの帰り道、敦司はカズくんから聞いたその話を、いかにも笑えました、みたいな口調でわたしに話して聞かせたけれど、見上げる横顔はたいして面白そつでもなかつた。

電車を降りて、中野に戻る。

この街に降りると、ほっとする。肩の力が抜けるというか何というか。

もんやりとした、いつものバスの匂いを割りながら坂を上る。

寝不足の身体は、少し重い。

テンションが上がりきってしまふと、あとは下がるだけだ。

少し高くなつた太陽が身体を温めて、眠気が次第に増していく。

アパートの部屋に戻り、扉を開く。

冷蔵庫の裏の、レンジの奥の、カーテンのひだの、どこか見えないところに潜んでいたような、こもった空気がとろりとわたしたちを出迎える。

一晩戻らなかつただけで、その匂いは新鮮だ。一瞬、知らない人の部屋に入り込んでしまつたよつた氣分になるけれどすぐに慣れる。生活臭は、安心する。

部屋を進んですぐに、群青色の座布団に覆いかぶさつた。

敷司がカーテンを引くと、薄暗かつた部屋は一気に明るくなる。

わたしが立てた埃は光に反射してゆらゆらと泳ぎ、窓が開かれる
とぐわんと動いて、あちこちに散らばつて消えた。

もうすぐお昼だ。

まもなく午後になる「う」と「う」の時間の田の光は、まつたつと氣
持ちがいい。すぐに寝れそうだった。

寝そべりながら見る前の家の側溝には、結構な勢いで伸びている
雑草が青々と茂つている。

いつも定位置に、白猫はいなかつた。

みやーう、と遠いところで声が聞こえたよつた氣がして耳を澄ま
していくうちに、とうとうとじってきた。

「うん」と寝るか

「うん」

そのあと敦司がなにか言つたような気がしたけれど、聞き返そうと思つてゐるうちに眠つていた。

目が覚めると、もう六時だった。

「じょじょ」と、小さな音量で声が聞こえてくる。

身体を動かしてその方向を見ると、リモコンを握んだままの敦司がぼんやりとテレビを見ていた。背中が丸まっている。

わたしの身体には毛布がかけられていた。腕を出し、よこしょと床に手のひらをつく。

ゆづくつと起き上ると敦司が振り向いた。おはよ、と言つと、口元を指差すので確認すると、よだれの跡がついていたらしく、かさかさと音が鳴つた。

群青色の座布団には、丸く濃く跡が残つていた。敦司の頭にも、珍しく寝癖が残つている。

テーブルの上に、飲み残しのコーヒーが入った白いマグカップがのつていた。インスタントコーヒーが入った瓶は、電気ポットの横に置かれたまだ。

わたしより、敦司のほうが疲れたんだわ。

外で、「飯を食べよう」とこいつになつて、顔だけを洗つて、おもてに出た。

敦司もわたしも、昨日のままの格好だ。緩いへぎみみたいに続く狭い小道を一人でぼんやり歩いた。

何となく服が身体にまとわりつくような感じはあるけれど、夕方の風が心地良くて気にはならなかつた。

まだ薄つすら明るい空には、同じように薄い雲が広がつてゐる。

駅までは行かず、大通り沿いのラーメン屋に入った。「何食べたい？」と聞かれて、普通に「ラーメン」なんて答えてしまつたけれど、失敗した。歌舞伎町のラーメン屋を思い出してしまつた。

あーあ、と思いながら店に入る。小さつぱりとしている。少しほつとした。カウンターも椅子もテーブル席も、脂じやなく、清潔さで光に反射していた。

店主は若くて生き生きしている。紺色のTシャツが、はち切れそうだ。「いらっしゃいませー」と大声をかけられて、敦司もわたしも急にしゃんとしてテーブル席につく。

ラーメンを啜りながら、ぽつぽつと話をした。

美月ちゃんとワカワカとの話をすると、敦司は困ったような顔で笑っていた。

東京タワーに行つた話は自分からほしかつた。敦司はそれとなく話題に出したけれど、わたしは意識的に受け流した。

カズくんの名前が出ると、何だか申し訳ない気持ちになる。

背負われた背中の感触を思い出して、ひやひやする。

話を逸らそうとしていることに気づいたのか、敦司も清潔なテーブルに片肘だけで頬杖をついて、弁当屋での話は打ち切られた。

妙な間に、二人同時に最後の餃子に箸が伸びた。

譲ってくれた餃子を割り箸に挟んで、持ち上げる。

ふざけて「あーん」と敦司の口元に運んだらその口が開いた。予想外の反応に、わたしのほうが驚いて、照れた。

黒い目は、餃子を通り越してわたしを見ている。

「ほい」と言いながら餃子を口の中に納めてやると、敦司は片肘をついたままもぐもぐと口を動かし、しばらくわたしを眺めていた。

「つまい？」

「うん」

「最後の一個だったのに」

「うん」

何だか非常にアンニコイだ。こんな敦司も、たまには、いい。

でもそれって反則だろ、なんて胸の内で毒づきながらもどきどきし、視線を外してラーメンの残り汁を割り箸でかき混ぜた。

ちひつと田を向けると、敦司は、カウンターに座る男の密の背中をぼんやりと見ていた。

後頭部の寝癖が立っている。

首から上だけ、敦司を幼く見せていた。

アパートまでの帰り道はもうすっかり暗くなつていて、一日前より心持ち欠けた月が浮かんでいる。

狭い道を、ゆっくりゆっくり歩いた。

同じくらじゅつくりと敦司の手がわたしの手に触れた。

敦司は黙つたまま前を見て歩いている。暗くて、その表情はわからぬ。湿つて、温かい手に力が入つて、わたしもまた、気づかれないくらいの強さでその手を握り返した。

街灯の少ない狭い道は、月明かりだけが頼りだ。

少し近くなつた敦司から、緩い風にのつて微妙に汗の匂いがする。

部屋に戻つて、敦司が淹れたコーヒーを啜つた。

開けた窓の外から、やつぱりみやーーつと声がある。

会話らしい会話がなかつたので、わたしは半分ありがたい気持ちになりながら窓際へ移動してその声に耳を凝らした。

みやーーつ…みやーーつ…

「じいだね。か細く、小わすれる声。わたしは手招きして敦司を呼んだ。

「猫みたいな声がする」

「じーから?」

「わかんない」

敦司が隣に来て、柵から身を乗りだした。砂利に視線を這わせて、あたりの様子を伺つている。

みやーーつ…

「あ、聞こえた」

「
ね

「ちつちえーな」

子猫かな

おやじの手

敦司とわたしの影が、砂利の上に伸びている。

しばらくそのまま、小ちなか細い声に耳をすましていたけれど、やがて敦司の影が横を向いて、頭ひとつ低いわたしの影を見下ろした。

見上げると田が合つた。何か言いたそうに口を開いている。

「なに?」

「おのれ」

「うん」

「好きなの？」

「え？ 何が？」

「弁当屋の、あの人」

拗ねたような、だけど泣き出しそうな顔だ。シャツの襟が少し、くたびれている。

「あの人って…カズくんのこと？」

「うん」

「好きなの…って、カズくんのこと？」

「うん」

「…カズくんのこと」

わたしは俯いた。

そんなの、ちゃんと考えたことがない。

「俺は由佳が好きだし、その、一応ちゃんと返事も聞きたいし」

「…うん」

「何ていうか、その、このままっこりの、結構しこじ

敦司も俯いた。砂利の上に伸びる影の肩が、揃つて小さく落ちていった。

改めて問われると、よくわからなかつた。

そもそも、どの辺の「好き」から、特別な「好き」に当たるのかがわたしにはわからない。

でも、敦司のわたしに対する「好き」は、特別な「好き」なんだといつぱりむしろ心地いい。

わたしは敦司が好きだ。でも、それが特別なのかと聞かれたら、「はいそうです」とは答えられない気がする。

敦司とこねと安心する。キスもした。緊張したけれど、穏やかでもあつた。

でもその先を求められたらどうだらう。よく考えなくたつてわかる。わたしには受け入れる自信がない。まだ、怖いのだ。

初めて舌手だったけれど、カズくんのことも嫌いじゃない。

好きってわけじゃないけれど、どうしてか気になる。少しずついいな、と思つといつを見つけて、勝手にじきじきしたりしてこる。

だからと云ひて、カズくらどどひつなりたい、ところの気持ちはない。それは敦司に対しても同じことだ。

でも、一人が離れていくのはイヤだ。このまま一人とも傍にいてくれればいいのに、そう思つてしまつ。

川の字で寝た、あの感覚だ。一人がいて、間にわたしがいて、それで十分だつたりする。

みんな、こんなことを思つたりするんだろうか。それともわたし가、ものすく欲張りなんだろうか。

恋とか愛とか恋愛とか、一体、みんなどんな気持ちでスタートを切つているのだろう。

「返事、出せる？」

敦司の影が横を向く。わたしは答えられなかつた。小さく、首だけを横に振つた。

わたしは、何一つ自分じゃ答えが出せないのだ。急に情けなくなる。

「そつか」

寂しそうな敦司の声に、胸まで苦しくなった。初めてのやるせない感情に、鼻の奥がつんとする。

敦司に世話をなつて、しんどいなんて言わせて、わたしは何をやっているんだわ。

敦司の優しさとか気持ちに頼つておいて、カズくんの髪や腕や背中に触れてみたいなんて考へてるわたしは、おかしいんじゃないだらうか。

一体、何様のつもりなのだ。

氣づいたら視界がぼやけていて、ぽつんと涙が落ちた。

慌ててぬぐつても、次から次に涙はじぶれて床に染みをつくる。

「由佳！」めぐ、責めてるわけじゃねーんだ、「めぐ」

焦つた声がして、わたしの頭に敦司の手が置かれる。こいつもの、いたわるような温かさだ。

違うんだ、やつじやないんだ、言葉には出さず、ふんふんとわたしは左右に首を振つた。

「泣くなつて」

敦司の手が、肩に下つる。うそ、うそ、うそ、今度は首を縦に振つた。

ひいっくと咽が鳴る。涙と鼻水で、口の中がしおぱかつた。馬鹿みたいだ。何を泣いてるんだ、わたしよ。

「汚ねー顔」

覗きこんだ敦司の黒い目が笑つ。無理に笑わせうとしているのが分かる。

わたしはむくれて、「わるやこ」と叫びて、少し笑つて、また泣いた。

引き寄せられて、ほわりと敦司の匂いが近くなる。

首もとの、ボタンの奥の白い肌。

一日経つた敦司の匂いは、この部屋に帰つてきたときと同じだ。居心地がよくつて安心する。

さすがしがみ付く。たぶん、わたしは酷いことをしてこらんだから。

このシャツを通した敦司が好きだ。でも。

白くて硬い肌に、直接触れたらどうなるんだろう。

カズくんに「回り」とをされたら、迷ひなるだだり。

「んなふうに『女心するだだり』か、『男と驕張するだだり』か、苦しくて逃げたくなるだだりか。

わからないうとばかりだ。

「敦司」

「ん？」

「『』あんね

「『』あん？　ああ」

「『』あん」

「『』

「よくわかんないんだ」

「……『』

みやー、『』…

またひとつ、小さなか細い声がした。

涙で濡れた敦司のシャツに顔を押し付けて、わたしはじょりく小さく小さく泣いていた。

24・だつて自分のこと

次の金曜日、マウルさんと風邪でダウンした。

お風過ぎから体調が悪かったらしく、店を閉めるひばりがつたりとしていた。額に手を当てる、相当苦しそうだ。

「明日は休んだほうがいいですよ」

心配したカズくんが声をかけると、マウルさんのやくぼが小さく
くい込んだ。

「でもねえ、一人じゃ大変だろ」

「明日は土曜だし、お密さんもそんなに多くないだろうし、大丈夫
です、たぶん」

さすがにわたしも心配になつて、けほけほと咳をするマウルさん
の背中を撫でた。

赤いエプロンの胸も腹も、心成しかしほんと見える。

「あたしも休みだし、お手伝いするから。お母さん、休んでいいよ」

パステルピンクのパーカーに身を包んだ美月ちゃんも、心配そうにヨウコさんの腕を撫でた。

「ありがとね、辛かつたらそいつするね」

いつもの元気がない。返つてくる言葉も普段の半分以下だ。

なのに大鍋を掴んで、洗浄開始の姿勢をとっている。

カズくんとわたしは、なかなか言いつことを聞かないヨウコさんの背中を押して、半ば強引に一階へ促した。

美月ちゃんも手伝ってくれて、三人で店の整理を終えた。

次の日、ヨウコさんはやつぱり熱を出した。

赤いエプロンをかけながら厨房へ現れたのだけれど、顔まで赤いヨウコさんに驚いたわたしとカズくんは、昨晩のようにな一人がかりでヨウコさんを一階に押し込んだ。

とりあえず店を開いて営業を開始した。美月ちゃんも時々一階から顔を出した。

平日の忙しさはなかつたので、助かった。六時過ぎに最後のお客さんを見送つてから、シャッターを下ろした。

「アホ」「セ、どう?」

「うふ、今眠ってる。まだおよつと熱あるけど、『」飯食べれぬし、大丈夫みたい」

厨房の奥の二畳部屋で、仕事を終えたわたしとカズくんと美冴ちゃんの三人で休んでいた。

「明日日曜だし、ゆっくり休めるといいんだけどね」

「うふ、何にもしなこと『』『』とく」

「美冴ちゃんも移らないよ『』『』をつけりょ」

「うふ、あたしは強いから平氣」

壁に寄りかかってお茶を飲む美冴ちゃんの、カモシカみたいにすんなり伸びた足が、スカートの下でぱたぱたと動いている。

『』のまま帰ってしまったのに、なんとなく『』が引けた。

たぶん、カズくんも同じ気持ちだったのだろう。「何か買つてく『』と言つて、『』『』出かけていった。

「アホ」「セ、本当に大丈夫かな」

「元気なヨウコさんしか見たことがなかつたわたしは、しほんで見えたヨウコさんの赤いエプロンが気になつて仕方がなかつた。

「大丈夫だよ、あたしと同じ。強いから、お母さん」

「そう?」

「うん」

「美月ちゃん、明日ご飯とか大丈夫?」

柄にもなく心配してしまつ。カレーだつてまともに作れないわたしが、「ご飯のことなど聞いて、何になるのか。

「全然。滅多にないけど、お母さんが風邪引く」となんて前からあつたし、いつも一人だし、平氣平氣」

「そつか」

やつぱり、ヨウコさんと美月ちゃんの二人暮らししなのだ。

聞いてから虚しくなつた。二人の生活は、自分でもよく分かつているはずだつた。

どちらかが寝込めば、片方がそれ相応の対処をするだけなのだ。

父も、寝込んだことは勿論あった。けれど、一日がつちり寝てれば妙な回復力で元気になっていた。

きっと、母さんもそうなんだろう。片親の、頑張ってしまつ強さと健気をよく知つてこる。

「でもお母さん、無理するからちょっと心配なんだよね」

「ううなのだ。無理するのだ。

「あたしもね、お父さんと一緒にんだ」

「え？ アツシくんと同じやなくて？」

「いや、じつに来る前、お父さんと一緒に暮らしてたんだ」

「あ、ううなんだ。じゃあ、あたしと一緒にだね」

「ここに」と、美月ちゃんが笑つている。「え、大変だね」「何があつたの」「お母さんは?」こんな話をすると、大抵こういつ返事が返つてくる。

美月ちゃんにはそれがない。同じ境遇だからだろう。美月ちゃんも少なからず、きっと同じことを言われているはずだ。

本当に、わたし大だつて『嵐』になる。「お父さんはなぜ死んでしたの?」そう聞いてみたい。

でも聞いたところどうでもないな。そんなこと、意味がないのだ。

「じゃあね、由佳ちゃんがいつもうちに来て、お父さん、寂しいかもね」

うん、と頷いて、はたしてそうだらうか、と疑問に思ひ。寂しいんだらうか、父は。

わたしが東京に出てきてからもうすぐ一ヶ月が経と感じているけれど、父はまだ一回しか電話を寄越していな。

わたしからは、一回だつて電話もしていない。

話下手な親子とは言え、ちょっと疎遠過ぎる。

でも気になつてこないわけじゃない。いつも、心のどこかで引つかかる。

一人で居てもひつそりとしていたあのテーブルで、タコとか、かつおのたたきとか、動かないものと向き合つて、野球中継なんかを見ているのだろうか。

ただでさえ薄暗いあの茶の間で。

それでも、敦司の家で眠り込んだわたしを連れて帰る必要もなくなったし、眠い目を擦りながらわたしの弁当を作る手間もなくなつたし、少しは清々してゐんじゃないだろ？

「由佳ちゃん、なぜひじにひじに出てきたの？」

「痛い質問だ。

「どうしてわたしが、東京に行きたいなんて言つたのだろう。

あの家から出たかったのか。一人で何かをしたかったのか。もつと別の世界を見てみたかったのか。

その理由にも当てはまるような気がするけれど、全部違つような感じもある。

父を残して、ひとりでひじにひじに出てくるだけの意味が、今の生活に、あるのだ。

「なんとなく、なんだ」

「なんとなく？」

「うそ。情けないこと」と

「ふーん、そうなんだー。ふーん

寝転がる美冴ちゃんの短いスカートから、ピンクのチェックのパンツが見え隠れしている。

「あたしね、将来ケーキ屋さんになりたいんだー」

「ケーキ屋さん?」

「うそ、ケーキ屋さん」

「弁当屋じゃないのか。あまりにも素直な小学生の夢にびっくりする。

「何でケーキ屋さん?」

「カラフルでキレイでしょ? 美味しいし」

「うそ、まあ」

「うそでね、弁当と一緒にケーキも売るんだ」

「うそで?」

「うそ。弁当もやって、ケーキもやるの。お母さんが弁当で、あたしがケーキ。お母さんができなくなったり、ケーキ屋さんだけにするんだー」

急に自分が恥ずかしくなった。

「こんなに小さな子でさへ、夢みたいな、希望みたいなものを持ちやんと持つていい。

それもなんとか、自分本位じゃなく、小さな頭と胸で、ちゃんと、親のことも店のことも考えてこられるのだ。

意図的だらうか、無意識だらうか。どちらにしても、偉いと思ひ。

「美月ちゃん、おーいね

「えー、なんでー?」

「ちやんとおかえりなんだね

「だつて自分のことだもん」

将来のことも、父のことも、自分のことすらわからぬわたしは、小学生以下だ。

「あ、カズくんおかえりー」

「ハベーの袋を抱えて、カズくんが帰ってきた。

カラフルなお菓子と、ウーロン茶と、色々な種類の栄養ドリンクが入っていた。

「いや、三九」「やべにやつて」

「ありがとー。やっぱりカズくん気が利くよねー。あたしゃつぱりカズくんと結婚しようかなー」

「予約されたやうわけ?」

「でもすぐおじさんになっちゃつもんなー」

「なんだよそれ」

「あははー」

美月ちゃんはやつぱりす」「。なんてこいつか……

「あ、由佳ちゃんとカズくんが結婚すればいいんだ。そしてお母さんじゅうと弁当屋やって。あたしはお菓子作るからさー。ね? いいと感わない?」

わくわく「やせとの娘なんだ。

「ね。そしてあたしはアシジくんと結婚すんの」

それは、なんか困る。

「由佳ちゃん、今度遊びに行つてもいい?」

「え? うん」

「じゃあ、いつなら大丈夫?」

世話好きでしつかりした、元ウナギをそつくりの小学生は、お菓子を頬張つてからウーロン茶をじっくり飲んで笑った。

わたしは曖昧に笑い返しながら、膝を抱えてもじもじしているだけだった。

「話好きな近所のおばちゃん」、玄関先で捉まつた父のよつ^{つか}いた。

カズくんは口の端を上げて、そんなわたしたちを面白がりに見ていた。

25・気づかないいちご

日曜日、敦司はバイトが入っていた。

わたしは弁当屋が休みなのですることがない。

「六時過ぎには帰るから」亭主みたいな言い方をした敦司を見送つて、久しぶりに部屋の掃除することにした。

腕まくりをして、伸びてきた髪を結わえると、だんだんその気になつてくる。

テーブルも群青色の長座布団も部屋の隅に追いやつて、メタルラックもすらしてみたりして、徹底的に、隅々まで磨きこんだ。

風呂もトイレも流しも、どこを見てもぴかぴかだ。

黙々と、何も考えずにできる地味な作業は、案外わたしに向いている。

満足して前髪をかきあげた額に、窓から入り込む風が涼しい。

カーテンが揺れて、取り残しの埃がすすと足の甲を越えていく。

慌ててあとを追いかけて、掴んで丸めて柵の向こうに放り投げた。

風に浮いた埃は一時その場で舞つて、長い時間をかけて砂利の上に着地した。

前の家の側溝の、数日前よりももう一回面積を増した雑草のなかに白い塊が見えたような気がして田を凝らすと、いつもの猫がうずくまつてこちらを窺っていた。

久しぶりの再会に、嬉しくなる。

ちしちしちと舌を鳴らして呼んでみると、ほんの少し身体をずらして、反応した。

もう一度呼ぶと、驚いたことに数歩前に出てきた。

やつと顔を覚えたか、と近寄ってくるのを期待して待つていると、猫は一声、「にゃあ」と鳴いただけだった。

ふん、とは思つたけれど、何となくやつれた感のある猫に同情したわたしは、食べかけのまま流しにおいてあつたパンを持ってきて、投げた。

猫は自分の数十センチ前に落下したパンに一瞬驚いて腰を浮かしきれど、やろりそろりと近づいて匂いを嗅いで、銜えたとおもつたらすぐどこかへ走つていった。

畳になり、フローリングに直に横になつてじろじろしていると、昨晩の、小さくてか細い声が至極近くで聞こえてきた。

這いつばつて柵に近づくと、丸い毛玉が砂利の上を転がっていく。

る。

ふわふわと頼りない、綿飴みたいなその正体は本当にひびきちゃな
子猫らで、数えてみると三匹いた。

白が一匹と茶トラが一匹。

「おおっ」と腰が浮く。わたしは柵を両手で握り締めて、互いにじ
やれ合づけの姿を凝視した。

子猫らは固い砂利の上で何度も転げ回り、絡み合ひ、倒したり倒
されたりしながら一生懸命遊んでくる。

やがて普通サイズの茶トラの猫がやってきた。目を開じて、傍ら
で「にゃあ」と鳴く。

親猫だらうか。一匹の子猫がそつくりだ。だとすると、父親はあ
の白猫か。いつかの声を思い出して、しばし、こやこやした。アイ
ツもちゃんと自分の世界を生きてこむのだと思った。

親猫らしい茶トラがゆっくり歩き出すと、じやれあつていた子猫
たちもほつとしたよつて移動を開始した。

砂利に足を取られて幾度も転んで、歩いているのか走っているの
かさえわからないその姿は、思わず手を差し伸べたくなるほどの頼
りなさだ。みじ惨めたくさえ見える。抱き上げて、目的の場所へ連れて
いつてあげたい。

けれど子猫らはそんなわたしの心配をよそに、おぼつかない足取
りでもちゃんと前へ進んでいくのだ。行くべき所へ、しつかりと。
健気に。たくましく。

わたしは柵から身をのり出して、小道の向こうに消えていく母子
らを見送った。

ぴかぴかの部屋をあとにして、駅へ向かった。

なにか、何でもできそうな爽快感がある。このチャンスは無駄に
できないと思った。

スニーカーの靴底で力強くアスファルトを蹴り上げて、前へ進み
ながら鼻歌など歌つてみた。

切符を買い、改札を抜け、電車に乗り込み、新宿で降りる。

相変わらず粘着力の強い、ガムテープみたいな匂いのする地下道
を小走りで抜けた。途中から全力疾走に切り替えて、歌舞伎町に出
た。

ガムのいっぱい付いた裏通りに入つて、あのラーメン屋の前に着
いたわたしは、鞄のなかの封筒を確かめてから深く息を吸い込んだ。
扉を開き、タノモウと言わんばかりの勢いで店内に入ると、何時
ぞやの店主とひとりの男性客がいて、怪訝な顔をされた。

店主に向かつて茶封筒を突き出し、「岩田さんに渡してください」と
声を上げる。少し、裏返つた。

店主が「ああ?」と言つて首を捻つたので、「痩せた、眼鏡の、
男の人」と説明を付け加えると、「ああ、痩せた、メガネの……岩

田ちゃん」と繰り返されたので安心した。

苗字だけは憶えていた。くしゃくしゃの薬袋に書いてあったよそよそしい他人の名前。

あの男がこの常連かどうかなんてわからないけれど、そんなことはどうだってよかつた。とにかく、金を戻した、という事実を作りたかった。

わたしは封筒を押し付けるようにして、一度だけ頭を下げて、店を出た。出るときに田の端に映ったカウンターの上の新聞紙は、やっぱり崩れ落すやうに山積みになっていた。

もしかしたら店主のふたりに納まってしまうかもしれない金のことを考えると少しばかりへこんだけれど、「いやこれでいいんだ」と思い込むこととした。

歩きながら、おかしがが込み上げてくる。「借りは返したぞ」と間違つているよつなかつてこいるよつな言葉を呟くと、本気で笑えた。

挑発的なホストたちの『眞の前で立ち止まる。あの田のように品定めしてみたけれど、どじが誰に変わったのか、もしくはまったく変わつていなかいのか、全然わからなかつた。

勢いついでに、新橋へ向つた。

SHI 広場の古本市で、『お菓子とケーキの作りかた入門』という本を買つ。

「バンダナを頭に巻き付けたおじさん」、「へえ、お姉ちゃん、ケイ作りするんだ」と言われたので「友達が少々」と答えると、「彼氏にでも作るのかね」と返されたので「未来的、お客様さんに」と教えてやると、首をかしげながらも頷いていた。

おつりを受け取る手が触れたけれど、悲観的にはならなかつた。

いつもの道順で、タワーへ向つ。

途中、弁当屋の様子を遠くから眺める。

シャツターが降りている店先は、ひつそりと、穏やかだ。二階の窓が開いていて、洗濯された赤いエプロンとピンクのスカートなんかが見えている。

通りの向こうを、美月ちゃんくらいの女の子が自転車に乗つて過ぎ去つていった。

東京タワーの前には、今日も入場待ちの列ができていた。

列を追い越して歩きながら、一人ひとりの顔をちらりと盗み見る。

これから中に入つていいくこの人たちは、足元のずっと下に広がる東京の街を見下ろして一体何を思つのだらう。

自分はちつぽけだとか、ここであの人と約束を交わしたんだとか、感傷的になつたりするんだろうか。

それとも、運命の人はどこにいるのだらうとか、いつかこの街を手中に収めてやるとか、もつと前向きで、勇ましい、強欲な、そんなことを。

思い思いの顔をして立ち並ぶ人たちに、面と向かつて聞いてみたかった。

タワーの真下まで行って、そつと触れた朱色の身体は、ひんやりと冷たい！

「ごあんごあん」という振動が伝わってきて、変にほてつたわたしの手を少しばかり冷めさせた。

人の列が少しづつ前へ進む。

タワーは今日も、誰も拒まない。見慣れた顔も、新しい顔も。

受け入れて、送り出して、その繰り返しだ。

青い空を突き刺して、でんと構えている。

中野に戻り、スーパーでカレーの材料を揃えた。レジに並びかけた体を翻して、青果コーナーへ戻り、林檎を手にしてカゴに収めた。

すり下ろしてカレーに混ぜてしまえば、林檎嫌いの敦司も気づか

なこうちに食べられるだらう。

アパートへ戻る途中、小道ですれ違ったおばさん」「ほひけは」
と声をかけられた。

わたしは驚いて、でも反射的に「ほひけは」と返したけれど、
にこにこ微笑むおばさんに見覚えはない。

後ろに過ぎて、角を曲がるおばさんの背中を見送つてから、もし
かして前の家の人かな、とほんやり思つ。

気づかないうちにわたしもまた、この辺の住人の一部になつてい
る。

玄関の扉を開ける前に、わたしは父へ電話した。

なかなか出ないので、切り口としたところ「どうした?」と焦つ
た声が漏れてきた。

どうしたって。思わず笑つてしまつ。

わたしからの初めての電話に驚いたのだろう。「何かあったのか」
と心配する父に、「今度の日曜に一日帰るから」と伝えた。

六月最初の日曜は、母の命日だ。電話もしない、いきなり家を出
てしまつ、そんな娘でも命日を忘れるほど薄情ではないつもりだ。

「そうか」と言った父はふつきらぎつに、でも気づかないほどに
軽い嬉しさの混じつた声で「気をつけて帰つてここ」と言って電話

を切つた。

部屋に入り、早速カレー作りに取り掛かつた。

林檎を摩り下ろし、カレーに溶かす。

ルーは、甘口と中辛を半々で混ぜた。もしかしたら甘すぎるかも
しないな、と思つたけれど、まあいや、と鍋の中身をかき混ぜ
た。

じつくつ、ゆつくり、焦がさないようになん重に

林檎はもう、カレーの色に溶け込んでいる。

しばらく流しに立て、無心にカレーを混ぜていた。

混ぜながら辺りの音に耳をすますと、換気扇の隙間から雀の鳴き
声が漏れてきた。ちらりと自転車のベルの音がして、「わやはは」
と子供たちの声がある。

かんかんかん、と階段を上の靴音がした。アパートの、誰かが帰
つてきたのだろうか。ぱたんとドアが閉まる音が聞こえてくるまで、
わたしあじつとして、耳を傾けていた。

夕日が差し込んでいた部屋は、いつのまにか薄暗くなっている。

ほんの少し差したオレンジ色の光が、床を四角く切り取っていた。
部屋にはカレーの匂いが充満している。

カーテンが揺れて、外から、別の匂いが入り込んだ。

「林檎、入ってるんだけど」

カレーを食べながら、敦司にネタばらしをした。

敦司は黒い皿を見開いて「え」と言つて、カレーに鼻先がついてしまうほどの距離で匂いを嗅いでいる。

「マジで」

「マジで」

「全然わかんね」

「鈍いね」

「まるやかだなとは思つたけど」

「美味しいでしょ」

「うん、美味しい」

わたしは得意になつてスプーンを口に運んだ。

林檎は丸々一個摩り下ろした。よつまじ鈍いな、とわたしは敦司の膨らんだ頬を眺めてにやけた。

帰ってきてからずつとカレーの匂いに包まれているわたしの鼻は、少し馬鹿になつているような気がする。わたしが食べる限り、目の前のカレーはカレーだ。でも何となく、林檎の匂いの比重が勝つている気がする。

今日も敦司は三杯おかわりをした。わたしも一杯、たいらげた。

夕食後、敦司が流しを片付けているあいだ、わたしはいつもどおり風呂のお湯を張つた。

ふんふーん、と流しから、カレーの匂いに混じつて敦司の鼻歌が聞こえてくる。

乾いたバスタブの底が、ゆっくり濡つっていく。一センチ、一センチ、水栓の銀色のチエーンを飲み込みながら徐々に増していく水かさを眺めていると、ふふ、と笑いが漏れた。

鈍いのは、わたしか。

皿を洗う敦司の隣りに立つて、布巾を手にした。

「敦司」

「ん?」

「ホントは気づいたでしょ」

「なにが」

「林檎」

「いや

「嘘だ

「そんな匂いはするかなーって思つたけど

「ふーん。鈍いね」

「まあね」

林檎の皮を生ゴミ入れに入れながらまだ鼻歌を続ける敦司の背中に声をかける。

「次の日曜、家に帰るから

「え?」

中腰のまま振り向いた敦司に笑いながら答えた。

「お母さんの命日だから、とりあえず一皿」

「ああ、やうか」

「うん」

皿の水滴は、布巾にじんわり吸い取られていく。

水分を含んだ布巾は少し、重さを増した。

群青色の長座布団にふたりで腰かけてテレビを見た。

時折カーーテンが揺れて、夜の風が入り込む。

昼間見た猫の話をするべ、へえ、と関心していた。歌舞伎町に行つたこと、東京タワーに行つたことは話さなかつた。

またそろりと入り込んだ風が、裸足の足を滑つていく。

ふいに、敦司がカーーテンに顔を向けた。わたしも、同じことをした。

懐かしい、夏草の匂いがする。

最終話・檸檬以上 蜂蜜未満で 林檎以下

一週間後の土曜の夜、わたしは敦司と東京駅の新幹線ホームにいた。

ヨウコさんに一時帰宅のことをそれとなく話すと、「しばらくゆつくりしてきなと言いたいところだけどね、由佳ちゃんがいないと大変だし。でもせめて前日に帰つてやつたらどうだい」と言われたので、お言葉に甘えたことにした。

由佳ちゃんがいないと大変だし、の言葉がほつくり嬉しい。

しかしそれも土曜の話だつたので、「いや、いいんです」と断ろうとしたのだけれど、一度言つたことはなかなか覆さないヨウコさんには敵わない。

お昼過ぎに、わたしは帰された。「じゃ、また月曜に」とカウンターで軽く頭を下げると、ヨウコさんと美月ちゃんに「いつてらっしゃい」と元気に肩を叩かれた。

相変わらず力強いヨウコさんの激励に、ずんと肩が下がる。肩を摩りながら小窓に視線を移すと、カズくんが横になつて笑っていた。

思わず手を振ると、カズくんの左手が上がつた。少し、頬が緩んだ。

結局、なんだかんだとやつて、夕方になつてしまつた。

敦司が帰つてきだからのはづがいいだれど、群青色の長座布団に被さつてござりして、いた結果なのだけれど。

毛玉みたいだった子猫らは、一回り大きくなつて砂利の上を転がつてゐる。

だいぶ、足腰もしつかりしてきた。どうやら、力関係も出てきたらしい。茶トラが強い。白猫二匹に果敢に攻め入つていく。たぶん、メス猫だ。

わたしは顎の下で両手を組んで、そんな猫らをぼんやり眺めていた。

「別にいいよ」と言つたのだけれど、敦司は東京駅まで着いてきた。

「もういいよ」とも言つたのに、入場券を買つてホームまで着いてきた。

何がそんなに心配なのか、わたしの隣でしきりに時計を気にしている。

これじゃ何かの歌みたいじゃないか、そう思つと可笑しくて笑いながら新幹線に乗り込んだ。

扉が閉まる直前に、「んじゃ行つてくる」と手を振ると、敦司は「おじさん宜しく」と手を上げて、わたしの頭をぽんと叩いた。

東京の灯りが、ゆっくり遠ざかっていく。

鈍行に乗り換えて、自宅付近の小さな駅に着いた。

開いた扉から外に出ると、一気に蛙の声が押し寄せる。人の声や車のエンジン音のほうが、その中に埋もれて僅かに聞こえてくる、といった感じだ。

東京とは違う、ひんやりとして澄んだ、夜の風。運ばれてくる強い夏草の匂いで、帰ってきたことを実感する。

プレハブ小屋みたいな待合室には、わたしよりも若い高校生くらいの男の子たちがたむろっている。これも昔、よく見ていた光景だ。面子は変わっているけれど、やつていることは同じだ。大人たちの視線を気にして何かを隠してみたり、女の子を目で追つて品評し合つたり。

通り過ぎたわたしも、きっと点数を付けられているのだろう。それともスルーか。まあどうでもいい。不思議なもので、前ほど気にならなくなっている。

古びた飲み屋街の細道を通り、旧国道に出て、神社の前を過ぎ、家までのおよそ一キロの道のりを歩いて帰った。

コンビニで缶ビールを買った。父への手土産のつもりで。自分用に買ったパック入りのコーヒー牛乳は、飲みながら歩いた。

ストロー越しに、弁当屋の味がする。

坂を上って、下る。

見えてきた自宅の窓の灯りが、ぼんやりと夜に滲んでいる。隣りの敦司の家の灯りは、夜道に薄く膜を貼っていた。

鍵のかかっていない玄関を開けて「ただいま」と茶の間にそろりと入っていくと、作務衣姿で寝転がっていた父が驚いて体を起こした。

「なんだ、明日じゃなかつたのか」

「その予定だつたんだけど、今日になつた」

「こきなりだな。何にも用意してないぞ」

「用意つてなにが」

「食つるもの、飲むもの、何にもないぞ」

「ああ、いいよ。お腹空いてないし。飲み物は買つてきたし」

缶ビールを差し出すと、父は素直に喜んだ。

わたしは真っ直ぐ仏壇の前行つて、母に線香をあげた。林檎、明日買つてくるから、心で呟いて、手を合わせる。立ち昇る線香の細い煙の向こうで、母は柔らかく微笑んでいた。

父が台所からかりんとうを持ち出してきたので、つまみながらテレビを見た。さすがにコーヒー牛乳とでは甘すぎて、お茶を淹れてずきずきと啜る。

テレビからの笑い声で沈黙は辛うじて免れていたけれど、なかなか会話は弾まなかつた。

同時にかりんとうに手が伸びる。一人とも一番小さなかりんとうを狙っていた。たいして食べたくもないのに手持ち無沙汰から伸びた手だ。

伸ばした手を引っ込んだ父は缶ビールを手にしてくいと煽った。かすかすと音がする。たぶん、もう入っていない。父の咽は動かなかつた。

わたしは摘んだかりんとうを一ぱりりと齧つて、そんな父の横顔を眺めながらお茶を啜つた。

「どうだ、向ひつけ」

テレビ画面が天気予報に変わったとき、父がぽつりと声を発した。

顔は画面を見たままで、耳だけに向ひに凝らしていく。

「それなりにうまくやつてるよ。バイトも見つけたし」

「バイト？」

「弁当屋で働いてるんだ。日曜以外、毎日。おじいちゃんがやつてゐる」

「やうか。敦司くんには迷惑かけてないだろ? な」

「かけてない、かけてない、全然かけてない」

「やうならこっそり、迷惑かけるよつなり考えてみよ」

「考えるつて?」

「こつまでも世話になつてゐるわけにいかないだろ?」

やうだね、呟いてわたしも天気予報に視線を移した。梅雨の季節がどうのこうの…気象予報士のお兄さんが何か言つてゐる。東京はまもなく梅雨入りするらしい。

「あのや、」

「なんだ」

ふいに聞いてみたくなつた。

「弁当作り、お母さんと約束したつて言つてたじゅん。あれ、何?」

「約束？　ああ……お前が学校に上がつたり弁当せ毎日わせびと作つてやつてくれつてな」

「ふーん……他こはつ？」

「ああ？」

「他こにお母さんと約束したことつてある？」

「ああ、こつぱこあるわ、あつすきて大変だわ」

「うれじと横になつた父は、片手で尻をかいてこる。裸足の足の深爪が、何だか痛そうに見えて田を逸らした。

「例えば？」

「例えば……夜更かしをせぬなとか、病氣になる前に医者に連れて行けとか……」

「あとは？」

「分からなうことがあつたらそのままにしておくなとか、優しい子になるよつことか……」

「……あとは？」

「素直ないい娘に育ててくれ、とか」

「……」

何だか、わたしのことばつかりだ。聞いているうちに、疲れてくる。わたしが疲れるのだから、父はもつと疲れるだろう。

「とにかくちゃんと見守ってくれってな。大人になるまで」

「…大変だね」

「大変だ」

たぶん、まだまだいっぱい約束したんだろう。にっこり微笑んで母はあんなところにいるけれど、なかなかどうして、強い人だ。

父はそれを聞きながら、母を見送りながら、どんなことを考えていたのか。今のわたしを見て、どう感じているのか。

とりあえずわたし长大になるまで、父と母の約束は続していくのは明らかだ。可哀想だが仕方ない。わたしもできるだけ、期待にこたえられるように頑張りたい。

今は初めてのことばかりで、いっぱいいっぱいだけれど。一つ一つクリアしていくば、何とかなりそうだ、とも思つ。

しばらくして父は立ち上がり、奥の自室に引っ込んだ。背中に向

かつて「おやすみ」といつと、「風呂に入つて早く寝り」と返事が返ってきた。

言われたとおり風呂に入り、一階に行って電気を点ける。

カーテンを引いて遠くを見ると、高速道路の車の列が緩々続いていた。勿論、東京タワーなんて見えない。

ベッドの上に、ぐるんと横になる。

睡魔はすぐにせつてきた。久しぶりの自分の布団は埃っぽくて、もつ何となく、懐かしいものになつている。

次の日、父は一旦事務所に顔を出さなければならぬことだったので、一人で遅い朝食を摂つてから、わたしは一人で母のお墓に向かつた。

途中、どうしても通らなくてはならない場所がある。あの、橋だ。

錆びた欄干の脇を全力で走り抜ける。

走れば走るほどあの田の息苦しが襲つてきて、田が回つそうなる。

転がるように駆け抜けて、数百メートルオーバーしてから息を整えた。

両脇が草で覆われた、石と土で固められた階段を上って、墓地に
出る。

青々と繁った木々に囲まれている靈園は日陰になつていて、時折
零れる木漏れ日が墓石をちらちら照らし出す。この一帯だけ空氣の
流れが違つて感じるから不思議だ。雀の声だけがする。静かだ。

母のお墓周りを綺麗に掃除した。無心に。黙々と。

墓石の脇に小さな青蛙がいた。水を垂らしてやるとびくつと体を
動かして、その咽を気持ち良さそうに震わせていた。

草むしりを終えて、ふつと息を吐いて立ち上がる。

腰に手を当ててぐんと体を反らして後ろを見ると、階段から父が
やってきた。

右手にペットボトルの水と、細い花束を握っている。左手に持つ
た新聞紙で顔の周りを扇いでいた。

「綺麗になつたな」

「見事でしょ」

ペットボトルと花束を渡されたので、わたしはプラスチックの花
立に水を注いで花をさした。

父はしゃがんでライターから新聞紙に火をつけている。毎年見て

いる姿だ。丸まつた背中を眺めながら、わたしは線香に火がつくのをじっと待つ。

土の上でちりちりと身を捩った新聞紙は、あつといつ間に小さくなつて、灰になつて、散らばつていく。

線香の半分をわたしに渡した父は、よつこりしょと立ち上がり、墓前に置いた。わたしも後に続き、同じことをする。

よこしょとしゃがんだ父の隣りに並んで、手を合わせた。

幸せになれますように　わたしはするい。いつも、こつ願つてしまつ。願われたご先祖様だつて、勿論母だつて、たまつたもんじやないだろつ。

大体、墓参りでお願い事をする」と自体、間違つてゐる。なのにいつも願つてしまつ。幸せになれますよつこ。いつかいい事がありますよつこ。前向きに生きられますよつこ。父が長生きしますよつこ。

よいしょと父が立つ。わたしはしづらくしゃがんで手を合わせたまま墓石を見つめた。

お母さん。呼んでみても、ここに母はいないう�がする。誰も、居ないような気がしてくる。

だつて願つても、叶つたためには無い。いくら願つても、なるようにならないのだ。自分でなんとかするしか。

それでも、手を貸してはくれないけれど、どこかで見てくれ

てゐるとは思つのだ。

何をやつてゐるんだ、と。もつとしつかりしなさい、と。

父の知らないわたしも、きつと母は見てゐる。橋の下のことわ、東京タワーでのことわ、恥ずかしいがキスのことわ。

そう思つとあつがたく、いそばゆく、でもムカついて情けなくもあり。それでも何となく前進はできるような感じがするのだ。

父の乗つてきた車に乗り、自宅へ向かつ。

橋に差し掛かつたところで窓を全開にして、「バカヤロー」と叫んでみた。大声で。腹の底から声を出した。

歩いている人が驚いて立ち止まつた。なんだなんだときよろきよろ辺りを窺つている。

「なにやつてんだ、馬鹿」

父に怒られながらへらへら笑つた。

途中のスーパーで買い物をした。

林檎と、お茶菓子なんかを適当に買つ。

「八時の新幹線には乗るからね」

「ああ」

茶の間にじりじりと寝転がった父の背中に声をかけて、わたしは仏壇に林檎を供えた。

甘い、蜜の匂いがふんとする。

茶色のテーブルを挟んで反対側に、わたしも寝転がった。

色褪せた、畳の向こうの父の顔。

浅黒い顔からは、もひつ寝息が立っていた。

はつと目が覚めると、縁側から光が差し込んでいて、部屋全体をオレンジ色に染め上げていた。

一瞬どこにいるのか分からなくなつて首を動かすと、壁の傾いたお姫さまがわたしを見下ろしていた。

テーブルに手をかけて父を覗き込む。ぐぐぐ、とくぐもつたいびきをかいている。何処かで見たような光景に、少し笑つた。

何となく起^こすのが可^か哀^{かな}そうだったので、わたしは静かに立ち上がりて仏壇の前に行つた。

線香に火をつけて、そつと手を合わせる。

「じゃあね」というよつは「いつきまます」みたいな気持ちで微笑む母に「随分いつぱい約束させたね」と笑い返して、備えた林檎の一つをもらつた。

Tシャツの裾で林檎を擦りながら縁側へ出る。

空は、いつか見た檸檬色の光で覆われていた。

遠くの山に深々と、夕日がじっくり沈んでいく。

一日の終わりに、ほつと温泉にでもつかるようだ。

蜂蜜みたいな輪郭は、けれど、それよりもあつさつとした滑らかさでとろりと山に溶けている。

縁側に置いた足は、夕日と同じ色に染まっていた。

「じんじん」と音がして振り向くと、父が起き上がるといひだつた。

大きなあぐびをして、座りながら腰をすりついている。

「お父さん、もつあらわ行くよ」

「ん? ああ、そつか」

わたしの隣に立った父は、むくんだ顔で空を見上げた。浅黒い顔もまた、夕日の色に染まっている。

林檎を持ち上げて、夕日に^{かざ}翳した。つやつと光って、朱色に変わる。

「お父さん」

「ああ?」

「上から、東京タワー見える?」

「見えるわけないだろ?が

「だよね」

縁側に届く、線香の匂い。

「お父さんさ、お母さん以外に、好きになつた人つている?」

「ああ?」

「一人同時に、好きになつたりとか」

「わあ、どうだつたかな」

鼻先に林檎を押し付ける。

蜜の香りがくすぐつたい。

「好きなやつでも出来たか

「わかんない」

「なんだそれ」

「初めてのことにばかりで、大変なんだ、いろいろ

「やうか」

「うふ

しゃりつと林檎を齧つた。

甘こよくな、酸っぱこよくな。

何かの味に、すく似てゐる。

「でもそれの積み重ねだからな

「やうなの?」

「初めてが無いと、次が無いしな」

檸檬色の空が、徐々に深さを増していく。

父の、群青色の作務衣が横を向いた。

「で、誰が好きなんだ」

父の奥で、母が笑っている。

「わかんないよ

「とにかく、電話くらい寄越せ」

「はいよ

「迷惑はかけるなよ、人様に」

「わかつてゐつて」

「彼氏が出来たら言つんだぞ」

「はいよ」

ポケットが震えたような感じがして、手を入れて携帯を取り出した。

赤く点滅している。留守電が、三件入っていた。

敦司と、誰だらけ。ヨウコさんか、もしかしてカズくんか。

わたしの生活は、少しずつ動き出している。

まだ中途半端なものがいっぱい。

仕事も、敦司のことも、カズくんのことも、父のこととか。

ちゃんと覚えて、自分で処理しなくちゃならないことが山ほどある。

面倒だけれども、まだまだ起らせる色はないことを、ひとつひとつ見ていみたいし、やってみたい。

将来の夢とか希望みたいなものも、漠然とで構わないから、抱えて歩いてみたいのだ。

「もうちょっと、あちで頑張ってみるか？」

「ああ」

「もう行かない」とやばい

「送つていいくから早く準備しろ」

うん、と返事をして、蜂蜜みたいな夕口に手を翳す。

林檎を齧る。しゃりっと固い。甘くて酸っぱい。

同じような気持ちを抱えて、わたしはまた、東京へ戻る。

最終話・檸檬以上 蜂蜜未満で 林檎以下（後書き）

最後まで田を通してくださいました皆様、どうもありがとうございました。

由佳の今後：できれば続きも書きたいな、とは考えています。

お声をかけてくださいましたぴよ様にお礼を。そして企画「元祖」一繕させていただいた作者様方に感謝を。温かい言葉をかけてくださいり、本当にありがとうございました。

拙作は、様々な「はじめて」を織り込みながら書いてきたつもりですが、「これからやつて来るはじめてに備えた前段階」って感じのお話にも仕上がったようです（笑）

若こづちは色々なことが初めてで、戸惑うことよりも迷うことよりも沢山あると思います。

ただ、数は減るにしても、いくつになつてもそれはやつてくると思います。

イキナリの初めでは本当に右往左往しますが、初めての積み重ねによって次へ進めると思うので、どうぞ逃げないで、受け入れて、チカラに変えていってください。

最後になりますが、読んでいただいて本当にありがとうございました。

また何か書き始めましたら、こちらのあとがきにて報告させてもらいますので、宜しければ覗いてみてください。

08・05・18 水沢 莉

「はじめての×××。」HPにリンクしてあるBBSで、各賞の投票が始まっています。

素晴らしい作品が沢山あるので、是非投票に参加してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8259d/>

檸檬以上 蜂蜜未満で 林檎以下

2010年10月9日01時18分発行